平成２９年度

実　　践　　集　　録

主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の

視点を生かした授業づくり

（１年次/３年計画）

高知県立日高養護学校

≪目　次≫

はじめに・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

Ⅰ　本年度の教育・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

Ⅱ　校内研究の取組・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5

Ⅲ　小学部の研究　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・8

Ａ組：阪本久世、田村咲樹、吉田暁
Ｂ組：石本理江、小島愛子、明神靖彦、山本明子、池内航大
Ｃ組：門田知佐、井上潤、北川千裕
Ｄ組：立間好枝、藤田彰、公文礼賀、谷拓紀

Ⅳ　中学部の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・34

１年：　永野千沙、大原康司、森野知佳、濵渦崇弘、岡本布美
２年：　井上さくら、酒井由美、入野律、森裕二
３年：　森山陽介、鎮西知代、日向晴彦、徳田毅、黒木彰子、前田紀生、宮川真由
　　山形和江、葛岡政彦
中越江美

Ⅴ　高等部の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・61

１年：清岡真史、筒井啓子、藤本信之、岡﨑幸代、清岡隆子、江口正人、土居実里
　　前田朝子、森岡雅子
２年：渡邊真依子、宮中浩充、公文菜子、山口洸明、高橋めぐみ、中川利彦、大石真也
３年：河路恭太、松田紀美代、藤野陽子、前田美奈、長尾哲也、土居颯之介
藤田和佐子、平地正幸、石見聡貴、上元孝泰、西村健太

Ⅵ　寄宿舎の研究・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・89

橋本章、片岡和砂、川口加代、河野紳、仙波真由、竹内由紀、中澤忍、松本一孝
武内啓輔、田中秀典、中村智美、西野嘉晃、藤岡正子、山岡あゆみ、浅野淳子、大野淳子
岡林江里子、岡本雅代、勝原真紀、松本有美子、矢野絵美梨
浦岡佳史、久保田啓介、櫻木香織、内川隆一、佐藤証、藤本佐智子

Ⅶ　本年度の研究のまとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 106

はじめに

平成２９年４月、特別支援学校学習指導要領等が公示されました。新学習指導要領では、「主体的・対話的で深い学び」の視点からの授業改善、カリキュラムマネジメントによる学校改善を両輪として、「社会に開かれた教育課程」の実現を目指し学校経営を進めることが必要と提起されています。このカリキュラムマネジメントについては、全教職員が「カリキュラムマネジメントの実現」の必要性を理解し、日々の授業等についても教育課程全体の中での位置づけを意識しながら取り組むことが必要です。

全国の特別支援学校においては、社会のニーズや教育現場の課題に柔軟かつ迅速に対応しながら、障害のある子ども一人一人の教育的ニーズに応じた教育の実現に向け、研究や研修が進められています。

本校においても、平成２６年度からキャリア教育の更なる充実を学校教育の重点目標に据え、児童生徒のキャリア発達をどう育てるか、キャリア発達を育てるための授業改善はどうあるべきか、等について３年間の研究に取り組んできました。この実践研究で、各学部や寄宿舎においては、児童生徒の日々の授業や生活場面における指導支援に本校独自のキャリア発達段階表を活用し、授業改善の方向性や具体的な改善点を見出すことができました。また、平成２８年度には新学習指導要領の導入に向け「教育課程検討委員会」を設置し、カリキュラムマネジメントの視点で学校全体の構造や取組を評価し、教育課程の改善充実についての検討も行いました。

本年度からは、「主体的・対話的で深い学びの視点を生かした授業づくり」を校内研究の統一テーマとして３年間の実践研究がスタートしました。特に校内研修では、高等部の各教科等の公開授業、中央から講師を招聘しての講演等を実施し、教職員一人一人が研究テーマを意識して、今日的課題への対応と今後の方向性について広い視野で学び、日々の実践へとつなぐことができました。また、カリキュラムマネジメントは、全教職員が参画し学校の特色を生かしていくことの大切さを共通理解しました。

私たち教職員は、子どもたちが将来、自分の人生を豊かにしていけるよう「よりよく生きる力」を日々の教育実践を通して、子どもたちに身につけさせなくてはなりません。そのためには、教職員が課題意識をしっかり持って、子どもたち一人一人の資質、能力の育成を目指した授業づくりを行うことが不可欠です。今後も、教職員一人一人が専門性を高め、「チーム学校」として様々な教育課題に取り組み、子どもたちが「よりよく生きる力」を身につけ「豊かな社会生活」が実現できるよう、本校教育のますますの充実を期待しています。

おわりに、校内研修において貴重なご指導ご助言をいただいた、群馬大学教授　霜田　浩信　先生、高知大学教授　喜多尾　哲　先生はじめ関係の皆さまに厚くお礼申し上げますとともに、この実践集録の編集を担当された研修部の先生方のご労苦に深く感謝申し上げます。

平成３０年２月　　高知県立日高養護学校長　　渡辺　豊年

Ⅰ　本年度の教育

１　校訓

明るく、正しく、たくましく

２　教育方針

子どもの学ぶ楽しさや、生きる喜びを育てる教育を通して、目標を達成する。

３　教育目標

（１）児童生徒一人一人の能力・適性に応じた教育活動を充実させる。
（２）児童生徒の自立する力をつけ、社会参加に向けての適応力を高める。
（３）家庭や地域、関係機関と連携し、安全で安心できる学校づくりを進める。

４　目指す学校像

〇子どもたちが楽しく学べる学校
〇保護者が安心して子どもを任せられる学校
〇地域の人々が振り返ってくれる学校
〇教職員が意気に感じて仕事ができる学校

５　経営目標と具体的方策

（１）児童生徒一人一人の能力、適性等に応じた教育活動の充実（知・徳・体）
ア　個別の指導計画、個別の教育支援計画に基づく一人一人に応じた指導内容、指導方法の創意工夫を明確化する。
イ　児童生徒の発達に応じた教材教具の提供による指導内容の充実とその評価を実施する。
ウ　地域の資源を活用した社会体験学習や交流活動を積極的に実施し、よりよく生きる力を育成する。
（２）　教員の専門性の向上（知・徳）
ア　カリキュラムマネジメントの視点で学校全体の構造や取組を評価するシステムを構築し、全教職員で共有化する。
イ　児童生徒のキャリア発達を促す指導支援の充実とその評価を実施する。
ウ　各クラス、教科、学習グループで年間１回以上の公開授業を実施する。
エ　教職員全員参加と地域に公開した校内研修の実施による専門性の向上を図る。
（３）　進路指導の充実（知・徳）
ア　小・中・高・寄宿舎の連携による、一貫した系統的、組織的な指導の実施及びキャリア発達段階表の点検評価を実施する。
イ　関係機関との連携によるアフターケアの現状と課題を把握し、本校独自の在り方を構築する。
ウ　各地域の福祉サービス事業所や行政による保護者との情報交換会を実施し、進路に関する理解啓発を図る。

（４）家庭、地域との連携及び障害者スポーツの推進（徳・体）

ア　運動、スポーツを通して、社会性や豊かな人間性を育み、共生社会の実現を目指す。

イ　スポーツ指導員によるスポーツ体験教室を地域にも公開して実施する。

ウ　保護者や関係者への理解啓発を行い休日における「総合型地域スポーツクラブ」の利用を向上させる。

エ　防災教育の充実と家庭、地域と連携した防災訓練を実施する。

（５）特別支援教育のセンター的機能の充実

ア　地域の保・幼・小・中及び高等学校の教育相談、校内研修等への支援の充実を図る。

イ　専門性の向上による多様化への対応と支援体制の強化を図る。

ウ　専門分野における校内の教職員を活用した地域支援体制の構築を図る。

（６）学校運営全般（チーム学校として）

ア　不易流行の精神で業務の見直しを行い、組織力を強化する。

イ　組織コンプライアンスの遵守を徹底する。

ウ　外部専門家と連携した専門的知識技能の向上を図る。

エ　教職員相互の思いやりと信頼により、ゆとり時間を確保する。

オ　本校独自の教育コンテンツの提供及び発信を行う。

6　平成 29 年度　高知県立日高養護学校　学校経営構想図

教育重点目標

(1)基本的生活習慣を身につける
(2)能力･適正に応じた教育活動の充実
(3)社会参加に向けての適応力
(4)安全で安心できる学校づくり
(5)よりよく生きる力の育成

校　訓

明るく
正しく
たくましく

教育方針

子どもの学ぶ楽しさや、生きる喜びを育てる教育を通じて目標を達成する。

自己実現を図り、社会に貢献できる人間の育成

各教科等を合わせた指導
自立活動
特別活動

知
学ぶ楽しさを味わい、意欲的･主体的に学ぶ。

徳
それぞれが認め合い、仲間と共に生きる喜びを感じる。

体
楽しく運動し、自立と社会参加に向けた体を作る。

クラブ活動
関係機関との連携
居住地校交流

強み

○小学部から高等部まで、さらに寄宿舎での一貫した指導が可能
○生活単元学習や作業学習など知的障害の特性に合わせた特別な教育課程を編成した教育が可能

めざす児童生徒像

小学部
自分のことは自分で行い、みんなと一緒に活動する児童

中学部
個々の持てる力を高め、生活に必要な力を身につけた生徒

高等部
自らの力を発揮することによって自己実現を図り、社会的自立につながる力を身につけた生徒

寄宿舎
仲間と生きる喜びを共有し、生活自立や社会自立ができる力を身につけた児童生徒

弱み

○各学部の系統的な指導内容の整理が不十分
○キャリア教育の視点を日々の教育実践まで十分落とし込むことができていない
○居住地域における同世代とのかかわりが少ない

チーム学校として
平成 29 年度の重点的に取り組むこと

何ができるようになるか

1　児童生徒一人一人の能力、適性に応じた教育活動の充実(知･徳･体)

(1)一人一人に応じた指導内容、指導方法の創意工夫
(2)指導内容の充実と点検評価
(3)よりよく生きる力の育成

何を学ぶか

2　教員の専門性の向上(知･徳)

(1)カリキュラムマネジメントの視点で、教育課程を軸とした学校教育の改善充実
(2)キャリア発達を促す指導支援の充実とその評価
(3)公開授業の実施
(4)地域に公開した校内研修を実施

3　進路指導の充実(知･徳)

(1)小･中･高･寄宿舎の、一貫した系統的、組織的な指導及びキャリア発達段階表の点検評価
(2)アフターケアの本校独自の在り方を構築
(3)保護者への理解啓発

どのように学ぶか

4　家庭、地域との連携及び障害者スポーツの推進(徳･体)

(1)運動、スポーツを通し、社会性や豊かな人間性を育み、共生社会を実現
(2)スポーツ体験教室の地域公開
(3)休日における「総合型地域スポーツクラブ」の利用向上
(4)防災教育の充実と家庭、地域と連携した防災訓練の実施

5　特別支援教育のセンター的機能の充実

(1)地域の保･幼･小･中及び高等学校の教育相談、校内研修等への支援の充実
(2)多様化への対応と支援体制の強化
(3)校内の教職員を活用した地域支援体制の構築

Ⅱ　校内研究の取組

【平成 29 年度の研究テーマ】
「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点を生かした授業づくり」
（１年次/３年計画）

１　平成 28 年度までの研究成果と課題

平成 26 年度から 28 年度までの３年間、キャリア教育を学校教育の中核に据えるという新たな学校重点目標が示された。これを受けて、校内研究では「Ⅰ知的障害教育の専門性を高め教育の質を上げる」「Ⅱ小・中・高・舎における一貫した教育を行うためのシステムを構築する」という点を目指して取り組み始めた。前年度までの成果と課題も踏まえて、研究テーマは、第Ⅱ期「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」（３年計画）と設定した。

１年次は、各学部と寄宿舎で ICT 研修会を通した教材教具の工夫、外部講師を招聘した研究授業による授業力の向上、キャリア発達段階表(2012 試案)の活用促進という３つの内容に取り組んだ。２年次も同様の取組を継続し、タブレット端末を活用した指導の展開やキャリア発達段階表の活用を促進することができた。さらに、キャリア発達段階表が小・中・高の連携のためのよりよいツールになるように各学部で検討を重ね、2015 版として改善したキャリア発達段階表を作成することもできた。

平成 28 年度は、第Ⅱ期「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」（３年計画）という研究テーマを設定した最終年度に当たり、これまでの成果を土台に、キャリア教育の視点に立って日常的に授業研究を進め、児童生徒一人一人の卒業後の自立に向けてキャリア発達を支援し続けていきたいと考えて取組を進めた。成果としては、ＩＣＴ研修会や教材教具の発表の継続により、教材教具を工夫した指導の展開につなげることができた。キャリア発達段階表は 2017 版として、さらに改善を進めることができ、授業研究の際は、キャリア発達段階表との関連付けを明確にすることにより、児童生徒のキャリア発達を支援する視点からの授業づくりを進めることができた。キャリア教育は、「教育の質」や「授業の質」を高める上で有効な視点であったと考える。今後は次期学習指導要領改訂が迫っているため、その方向性に合わせた、更なる教育や授業の質の向上を目指して取り組む必要がある。

２　平成 29 年度の校内研究方針

（１）校内研究の目的

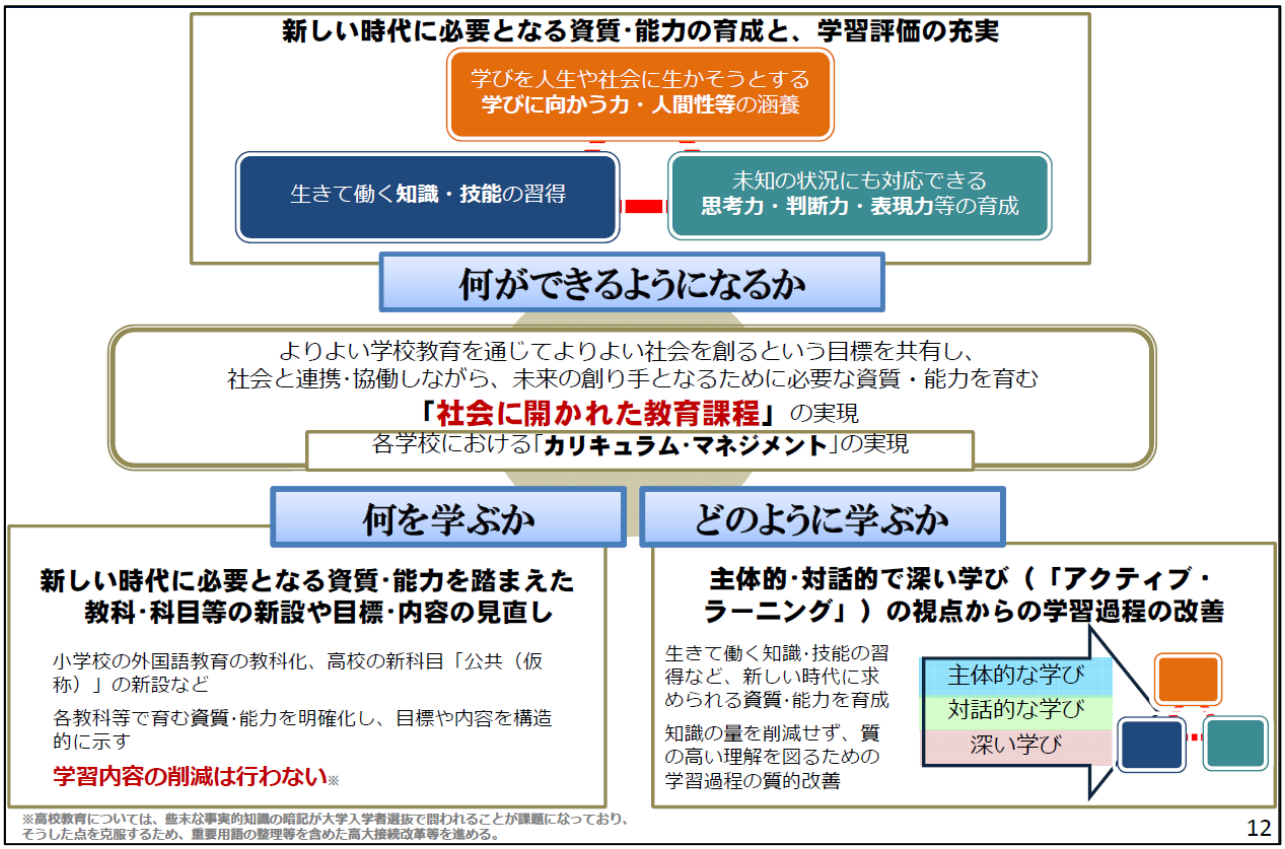
次期学習指導要領改訂に向けて、円滑に移行するために、その中心的課題のひとつである「主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善」に取り組む。今年度は特に研究の初年度であるため、基礎的な研修により理解を深める。

（２）取組内容

学部・寄宿舎ごとに、次期学習指導要領改訂のポイント（表１）や高知県授業づくり Basic ガイドブック（平成 28 年３月　高知県教育委員会）等を参考に、テーマを決めて取り組んだ。

小学部：子どもがわかって主体的に学ぶ授業
中学部：ユニバーサルデザインに基づく授業づくり
高等部：アクティブラーニングの視点を生かした社会的自立を目指す学習
寄宿舎：豊かな寄宿舎生活を目指して～認め合う気持ちを育む仲間づくり～

表１　次期学習指導要領改訂の方向性　育成すべき資質・能力の三つの柱



新しい学習指導要領の考え方―中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ―　**文部科学省 HP より抜粋**

（３）年間計画

月	日	研修内容
4		学部研究テーマ等の協議
5	22	学部・寄宿舎ごとのテーマ・研修計画締切
	31	●第１回校内研修会　講演会「ＡＬの視点について」　講師：高知大学喜多尾哲教授
7		アセスメント①　「キャリア発達段階表 2017 改訂版」記入
8	30	●第２回校内研修会　特別支援学校教育課程研究集会「新学習指導要領説明会」　高知県教育委員会
11	1	●第３回校内研修会　全校授業研：高等部　助言：高知大学喜多尾哲教授
11	2	●第４回校内研修会　人権研修会「いじめ防止について」　講師：人権教育課三木守チーフ
12	25	●第５回校内研修会　講演会「ＡＬの視点を生かした授業づくり」　講師：群馬大学霜田浩信教授
1	5	●第６回校内研修会　人権研修会「虐待防止について」　講師：児童相談所公文須雅課長
2	2	実践集録原稿締切
2	23	●第７回校内研修会　実践研究発表会
3	19	●第８回校内研修会　県外等出張の報告会
3		アセスメント②　「キャリア発達段階表 2017 改訂版」記入

学部・寄宿舎ごとの研究日は月１回計画し提案した。詳細は各部署の研究経過・研究計画参照。

ＡＬ＝アクティブラーニング

【資料】

高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（2017 改訂版）

※活用目的：日々の学習や寄宿舎生活がキャリア教育のどの能力と関連しているのか確認し、系統的なつながりのある指導に活かす。

			小学生		中学生	高校生
キャリア発達の段階			生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
能力領域 ※1	※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力
（	人間関係形成・社会形成能力（自己理解・自己管理能力	人とのかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。		自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。
		集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
		意思表現	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
）		場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
	課題対応能力／キャリアプランニング能力	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
		社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
		金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
		働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
		習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。		職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。
		夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
		やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもち、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
		進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
		目標設定	自分のことは自分で行おうとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
		自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
		自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
		自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対しての対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1＝国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より　※2＝中央教育審議会答申(平成 23 年 1 月)より

Ⅲ　小学部の研究

小学部テーマ「子どもがわかって主体的に学ぶ授業」

１　はじめに

本年度は、全校研究テーマを「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点を生かした授業づくり」に設定した。昨年度の小学部の研究は、実践集録で、児童のキャリア発達を促す生活単元学習の授業づくりに取り組み、一定の成果をあげることができた。そして、児童や学級の実態に応じた「育てたい力を明確にした授業づくり」を追求していくことが今後の課題であるとまとめられた。本年度は、新しい全校研究テーマの下、学部のテーマを「子どもがわかって主体的に学ぶ授業」に設定し、全学級が生活単元学習で取り組むことにした。学習の中では、子ども達につけたい力は何かということを考えるとともに、子ども達自身が自分で考え、判断し、工夫できるよう促すための手立てに焦点をあてて日々の授業を行うこととした。

その進め方として、ＡＰＤＣＡ（Assessment：実態把握→Plan：計画→Do：実施→Check：評価→Action：改善）のサイクルに沿って教材教具や環境づくりを工夫した授業改善の方法を取り入れることとした。

また、キャリア発達段階表の活用促進の面から、児童の評価や授業の計画・評価などの際には、キャリア発達段階表の活用を継続している。

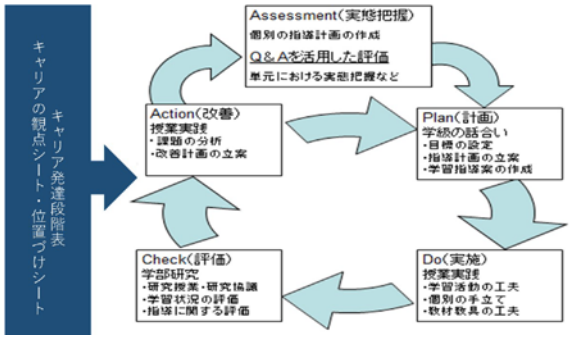


図　ＡＰＤＣＡサイクルの流れ

（※本年度からキャリア発達段階表は、2017 版に改訂）

２　研究経過

年間の研究経過は、１学期に「新しい教育課程と学習活動Ｑ＆Ａ」（以下はＱ＆Ａとする）とキャリア発達段階表の２つを活用して児童のアセスメントを行ったり、各クラスの教材教具の紹介を行い、情報交換をしたり共有しあったりした。その後、各学級が年間１回の研究授業とビデオ録画を活用した研究協議会を行った。研究協議会では、学部のテーマに沿った生活単元学習という視点から様々な助言や意見を得て、授業をとおして子ども達につけたい力、教材教具や学習環境で工夫したり改善したりした点、子ども達が自分で考えたり判断したりするための手立てや場面の設定などについて意見を深めていった。

児童のアセスメントについては、Ｑ＆Ａを活用して７月と３月に評価をし、課題を整理した。同時に、キャリア発達段階表を活用して児童のキャリア発達を確認した。

各学級の実践は「３　授業例」で、小学部全体のまとめについては「４　おわりに」で述べる。

期　日	内　　容
5/12(金)	第１回学部研　・研究テーマ･方法・年間計画について協議 ・教材庫の教材教具と共有フォルダの教材データについて周知 ※学部会において学部研究テーマの確認
6/6(火)	第２回学部研　・授業研究の進め方について確認 ・各クラス、教材教具の紹介

7/4(火)	クラス研究・ キャリア発達段階表(2017)を活用した児童のキャリア発達の確認① 「新しい教育課程と学習活動Ｑ＆Ａ」を活用した児童の実態把握①
10/2（月）	・小学部の研究授業の日程について確認 ・高等部公開授業の参観体制について
10/27(金)	第３回学部研　生活単元学習の研究授業・研究協議 Ａ組　単元名「おたのしみハウスで遊ぼう」
11/10(金)	第４回学部研　生活単元学習の研究授業・研究協議 Ｃ組　単元名「ぼくだけのスペシャルべんとう」
11/17(金)	第５回学部研　生活単元学習の研究授業・研究協議 Ｂ組　単元名「サンドイッチを作ろう」
12/5(火)	第６回学部研　生活単元学習の研究授業（11/29）・研究協議 Ｄ組　単元名「学習発表会に向けて～育てた野菜の作品展を開こう～」
1/5（金）	第７回学部研　・実践集録原稿（研修部）の検討 クラス研究
1/22（月）	実践集録原稿(Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ組)のまとめと報告
2/6（火）	第８回学部研　・実践発表者の検討 ・本年度の反省 ・教材データの保存、教材庫の整理
3/6(火)	第９回学部研　・本年度の取組の総括 ・30 年度に向けて,テーマと方向性 キャリア発達段階表(2017)を活用した児童のキャリア発達の確認② 「新しい教育課程と学習活動Ｑ＆Ａ」を活用した児童の実態把握②

３　授業例

（１）　Ａ組「いろいろな活動に取り組み、好きなことやできることを増やす遊びの取組」

ア　取組にあたって

（ア）　はじめに

本学級は小学部１年生の女子１名と男子２名で構成されており、そのうち２名は自閉症を併せもっている。また、医療的ケアが必要な児童と難聴の児童がいる。身近な日常の場面では写真カードや簡単な声かけに応じることもあるが生活や学習面で常時支援が必要な児童、ジェスチャーなどの視覚支援や周りの状況から判断して活動できる児童と認知面の実態には幅がある。初めての場所や見通しがもちづらい場面などで不安定になることも多いため、１日のスケジュールカードなどの視覚支援を行い活動している。基本的生活習慣や身体づくり、遊びなどの生活経験の少なさ、集団での活動など様々な面で課題があり、それらの基礎的な力をつけていけるように、以下のように学級目標を立てて一年間の取組を行った。

・たくさん身体を動かして、健康な身体をつくる。

・基本的な生活習慣を身につける。

・いろいろな活動に取り組み、好きなことや自分でできることを増やす。

・集団での活動や場所に慣れ、教師と一緒に参加できる。

生活単元学習の取組では、変化させやすい素材を使った感触あそびや簡単な作品作り、いろいろな体の動きができる遊び、興味をもちやすい遊びや好きな遊びを通して、好きなことを増やす、友達と一緒に遊ぶ、時間いっぱい活動する、自分の好きな遊びや活動を選ぶ、などの力を育てたいと考えた。

研究については、小学部の研究方法に沿ってＡＰＤＣＡサイクルで取り組み、日々の授業を振り返り授業改善や教材教具の工夫を行った。

（イ）　生活単元学習の年間計画　（表１）

１学期				２学期				３学期		
４月	５月	６月	７月	９月	１０月	１１月	１２月	１月	２月	３月
仲良くなろう 遊具遊び カレンダーづくり	新聞で遊ぼう いろいろな動きで遊んでみよう 調理をしよう		水遊び 粘土で作ろう	水遊び 壁面作り	お楽しみハウスで遊ぼう	作品を作ろう 調理をしよう	作品を作ろう	元気に遊ぼう → もうすぐ２年生 →		

イ　授業例

（ア）　単元名「おたのしみハウスであそぼう」

（イ）　単元の目標

・友だちや教師と一緒に、色々なハウスの遊具で遊び、時間いっぱい活動することができる。
【人間関係形成能力】

・４つの遊びの中から好きな遊びを選ぶことができる。【意思決定能力】【将来設計能力】

・教師と一緒に、クレヨンや絵具などを使って、ハウスや簡単な遊具を作ることができる。
【意思決定能力】【将来設計能力】

（ウ）　単元指導計画（全 13 時間、本時 12／13）

・いろいろなハウスを作って、遊んでみよう・・・８時間
（メロディーハウス・キラキラハウス・バルーンハウス・トンネルハウス）

・おたのしみハウスで遊ぼう・・・・・・・・・・５時間（本時４／５）

（エ）　評価の観点

＜主体的に学習に取り組む態度＞

・４つの遊びの中から好きな遊びを選ぶことができる。

（オ）　本時の学習　「おたのしみハウスであそぼう」

ａ本時の目標

・実物のハウスや写真カードを見て、好きなハウスを選択することができる。

・いくつかのハウスで、友だちや教師と一緒に、色々な遊具で遊ぶことができる。

ｂ本時の展開　10 月 25 日　第２校時　寄宿舎多目的室

	活動内容	指導上の留意点	評価の観点
導入 10：50	・はじまりの挨拶をする。 ・活動内容を知る。 １はじめのあいさつ ２おたのしみハウスで遊ぼう ３かたづけ ４おわりのあいさつ	・全員が前を向いてから「気を付け・礼、始めましょう」の手話をつけて挨拶をする。 ・ホワイトボードにイラストカードを貼り本時のスケジュールを伝える。 ・児童が後ろを向いたときには、「見る」と伝え、手話で前を向くよう促す。	
展開 10：55 11：10 11：25	・おたのしみハウスで遊ぶ １、全員で一つ一つのハウスを回り、振り返りを行う。 （１）メロディーハウス ○作った楽器を使って、自由に遊ぶ。 （２）キラキラハウス ○光ボールを転がしたり、ライトを照らしたりして遊ぶ。 （３）バルーンハウス ○作ったバルーンや沢山の風船を自由に使って遊ぶ （４）トンネルハウス ○トンネルに自由に入り、友だちや教師と遊ぶ。 ２、自分で好きなハウスを選んで遊ぶ。 ３、片付けをする。 ・メロディーハウス遊具（A 児） ・バルーンハウス風船（B 児） ・キラキラハウス遊具（C 児）	・終わりは“タイムタイマー”で知らせることを伝える。 ・次のハウスへの移動時は、写真カードを見せて伝える。 ・次への移動は、写真カードから選んで教師に渡せるように、児童の近くに写真カードを置いておく。 ・どのようにして遊んでいいか分からないときには、教師が隣で、楽しそうに色々な楽器の音色を鳴らして、見本を示す。 ・光ボールの転がし方なども見せて色々な遊び方を提示する。 ・児童に風船を投げたり、上に飛ばしたりして、色々な風船の遊び方の見本を必要に応じて行う。 ・トンネルに入ったら、児童のペースで遊べるよう見守る。また、教師も一緒に入ったり、他の児童を誘ったりしながら一緒に遊ぶ。 ・タイムタイマーで終わりを知らせる。 ・誰が何を片付けるのかを写真カードで伝える。	・写真カードやハウスを見て、行きたい写真カードを教師に渡し、好きなハウスに行けることができたか。（A児） ・行きたいハウスの写真カードを目印に、好きなハウスを選択することができたか。（C児） ・友達の様子を見て楽しんだり、教師の働きかけを受けたりして、色々なハウスで遊ぶことができたか。（B児） ・友だちの様子を見たり、教師の働きかけを受けたりして、色々な遊具を使って遊ぶことができたか。（A児） ・友だちの様子を見たり、真似たりする中で、色々な遊具の遊び方を見つけたり、真似たりすることができたか。　（C児）
まとめ 11：30	・おわりの挨拶をする。	・全員が前を向いてから「気を付け・礼、終わりましょう」の手話をつけて挨拶をする。	

（カ）　単元を振り返って

a 本単元で工夫・改善したところ

〈教材〉

	教材	用途	工夫・改善した点
メロディーハウス		・手作りのバケツ太鼓やタンバリンをたたいて遊ぶ。 ・手作りのギターの弦の部分をはじいて遊ぶ。	・ペットボトルに、カラフルなビーズを入れて、音と視覚的にも楽しめるように工夫をした。
バルーンハウス		・ハウスに輪ゴムでつなげた風船を引っ張って、遊ぶ。 ・風船をたたいたり、飛ばしたりして遊ぶ。	・小さい風船や長い風船など風船の種類を少しずつ増やした。 ・風船を他のハウスに持っていかないよう、輪ゴムでハウスに風船をつなげた。
キラキラハウス		・ハウスに付いているペットボトルに光ボールを転がして遊ぶ。 ・ブラックライトで蛍光色に塗ったキャラクターを照らして、遊ぶ。	・初めは、光のボールを転がす遊具を置いていたが、スペースが狭くなるため、ハウスの内側の壁にペットボトルを半分に切ったものをつけて、スペースを広くした。
トンネルハウス		・トンネルの中に張り付けてある、モールや綿、ストローなどを触って、感触を楽しむ。 ・トンネルの窓から外を覗いたり、違うトンネルをくぐったりして遊ぶ。	・初めは、トンネルの内側には何もない状態であったが、中をくぐるだけだとすぐに終わってしまうため、トンネルの中でも遊べるように、色々な感触が楽しめる教材を貼り付けた。

写真１「おたのしみハウスであそぼう」の全体図

〈環境〉

一学期は、教室で運動遊びを行った。しかし、場所が狭く、授業で使用する教材以外の物も多いため、遊びに集中することが難しかった。また、机などもあったため、安全の配慮に欠けていたことも課題であった。そこで、本単元の「おたのしみハウスであそぼう」では、教室以外の場所で広々と活動できるように、多目的室で行うことにした。教室から多目的室に場所を変えることで、児童に期待感をもたせたり、安全に配慮したりして、動きの制限をなくすことができたのではないかと考える。また、ハウス以外のものが気にならないように、できるだけ物が少ないほうにハウスを配置したり、手作りのパーテーションをハウスの間に置いたりすることで、ハウス以外の場所に行くことはなく、ハウスでの遊びに集中することができた。

〈児童が主体的に活動できるように工夫した点〉

児童にとって馴染みのあるハウスになるよう、自分たちでハウスや遊具を作って遊ぶという流れで単元を構成した。

また、児童の好きなキャラクターや楽器・光る教材などを取り入れることで、児童が興味・関心をもって、取り組めるように工夫をした。

遊びの中では、カードで自分の要求や行きたい場所を伝えることができる児童がいたため、４つのおたのしみハウスを写真カードから選択する活動を授業の中で取り入れるなどの工夫を行った。

ｂ本単元の個人目標と評価

【評価：◎十分できた、○できた、△達成できなかった】

児童	本時の個人目標	評価規準	評価
A	・写真カードやハウスを見て、好きなハウスを選び、いくつかのハウスで遊ぶことができる。 ・教師や友だちの様子を見て、色々な遊具を使って遊ぶことができる。	・　写真カードやハウスを見て、行きたい写真カードを教師に渡し、好きなハウスに行くことができたか。 ・友だちの様子を見たり、教師の働きかけを受けたりして、色々な遊具を使って遊ぶことができたか。	○
B	・好きなハウスにいくつか行き、色々な遊具で遊ぶことができる。	・友達の様子を見て楽しんだり、教師の働きかけを受けたりして、色々なハウスで遊ぶことができたか。	○
C	・写真カードを見て、好きなハウスを選ぶことができる。 ・友だちや教師の遊びを真似たり、自分で遊具の遊び方を見つけたりして、遊ぶことができる。	・行きたいハウスの写真カードを目印に、好きなハウスを選択することができたか。 ・友だちの様子を見たり、真似たりする中で、色々な遊具の遊び方を見つけたり、真似たりすることができたか。	― （※）

※Ｃ児は、最後の１時間のみの参加であったため、評価ができていない。

ｃ成果

１学期には、運動遊びに時間いっぱい活動することが難しかった児童も、楽器あそびやバルーン遊びなど、自分の好きな遊びを見つけ、時間いっぱい活動することができた。また、場所を教室から多目的室に変えることで期待感も高めることができ、安全に配慮しながら広い空間で活動することができた。

おたのしみハウスで教師や友だちと遊ぶ中で、一人で遊ぶことを好んでいた児童も、友だちと同じ空間で遊ぶことができるようになった。また、自由に遊ぶ中で教師の動きを見てキラキラボールの遊び方を真似たり、新しい遊び方を見つけ、自分なりに工夫したりして遊びを発展させることが

できる児童もいた。

写真カードから好きなハウスを選ぶ活動では、教師が写真カードを提示し促すと、好きなハウスの写真カードを選び、教師に渡して行きたい場所を伝えることができた。

ｄ課題

課題としては、平行遊びや一人遊びの段階の児童に対して、他者と一緒に遊んだり、遊びを広げたりするための教材・教具の工夫や仕掛けをもっと行う必要があった。４つのハウスを作ったことで、個々に活動する環境になってしまい、友だちと同じ空間で遊ぶことはできていたが、そこで遊具を共有したり、貸し借りをしたりする場面を作ることができなかった。本時は、全 13 時間の単元の最後の方の授業ということもあり、単元の前半の頃より、ハウスや遊具への興味・関心が低くなっていたことも課題である。今後は、より児童の実態に応じたダイナミックで感覚に働きかける遊びを取り入れたり、遊具の数を少なくしたり、３人で遊べるように一つの遊具を大きく作るなどの工夫をしていきたい。また、遊具や環境を設定するだけでなく、児童が「やってみたい」と思えるような声かけや授業の流れを工夫していきたい。

視覚支援が少なかったことも課題であった。例えば、遊びの終わりが分かりやすいよう、タイムタイマーを使用するなどスケジュールの視覚支援以外にも児童に応じた視覚支援や活動のヒントとなるものを意図的に組み込んでいく必要があった。

ウ　まとめ

「いろいろな活動に取り組み、好きなことやできることを増やす遊びの取組」をテーマに生活単元学習に取り組んできた。変化させやすい素材を使った感触遊びや簡単な作品作りの取組では、新聞紙をやぶる、紙粘土をつまむ・丸めるなどして感触をたっぷり楽しむことが見られるようになった。感触遊びで素材に慣れ親しんでから、簡単な作品作りに取り組んだことで、素材の扱いに少しずつ慣れて作品作りに時間いっぱい取り組む児童も見られた。また、３人で大きな紙に手や足を使ってダイナミックに絵の具で描いたり紙粘土の共同作品を作るなど、共同作品に取り組むなかで、友達の様子を見たり、活動に興味をもって取り組んだりする場面が見られた。２学期は作品展に出展し、作品展の見学や初めての公共交通機関やレストランの利用などの経験をすることができた。課題としては、児童によっては苦手な感触があることや、活動への興味関心や集中できる時間などに差があるため、今後もより多くの児童に興味がもてる素材を選び、やってみたいと思えるような授業展開やより個々に応じた視覚支援を工夫していく必要がある。

いろいろな体の動きができる遊びでは、エアートランポリン、バランスボール、段ボールキャタピラー、トンネル、階段、バルーンなどに取り組んだ。取組のなかで児童の実態に応じて遊具を変えたり、友達と一緒にできるロープ遊びやバルーン遊びを加えたりすることで、一定時間の最後まで活動に取り組めるようになり、友達と一緒に活動を楽しむ場面も見られるようになった。１つの遊具で活動する場面では、タイマーや身振りで「おしまい」がわかって終わることができたり、順番がくるまで待つことができるようになってきた。また、音や光などの好きな遊びの取組では、授業例で述べたように、教師の動きを真似て遊び方に少し広がりが見られたり、友達と一緒の場でしばらく遊ぶことができるようになるなどの変化が見られた。今後は、改善点をふまえて、マットの山の滑り台やバルーンなどダイナミックな遊びに取り組み、たっぷり体を動かして活動を楽しんだり、片付けまで主体的に活動できるように視覚支援を行っていく。また、活動のなかで「やって」などの要求を身振りで伝えたり、友達と一緒に遊具に乗るなど友達とかかわる場面を設定していきたい。

１年を通して、毎日の学級のミーティングで、児童の学習の様子の報告や授業についての振り返りを

行い、教材の工夫や支援の仕方など授業改善に取り組んだ結果、それぞれの児童に変容が見られた。遊びに関連するQ&Aの１年間の変化は下記の通りである。今後も、より児童の課題に応じた教材の工夫や、主体的に活動できるための支援の工夫をし、いろいろな活動に取り組み、好きなことや自分でできることを増やしていけるように、授業づくりに取り組んでいきたい。

＜遊びに関連するQ&A　2017年度（小学部Ⅰ段階）＞

【できる(8割以上)…○　時々できる(5割程度)…△　できない(3割以下)…×】

児童		7月	1月
A	教師や友達と同じ場所で、好きなことをして遊ぶ	○	○
	教師のまねをして、手足を動かして遊ぶ	×	△
	すもう、かけっこなどをして遊ぶ	×	×
	おもちゃなど身近にある物で遊ぶ	△	○
	ぶらんこ、すべり台、砂場などで遊ぶ	○	○
	教師と一緒に、遊具などの後片付けをする	○	○
	友達と手をつなぐ	×	△
	表情、身振り、動作、声などで自分の要求を表現する	△	○
B	教師や友達と同じ場所で、好きなことをして遊ぶ	○	○
	教師のまねをして、手足を動かして遊ぶ	×	×
	すもう、かけっこなどをして遊ぶ	×	×
	おもちゃなど身近にある物で遊ぶ	△	○
	ぶらんこ、すべり台、砂場などで遊ぶ	△	△
	教師と一緒に、遊具などの後片付けをする	△	△
	友達と手をつなぐ	△	△
	表情、身振り、動作、声などで自分の要求を表現する	△	△
C	教師や友達と同じ場所で、好きなことをして遊ぶ	○	○
	教師のまねをして、手足を動かして遊ぶ	○	○
	すもう、かけっこなどをして遊ぶ	○	○
	おもちゃなど身近にある物で遊ぶ	○	○
	ぶらんこ、すべり台、砂場などで遊ぶ	○	○
	教師と一緒に、遊具などの後片付けをする	○	○
	友達と手をつなぐ	×	×
	表情、身振り、動作、声などで自分の要求を表現する	○	○

（２） Ｂ組「アクティブラーニングを意識した調理活動の取組」

ア　取組にあたって

（ア） はじめに

本学級は、２年生２名と、３年生４名の計６名で構成されている。４月に２年生１名、３年生１名の転校生を迎え、年度当初は環境や集団の変化から落ち着きなく過ごす様子がみられたが、1 学期を終える頃にはどの児童も慣れ、お互いを意識して遊んだりかかわりをもったりするようになってきている。

日常生活や学習場面で教師の支援を常時必要としている児童から、活動内容や日課を理解し自ら行動することができる児童と、実態には幅がある。学習場面では、写真やイラスト、文字を活用したスケジュール表示や手順表、動画を活用することによって、どの児童も活動内容に見通しをもって取り組むことができている。コミュニケーションの手段は児童によって様々であるが、どの児童も教師や友達とのかかわりを求め楽しむことができている。

本学級の生活単元学習は、買い物、調理、制作、ゲーム、畑を主な柱として計画した。ここでは、調理活動の取組を取り上げる。調理はどの児童も好きな活動であり、手順表や視覚支援カードを活用することで主体的に取り組むことができる。そこで本学級では、全ての児童が主体的に学ぶことができる調理活動を通じて、今年度の小学部研究テーマである「子どもがわかって主体的に学ぶ授業」を考えたい。

今年度の調理活動では、1 学期はホットケーキ作りに取り組んだ。調理活動では２グループに分かれ、道具の準備から後片付けまで作業を分担して行った。食過敏のある児童もいるが、食べられるメニューであれば意欲的に取り組み、繰り返し学習することで自分が担当する活動内容を理解し、必要に応じた調理道具を選び取ったり操作したりすることができるようになった。また買い物活動では、写真カードや教師の言葉かけ等を手掛かりにして、ホットケーキ作りに必要な材料を探し買うことができるようになってきた。

１学期のホットケーキ作りは、グループを作り工程を分担して行ったが、工程を分担し調理する内容では、「待つ、見る」時間があり全ての児童が主体的に活動するには不十分であった。そこで２学期は、一人一人が調理工程を最後まで担うことができるメニューを設定することにし、全員が食べることができるサンドイッチ作りに取り組むことにした。

サンドイッチは、簡単な具材にすれば包丁や火を扱うことなく安全に調理することが可能である。また具材にもいろいろな種類があり、食過敏のある児童であっても、具材の選択肢が広がりバリエーションを増やすことができる。さらに手順表を活用し調理方法を身につけることができれば、材料と手順表があれば家庭でも再現することができると考えた。

調理活動の初回は、サンドイッチ作りの見通しがもてるように、教師による手本の動画を視聴してから調理に取り組んだ。また具材は２種類（ハムチーズ、イチゴジャム）を用意し、何を作るか自分で決める活動を設定することで、自己選択・自己決定の機会とした。さらに単元の最終回では、サンドイッチパーティとして他の具材を使用できる機会を作り、「他の具材でも作ってみたい」という児童の要求にも応じられるようにした。

手順表は、これまでの学習（制作）ではＡ４のバインダーに複数の活動を貼った取り外し式を主に使用してきたが、調理に必要な動作を伝えるにはある程度の大きさが必要であると考え、一つの活動をＡ５サイズに表示しためくり式を採用した。初めてめくり式を使用する児童が多いことから、手添えや声掛けをして使い方を丁寧に指導した。手順表に示す内容（写真、文字など）は、児童の実態に応じて複数のタイプを用意した。活動中に児童が迷っている際には、対話が可能な児童には「今はどこかな？」「次は何をしたらいいと思う？」と声をかけ、児童自身が考えて答えを出すまで待つことにした。次の

活動が分かっていないとみなした場合には、手順表を示しながら「次はこれだよ」と声をかけたり指さしをしたりするなどしたが、教師の支援は実態に応じて最小限にとどめることを共通認識した上で授業に臨んだ。

サンドイッチを作る工程では、２枚の食パンで具材を挟む方法では包丁を使って切らないと食べにくく、また本学級の児童には包丁の使用は危険があるため、本単元では１枚の食パンに具材を載せ半分に折る方法を採用した。簡単な工程にしたことで教師の支援を最小限にし、児童が一人で最後までやりとげられるように配慮した。

また振り返りの場面で主体的・相互的活動をねらい、調理活動の導入場面で「今日自分が頑張る目標」を各自が立て、活動の最後には目標が達成できたかどうかを振り返る時間を設定した。昨年度から衛生調べで○△×マークで結果を表現することに慣れていることから、本単元でもその方法を採用し、「今日の自分はどうだったか？」を考え、また教師と話し合ったり表現したりする活動とした。目標の内容は、達成できているかを児童が見て判断しやすい「手洗い」「マスク・エプロンを着ける」「台拭き」を選択肢とし、目標とした活動の様子を動画撮影して、授業の最後に全員で視聴して評価・発表する。手洗いは「ビオレ手洗い歌」の動画を、台拭きは「高知県特別支援学校技能検定テキスト」の机拭きの作業部分を参考にした動画を撮影し、これらを見る学習場面を設定した後実践することで、友達の動画を視聴する際に見るべき評価ポイントを明確にした。第３校時の動画を視聴し評価する場面では、友達の様子はどうだったか、なぜ○△×にしたのか、その理由に気づけるよう発問し児童の考えや表現を引き出すよう支援した。また発表の様式を書いた見本を用意し、正しく表現する力につなげていきたいと考えた。

（イ）　生活単元学習「調理活動」の年間計画　表１

	単元名	単元の目標
１学期	ホットケーキを作ろう！	・調理活動に興味をもって参加することができる。 ・写真カードを手掛かりにして、調理に必要な材料を探し出して買うことができる。 ・準備カードを手掛かりにして、必要な材料や調理道具を取ってくることができる。 ・割り当てられた工程に進んで取り組むことができる。
２学期	サンドイッチを作ろう！	・活動内容が分かり、最後まで活動できる。 ・自分が作りたいサンドイッチの具を選ぶことができる。 ・調理に必要な材料や道具を知り、準備をすることができる。 ・手順表を活用し、ほぼ一人または最小限の支援を受けて、サンドイッチを作ることができる。 ・○△×のマークを使って、友達の活動がどうだったかを表現することができる。
３学期	買い物をして、サンドイッチを作ろう！	・自分が作りたいサンドイッチの具を選ぶことができる。 ・写真カードを手掛かりにして、調理に必要な材料を探し出して買うことができる。 ・調理に必要な材料や道具を知り、準備カードを手掛かりにして準備をすることができる。 ・手順表を活用し、ほぼ一人または最小限の支援を受けて、サンドイッチを作ることができる。

イ　授業例

（ア）　単元名「サンドイッチを作ろう」

（イ）　単元の目標

・活動内容が分かり、最後まで活動できる。【将来設計能力】

・自分が作りたいサンドイッチの具を選ぶことができる。【意思決定能力】
・調理に必要な材料や道具を知り、準備をすることができる。【情報活用能力】
・手順表を活用し、ほぼ一人または最小限の支援を受けて、サンドイッチを作ることができる。
【情報活用能力】
・○△×のマークを使って、友達の活動がどうだったかを表現することができる。
【人間関係形成能力】

（ウ） 単元指導計画（全 20 時間）

・サンドイッチを作ってみよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2 時間
・手洗い、台拭きの正しい方法をマスターしよう・・・・1時間
・サンドイッチを作ろう・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・16 時間（本時は 15・16／16）
・サンドイッチパーティをしよう・・・・・・・・・・・・・・・・・・1時間

（エ） 評価の観点

＜知識・技能＞

・エプロンの前後に気をつけ、マスクで鼻まで覆うことができている。
・目印に沿って台拭きをすることができている。
・動画と同じ手順で手を洗うことができる。
・サンドイッチの作り方を知り、手順表を活用しながらほぼ自立して作ることができている。
・バターナイフを適切に扱うことができている。

＜思考・判断・表現＞

・自分の考えを言葉や身振り、カードを貼るなどで表現できている。
・自分が作りたいサンドイッチの具を決めることができる。
・友達の活動動画を見て、○△×マークで表現することができる。

＜主体的に学習に取り組む態度＞

・手順表やカード類を活用できている。
・困ったときや分からないときには、目線や言葉で伝えることができている。

（オ） 本時の学習「サンドイッチを作ろう」

a 本時の目標

・教師の支援なしで、身支度、台拭き、手洗いができる。
・手順表を見ながら、ほぼ一人でサンドイッチを作ることができる。
・○△×マークを使って、友達の活動がどうだったかを表現することができる。

b 本時の展開　　11 月 17 日　第２・３校時　　小学部２・３年教室

時間	学習活動	指導上の留意点
導入 9：55	1　はじまりの挨拶をする。 2　本時の学習内容を知る。 ①目標を決める。 ②エプロン、マスクをつける。 ③机を拭く。 ④手を洗う。（廊下の手洗い場） ⑤準備をする。 ⑥調理をして食べる。 ⑧片付けをする。 ～休み時間～ ⑨ふりかえりをする。	・全員の姿勢が整ったことを確認してから、日直が号令をかける。 ・本時の学習の流れをカード（文字・絵）で提示し、確認する。 ・前方に注意を向けるよう声かけをする。 ・本時がテストの日であることをカレンダーを使って示し、意欲を喚起する。

展開 10：00	3　目標を決める。 ・今日頑張ることを１つ選ぶ。 （手洗い、エプロン・マスクを着ける、机を拭く）	
	4　エプロン、マスクを着ける。 机を拭く、手洗いをする。	・４では、個々の目標に応じた活動場面を iPad で撮影し、振り返りの教材とする。撮影時には見守りに徹し、行動が適切でなかった場合は撮影後にやり直しをして正しい行動を引き出す。 ・手洗いの支援教材として、「ビオレ手洗い歌」の動画を流す。台拭きでは机の隅まで拭けるように、机に数字を書いた目印を貼り、実態に応じて指さしや数唱の支援をする。 ・各活動に集中できる環境にするため、台布巾洗い（教室）と手洗い場所（廊下）はそれぞれ洗い場を固定する。
	5　準備するものを確認し、道具と材料を揃える。 6　サンドイッチを作る。	・５では、実態に応じて作成した準備物リストを配付し、教師と一緒に指さしや読み上げをして確認するよう促す。
	7　使った食材の残りや道具を片付ける。	・７では、片付ける場所を写真カードや実物を置くことで分かりやすくし、自立して取り組めるようにする。 ・できるだけ支援は最小にし、手順表への指差しや「ここを見てごらん」と声掛けして、手順表への注意を促す。
	8　食べる。 9　食器を洗って片付ける。	・全員が揃ってから食べる。早く片付け終わった児童には、使った食材の残りを保護者控室に片づける手伝いを依頼する。
10：40	10　おわりの挨拶をする。	
休　憩　（10 分）		
10：50	11　はじまりのあいさつをする。	・全員の姿勢が整ったことを確認してから、日直が号令をかける。
	12　振り返りをする。 ①自分の目標を発表する。 ②評価してほしい人を決める。 ③動画を見る。 ④評価する人が○△×をつけて発表する。 ⑤評価が適しているかみんなで話し合いをする。	・振り返り活動は一人ずつ行い、動画を見る時の注目ポイントはどこかを、動作や言葉で確認してから見るようにする。 ・発表場面では、児童の表現を引き出すために、最初の一言を補ったりカードを見せたりして、実態に応じた支援をする。 ・「どうしてそう思ったの？」「どこができてなかったと思う？」など教師が○△×の評価に疑問を示すなどして、児童がより考える機会を設定する。場合によっては動画を繰り返し見て確認する。 ・発言する様子がみられた場合には、挙手をすること、「発表します、～だと思います。」など適切な表現ができるよう言葉を足したりモデルを示したり、実態に応じた支援を行う。 ・意見を発表したり、正しく評価したりできていたことを取り上げ、その都度称賛する。
まとめ 11：20	13　次回の学習を知る。 ・次回作るサンドイッチを決める。	・次回がサンドイッチを作る最後の日であることをカレンダーで確認し、他の食材を使えることを伝え意欲を引き出す。
11：35	14　おわりの挨拶をする。	・全員の姿勢が整ったことを確認してから、日直が号令をかける。

（ク）単元を振り返って

ａ　成果

本単元では、調理工程を一人で最後まで行うようにしたことで、どの児童も活動時間いっぱい見通し

をもって取り組むことができていた。手順表を一覧式からめくり式（写真１）に変更したが、これも学習が進むにつれて使い方を習得し活用することができるようになった。取組当初は教師が手添えをしてめくっていた児童も、番号を手掛かりにして順にめくることができるようになっていった。また個人用の道具や材料を用意したことで、個々の児童が扱いやすいように加工したり目印をつけたりすることができ、児童の調理活動の自立につながった。

（写真１）

サンドイッチの具材は全員が同じものを作るのではなく、毎回一人一人が自分の具材を選択するようにしたことで、普段二択をすることが難しい児童でも好きなサンドイッチの具であれば選ぶことができ、自己選択・自己決定の経験を積むことができた。このように調理活動については、どの児童も実態に応じて主体的に学ぶことはできたのではないかと考えている。

（写真２）

さらに調理の準備である「手洗い」（写真２）「マスク・エプロンを着ける」「台拭き」（写真３）を目標場面に設定し、正しい方法を確認した後に繰り返し同じ学習を行ったことで、この３つの活動の習熟につながった。これは生活単元学習の時間だけでなく基本的生活習慣の大切な要素であり、児童それぞれにその力の伸長がみられたことは、大きな成果であった。また指導するポイントを指導者全員で確認する機会にもなり、指導方法を統一することにもつながった。

（写真３）

３校時に対話的な学びをねらって設定した振り返りの場面（写真４）は、本単元を行うにあたり最も悩んだ部分である。動画を活用したが、友達が活動している様子を見てチェックするべきところに気がつけるか、気づいたことを表現できるか、○△×のマークを使って妥当な評価をすることができるか、他者からの評価を受け入れることができるか…難しい試みではあったが、全員が自分の考えを発表する場面を設定したことで、どの児童も積極的に発声・発言する姿を見ることができたことは大きな成果である。

（写真４）

評価では、友達を思いやってよかったところを探してみたり、逆に、ライバル的な存在である友達の評価は厳しくしたり、また児童の発言がきっかけになって結果が大きく変わったりと、これまでにない児童の活発な表現ややりとりを見ることができた。自分の活動の中でできていなかった点を指摘され涙したり、マイナスの評価を受け入れにくかったりした児童もいたが、こうした他者評価を受ける経験を積むことができたことは、本学級の児童にとっては有効であったのではないかと考える。さらに本単元以降の他の場面でも、自分の考えを言おうとすることが増えてきた。

b 課題

本単元を終えて最も気になったことは、３校時の振り返り活動は、発言する力のある一部の児童が中心になって進む傾向にあったことである。他の児童の何気ない発言に一度決まっていた評価がひっくり返ったり、教師が疑問を呈して動画を見返したり考え直したりするときもあったが、自分から発言する児童が固定されてしまったことは反省点である。また発言内容は想定できず、評価が間違っていても児童からの指摘がないままになる場面もあったため、その際は補助の教師が発言することがあった。このことから本単元では、評価する側も受ける側も「～したからできた・できなかった」と思考する、深い学びに至るには不十分であったと思われる。児童の深い学びにつなげるために、「どう思う？」と問いかけ、発言や考える行動を促す工夫があればよかったのではないかと考える。

また振り返りの場面は他者評価を受ける活動であったが、○△×の結果のみがクローズアップされ、

「～できていたから○」「他はできているけど～できていなかったから△・×」を、評価される本人に伝えるための支援ができていなかったことは、反省点である。さらに、振り返る対象を児童が日常行う「手洗い」「マスク・エプロンを着ける」「台拭き」に限定し、具体的な評価基準を確認する時間を設定していたが、実際に振り返る場面で基準が分かる視覚支援教材を提示せずに振り返りを行ったため、児童にとっては客観的に評価するための手がかりが不足していた。さらに反省点としては、評価を受けてもそれを記録していくツールを用意できていなかった。自分が受けた評価を記録していくツールがあれば、過去の自分はどうだったのかを振り返り、深い学びにつなげることができたのではないかと思われる。

写真：振り返りカード
３つの目標の中から、今日自分が頑張ることを１つ選び、顔写真のついたボードに貼る。振り返り場面で、評価してほしい友達を選んでボードを渡す。動画を見た後に○△×マークを枠に貼って評価してもらう。

さらに本単元では、調理後は各自が横並びで前を向いたままサンドイッチを食べたが、研究協議の場で、出来上がったサンドイッチを紹介して手順表通りに作れていることを評価したり、みんなで向かい合って食べたりしてもよかったのではないかと意見を頂いた。調理活動は児童が成功体験・達成感を得やすい場面であることからも、こうした活動を設定していれば次につながる児童の主体的な学びを引き出せたのではないかと感じている。また活動時間を確保するため、洗い場で並んで待つ、順番を守るなどの必要がないように環境設定したが、集団生活の中では順に並ぶ行動も不可欠であることから、意図的に組み込むこともできたのではないかと反省している。

ウ　まとめ

今年度、本学級の調理活動は、みんなで分担して一つの料理を作る集団活動を１学期に行い、２学期は今回の授業例に挙げたように、一人一人が調理工程のすべてをほぼ自立して行う個々の活動へと学習形態を変えて取り組んだ。そして３学期は１、２学期に習得したスキルを発展活用させるべく、買い物→調理の一連の活動を経験する取組を計画した。生活単元学習とは自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に学習する指導形態である。ここでいう自立的な生活に必要な事柄とは、経験の広がりと経験の深まり（スキルの習得）の両面から成り立つと考える。授業例に挙げた単元では、新しい食材を使った調理活動や新しい様式の手順表の活用など、児童が初めて行うこともあったが、主な目的を自立して調理を行えることとしたため、そのスキル習得のために同じ学習活動の反復となってしまい、いろいろな料理を経験するような経験の広がりには至らなかった。また、生活の中での調理は食材の準備（＝買い物や収穫）から片付けまでの一連の流れが必然であるが、この活動にも取り組めなかった。つまり、サンドイッチの調理のみに特化したスキルを習得することにおいては成果が上がったが、経験の広がりという点では学習要素が不足していたと考える。しかし反面、本年度の小学部の研究テーマである「子どもがわかって主体的に学ぶ授業」という側面においては、単元が進むにつれて徐々に子どもたちが学習内容を理解し、主体的に活動するようになっていく様子がみられ、学習の深まりを感じることができた。

本単元で足りなかった、経験の広がりを次年度の学習計画の中に盛り込むことは課題として残った。本単元で習得した力を活かして、様々な調理活動に興味関心が広がるような授業作りを次年度以降進めていきたい。

（３） Ｃ組「自閉症の特性を考慮し、主体性を育む生活単元学習の取組
～アクティブラーニングの視点を活用して～」

ア　取組にあたって

（ア）　はじめに

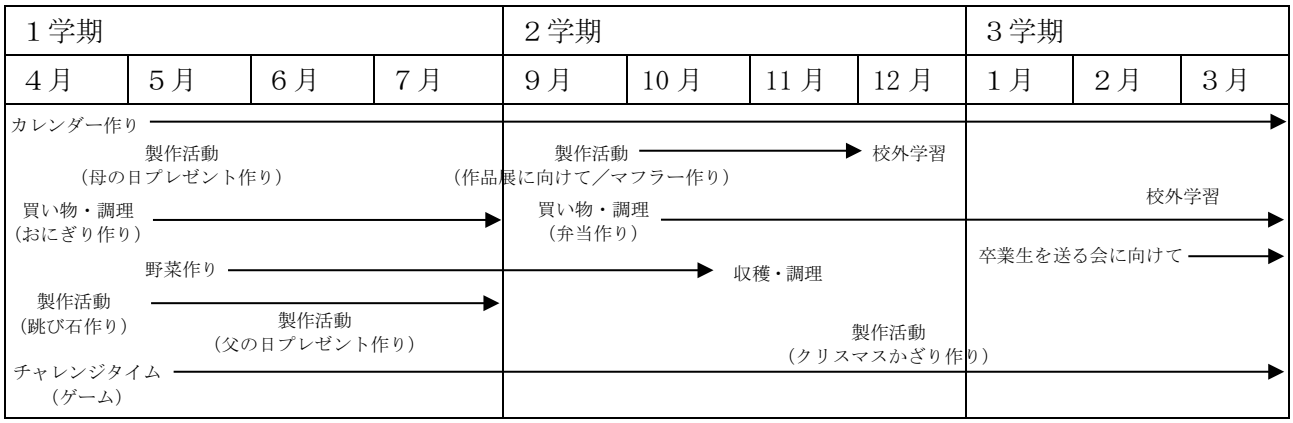
本学級は、小学部４年生の男子３名で構成されており、全員が自閉症を併せもっている。それぞれの課題達成に向けて、「運動する習慣をつけ、健康で丈夫なからだをつくる」「自分のことは自分で行うことができる」「いろいろなことを経験し、生活経験を増やす」「友だちとかかわる経験を通し、集団生活に慣れる」の４つの学級目標を立て、さまざまな学習を行ってきた。本学級の児童は、見通しがもちにくい初めての活動は苦手で、不安定になって自傷行為や他害行為をしてしまうことがある。また、聴覚過敏があり、特定の友だちの声や大きな音に反応して不安定になり、最後まで活動に参加できなくなる児童もいる。言葉でのやりとりは難しいが、活動内容に応じて簡単な手順書の活用や、教師の指さしや声かけなどの支援に応じながら、一人で活動できるように取り組んできた。また、教師と一対一で学習することが多く、友だちと協力して何かをしたり、相手を意識したりすることにも大きな課題があった。そこで、「チャレンジタイム」という単元を設定し、人と協力して何かをしたり、簡単なルールのあるゲームに取り組んだりした。人と協力すること、順番を待つこと、提示されたものに注目することなどに重点を置き、学級目標が達成できるように一年間の学習に取り組んできた。

さまざまな児童の実態、課題を踏まえ、本学級では、１年間を通した取組として「べんとう作り」の単元を設定した。その中で日常的に使っているスケジュールを調理場面でも活用し、日々の学習が般化できるようにしたり、簡単な調理を通して、できるだけ一人で活動できたりすることをねらった。また、作った弁当を持って校外に出かける経験をし、公共交通機関の利用や、弁当作りに対する意欲がもてるようにした。弁当作りに向けての一つの取組として、１学期はおにぎり作りを行った。実態に合わせて手で握ったり、型を使ったりしながら、自分で作ったものを食べる経験をした。声かけや指さしなどの支援は必要であるが、食べられることを楽しみにして、少ない支援で活動に最後まで取り組むことができるようになってきた。１学期に行ったおにぎり作りの学習を発展させて、２学期からは弁当作りに取り組んだ。“できるだけ一人で活動できる調理”をテーマに、一人一人ができる活動内容の中でオリジナルの弁当を作ることとした。たくさんのおかずの写真が貼られた“べんとうブック”を使い、自分が食べたいおかずを選んで調理を行うようにした。好きなおかずを選択できることで、食べたいものを見つけたり、食べられることを楽しみに活動へ参加できたりするのではないかと考えた。また、食べられるものが違う児童の実態に配慮しながら、弁当作りという同じテーマで活動をすることができるのではないかと思い、本単元を設定した。弁当を作る前に、調理前日の買い物の際に、“べんとうブック”を見ながら弁当に入れるおかずを３品決めるようにした。べんとうブックは栄養バランスに偏りがないようにページを３色に分け、一つのページから一つだけおかずを選択できるようにした。調理には、電子レンジで温めるだけで簡単に一品が作れ、活動内容が分かりやすいことから冷凍食品を使用した。電子レンジは、使い方を覚えて一人で活動することができるように、番号を示したボタンを順番に押すことで調理ができるように支援した。電子レンジの使用が難しい児童は、温めてほしいことをカードで教師に伝えることをねらった。購入した冷凍食品は、使う分だけタッパーに入れて準備をしておき、当日作業しやすいようにした。調理開始前には、前日に考えた弁当の写真を提示し、これから作るものが分かるようにする。一つ一つの作業にイラストや文字で示したスケジュールを活用し、できるだけ自分で分かって次の行動へと移ることができるように配慮した。自ら考えて行動に移すこと、教師の声かけに応じて行動してみること、身体的プロンプトに応じて行動することなど、個々に応じた支援で学習を進め

ていった。

以上のことなどを踏まえながら、「障害特性」「主体的な学び」をキーワードに、実践・研究を深めることとした。

（イ）　生活単元学習の年間計画



イ　授業例

（ア）　単元名「ぼくだけのスペシャル弁当」

（イ）　単元の目標

・自分が食べたいおかずを選択することができる。【人間関係形成能力】【意思決定能力】

・活動内容が分かり、時間いっぱい取り組むことができる。【将来設計能力】

・必要な材料を用意することができる。【情報活用能力】

・スケジュールを活用し、できるだけ一人で行動することができる。【将来設計能力】

（ウ）　単元指導計画（全 40 時間、本時 38／40）

※この単元は、下記の表に示している（A）（B）（C）の授業を一つのまとまりとして行い、全部で 10 回の授業を行う。

小単元	内容	時間	授業回数
（A）弁当作りの準備をしよう	・献立を考える ・買い物に行く （時間割の都合上、買い物に行かない日もある） ・調理の準備をする	１時間	４時間 × 10 回
（B）スペシャルべんとうを作ろう	・弁当を作る	２時間 （本時１／２）	
（C）弁当を食べに行こう	・公園や中庭で弁当を食べる	１時間	

（エ）　評価の観点

＜主体的に学習に取り組む態度＞

・スケジュールや手順書を活用して、取り組むことができている。

（オ）　本時の学習　「スペシャルべんとうを作ろう」

a 本時の目標

・弁当を作ることが分かり、時間いっぱい活動することができる。

・写真を手がかりに、必要な道具や材料を用意することができる。

・スケジュールや手順書を活用し、できるだけ一人で取り組むことができる。

ｂ本時の展開　　11 月 10 日（金）　第２校時　　小学部４年教室

時間	学習活動	指導上の手立て・留意点
	エプロン、帽子、マスクを付け、手洗いを済ませて集合する。	
導入 （５分）	1　始まりの挨拶をする。	○全員が「きをつけ」をしたことを確認し、「れい」の号令をかける。
	2　せんせいのはなしを聞く。	○前日に考えた弁当のイメージ写真を提示し、これから作るものが分かるようにする。
	3　調理場所の台ふきをする。	○自分の調理場所の台ふきをするように伝える。
展開 （30 分）	4　弁当を作る。	○スケジュールや手順書を活用しながら、できるだけ少ない声かけで取り組むことができるように配慮する。 ○児童の実態に応じ、活動の中でできたことや良かったことを MT や ST が個々に評価するようにする。
	5　片付けをする。	○手添えや声かけをしながら、使った道具を自分で洗うように支援する。 ○中庭で弁当を食べることを知らせる。
まとめ （10 分）	6　弁当を食べる。	○「いただきます」の号令をかける。 ○終わった人から「ごちそうさま」の挨拶をし、片付けをするように声をかける。
	7　片付けをする。	○洗い物が終わった人から終わりの挨拶をし、授業を終わるようにする。
	8　終わりの挨拶をする。	

（カ）　単元を振り返って

ａ小学部研究の中で協議された評価や助言

＜授業規律について＞

・見る・立つ・待つ・並ぶなどの基本的なルールが授業の中で意識されていた。日々、さまざまな授業で取り組んでいることがよく分かった。

＜べんとうブックについて＞

・自分で考えたものが食べられるというやり方は、食に課題があるクラスにはいい活動だと思った。

・今後、活用したべんとうブックは家庭に持ち帰ると、食べたいものを保護者に伝えることができるかもしれない。

＜手順書について＞

・個々に応じた手順書やスケジュールが用意されていた。児童も手順書を見ながら活動しようとしていた。しかし、スケジュールの写真やイラストが小さすぎるのではないか。カードを少し大きくすることで、注視したり、活動を理解して行動できたりする場合もあるので、児童にとってどの大きさが適しているか、今後の授業で試してみてはどうか。

＜支援について＞

・導線もよく、１対１で活動をするのに教室の環境がきちんと整備されていた。

・まだまだ、教師の指示を待つ児童もおり、進んで活動を行うことは難しそうだった。今後、他の教師や保護者などと取り組んだときにも、普段通りに行えることが大切であるため、誰とでもできるように

するためにはどういった支援をしていくべきなのかを考えていく必要がある。
＜評価について＞
・授業の最後に活動を振り返る場面の設定はなかったが、児童の実態を見たときに、即時評価が有効であることが分かった。
・個々に支援している教師が、それぞれに合ったタイミングと評価の仕方で、できたことをほめるようにしていてよかった（拍手やハイタッチなど）。
ｂ成果・課題
“できるだけ一人で活動できる調理”というテーマに向けて弁当作りの単元に取り組んだ。スケジュールや手順書の般化場面では、スケジュールの活用方法は分かっても、一つ一つの行動の理解が定着しておらず、まだまだ教師の声かけや指示が必要な場面が多くあった。回数を重ねる毎に、弁当作りに対する意欲は高まり、弁当を作って食べるまでの一連の流れが分かって最後まで活動に向かうことができるようになってきた。今回の単元では、スケジュールの活用を目的とし、個々に活動を進めていった。生活単元学習の取組として、一人で学習するだけではなく、友だちと協力して何かを行う場面の設定をしていく必要があった。食べられる物が限られており、全員で活動をすることが難しいという実態ではあるが、共通して取り組める課題を見つけ、道具を一緒に運んだり、協力して混ぜたりするなどの活動を組み込んだ学習を行っていくことが課題として残った。
（キ）本単元で活用した教材の例

べんとうブック		一人に一冊のブックを用意した。自分の弁当箱の写真に、それぞれのページから選んだおかずを貼り、弁当の見本を作った。 ＜例１＞
スケジュール①		調理の流れを示したカードを縦に並べ、上から順番に終わった活動をフィニッシュボックスに入れるようにした（A・B児使用）。一つ一つの動きは確実に理解できているわけではないが、手順書の使い方は分かって、カードを外して次の活動を確認することはできた。
スケジュール②		調理全体のスケジュールとおにぎり作り、おかず作りの手順書を壁に貼り、一つ一つ確認をしながら取り組むことができるようにした（C児使用）。「次は？」と声かけが必要な場面もあったが、スケジュールを見ると、必要な道具や材料を用意したり、次の活動に移ったりすることができた。

ウ　まとめ
　本年度の本学級の生活単元学習における取組について、アクティブラーニングの３つの視点（「主体的な学び」「対話的な学び」「深い学び」）で、それぞれが「実現できているかどうか」を以下に考察する。
（ア）　「主体的な学び」について
　生活単元学習の手引き（文部省：1986　＊以下手引きと略す）に「生活単元学習は、主体的な学習である」と述べられているように、生活単元学習は児童・生徒の主体性によって成り立つ学習形態であるといっても過言ではない。このように我々教師が生活単元学習を実践する際には児童・生徒の主体性の

喚起・育成がその根幹にあると考える。例えば児童・生徒の興味や関心に起因する単元を設定することや、見通しをもちより能動的に活動できるように繰り返す、場合によれば長いスパンで取り組むことができるように設定することである。

主体的な活動を促すためには「動機付け」と「行動の評価」へのアプローチが欠かせないと考える。本学級の児童は「(ア)はじめに」に上述しているように全員が ASD の診断を受けている。その障害特性から「動機付け」の強化としてスケジュールの活用やカードなどによる視覚支援、活動をエリアで仕切るなどの構造化に取り組んだ。成果は「(ク)単元を振り返って」に上述しているが、その一方で「行動の評価」については児童の認知面を考慮し、「即時評価を大切にする」「言葉による称賛のみならず、ハイタッチなども併用する」などの手順を踏んではいるが、有効性の検証が不十分であったと考える。

(イ)　「対話的な学び」について

(ア)と同様に手引きには生活単元学習は「個別的な学習」であり、「共同的な学習」であるとされている。すなわち「共通の課題意識をもって、仲間と共同」で取り組む一方で、「一人一人に合った活動に精一杯」取り組むことが大切である。

本学級の児童はその障害特性ならびに認知において、教師と１対１の学習形態を必要とし、小集団での活動も参加の経験をねらいとする児童がほとんどである。そこで「他者との協働」においては対人指向の向上をねらいとした「チャレンジタイム」や「朝の運動」の準備・片づけにおいて道具を一緒に運ぶ活動などを意図的に設定している。

「弁当作り」や「マフラーづくり」、「牛乳パックの跳び石づくり」など製作活動を年間を通して大きな単元に設定したが、「一人でできる状況づくり」のための環境や治具を準備することで、「主体的な学び」においては児童の変容が顕著であったが、「他者との協働」においては課題が残った。

（ウ）　「深い学び」

「深い学び」の根幹は、認知の向上と般化に関連すると考える。認知の向上においては太田のステージを活用した「個別の時間」の充実、般化に関しては上述の「チャレンジタイム」や他の学習形態とのリンクについて整理する必要があった。

（エ）　今後の課題

国立特別支援教育総合研究所の中間報告（2012）において今後の検討課題として「育てたい力」「何を学ぶか」「どのように学ぶか」「学習評価の充実」の四点が述べられているが、それらは個別の指導計画の「ねらい・目標」「指導内容」「手立て」「評価」にあたるものであると考える。これらを考えるとより実用的で有用な個別の指導計画の作成・運用が必要である。

また「指導内容・方法、評価を一体化」し、「学校教育全体のサイクルに位置」づける「カリキュラムマネージメントについても、実践の中で検証していきたい。

＜引用・参考文献＞

・中央教育審議会（2015）教育課程企画特別部会における論点整理について（報告）
・国立特別支援教育総合研究所（2016）知的障害教育における「育成すべき資質・能力」を踏まえた教育課程編成の在り方―アクティブラーニングを活用した各教科の目標・内容・学習評価の一体化―（平成 27 年度）中間報告
・明治図書（2016）特別支援教育の実践情報

（４）　Ｄ組の取組「テーマ：主体的に学び、友達と一緒に社会体験をする宿泊学習の取組」

ア　取組にあたって

（ア）はじめに

本学級の児童は、５年生４名（Ａ～Ｄ）と６年生２名（Ｅ、Ｆ）の計６名で構成されている。児童は全員が自閉症スペクトラムを併せもっており、学習指導要領の各教科の段階との関連ではⅠ～Ⅱ段階が５名、Ⅲ段階が１名という実態である。

６年生は寄宿舎生であり、昨年度に修学旅行を経験して、集団生活や社会経験を広げる学習を積み重ねてきている。一方の５年生は、全員が通学生であり、家庭を離れて友達と宿泊した経験はない。基本的生活習慣の確立にも課題が残っており、来年度の修学旅行に向けて、より自立した生活態度を育てることが必要な児童たちである。また、昨年度の授業研究でも、学級集団として協力して達成感を得られるような取組が不十分だったことが課題として挙げられていた。

そこで、「主体的に学び、友達と一緒に行動できる児童」を学級が目指す子ども像とし、以下の４点を学級目標に設定して一年間の実践を進めた。そうすることで、学級の児童全員が、昨年度までに身につけた生活にかかわる基礎的な力を定着させるとともに、中学部への進学も視野に入れたキャリア発達を促せるのではないかと考えた。

【目指す子ども像】 主体的に学び、友達と 一緒に行動できる児童	学級目標	①運動の習慣をつけ、体力を高める。 ②基本的な生活習慣を身につける。 ③生活経験を増やし、学校や身近な社会のきまりを守る。 ④友達と仲良く過ごし、集団で取り組む力を高める。

授業づくりにあたっては、本年度の研究テーマに基づいて主体的・対話的で深い学びの実現を意識して日々の授業改善に努めた。そして、今年の特徴的な生活単元学習として「宿泊学習に行こう」を取り上げて、以下の実践例にまとめることにした。

（イ）生活単元学習の年間計画　表１　　（網掛け部分が授業例に挙げる単元である）

4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
仲良くなろう	宿泊学習をしよう（校内）	夏まつりのお店を成功させよう	育てた野菜を食べよう①	作って遊ぼう	宿泊学習に行こう（校外）	学習発表会で作品展を開こう	育てた野菜を食べよう②	冬の遊びをしよう	もうすぐ６年生/中学生育てた野菜を食べよう③	
（年間）野菜を育てよう、カレンダー作り(11 回)、郵便貯金(10 回)、交流相手への手紙(3 回)、防災学習(5 回)										
ねらい	○簡単なルールのある遊びや作業をみんなと一緒にすることができる。 ○身近な野菜を育て、収穫して味わうことができる。 ○商店で品物を選んで買ったり、簡単な調理をしたりすることができる。 ○校外学習では指示に従って行動できる。 ○いろいろな素材の扱いに慣れ、自分の表したい物を作ることができる。									

イ　授業例

（ア）単元名「宿泊学習に行こう」

５月の生活単元学習「宿泊学習をしよう」では、校内の生活訓練室を利用して宿泊学習に取り組んだ。その際は、友達や教師と一緒に買い物や食事作り、就寝の準備や片付けなどを行い、全員が家庭を離れて初めての宿泊体験をすることができた。この成功体験を活かして、気候のよい１０月に設定したのが本単元である。単元名は「宿泊学習に行こう」に発展させ、学校から地域に出かけ、目的地までの移動や地域の施設を活用した日中活動を盛り込み、１泊２日の行程を計画した。宿泊そのものは２回目なので、児童が見通しをもって当日までの準備を進め、本年度の修学旅行に代わる楽しい思い出を作ってほしいという願いを込めて、単元の計画をした。

（イ）　単元の目標【キャリア教育の観点】

・公共の乗り物、宿泊施設などの利用の仕方を知る。

【場に応じた言動】【様々な情報への関心】【社会資源の活用とマナー】【金銭の扱い】【夢や希望】【自己選択】

・集団生活に必要なマナーやルールを身につける。　【集団参加】【意思表現】【やりがい】

・友達と一緒に、買い物・調理・宿泊等の生活経験をする。【働く喜び】【金銭の扱い】【習慣形成】

・ボウリングゲームや高知城作りを楽しむことを通して、行先について知り、期待感をもつ。

【社会資源の活用とマナー】【やりがい】【自己選択】

（ウ）　単元指導計画（全 16 時間＋２日間）

第１次　宿泊学習の計画を立てよう　・・・・・・・・・・・・　２時間

第２次　ボウリングの練習をしよう　・・・・・・・・・・・・　２時間

第３次　行先の高知城を作ろう　・・・・・・・・・・・・・・　４時間

第４次　食事作り（買い物と調理）の練習をしよう　・・・・　６時間（本時 3/6）

第５次　荷物としおりの準備をしよう　・・・・・・・・・・・　２時間

第６次　宿泊学習（２日間）

（エ）　授業評価の観点

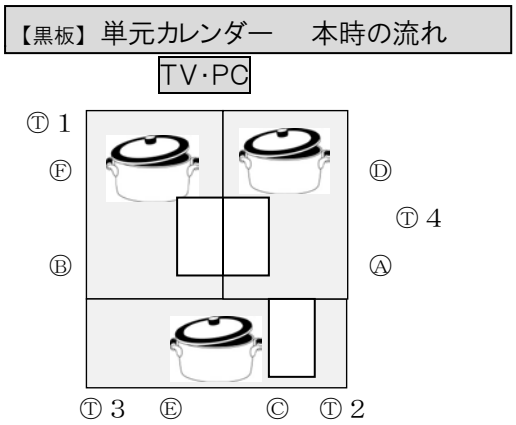
〈主体的な学びを促すことができたか〉

〈対話的な学びの場面を設定していたか〉

（オ）　本時の学習「食事作りの練習をしよう」の一例

a 本時の目標　・手順に沿って、インスタントラーメンを作ることができる。

b 本時の展開　10月13日　第３校時　小学部Ｄ組教室

時間	活動内容	指導上の留意点
5 分	①本時のねらいとスケジュールを知る。 インスタントラーメンを作ろう	・「単元カレンダー」と「本時の流れ」の板書で活動内容を明確に伝える。
5 分	②テーマソングを歌う。	・テレビを使って歌詞を表示する。
5 分	③インスタントラーメンの作り方を知る。 ・テレビで動画を見る。 ・手順書を読み上げて確認する。	・調理用のスペースを後方に配置しておく。 ・テレビを使って動画を上映する。 ・声を出して読み上げることを促す。
10 分	④インスタントラーメンを作る。 ・身支度をする。 ・道具と材料を準備する。 ・食堂から食器・やかんを運んでくる。 ・手順書を見ながら、ラーメンを作る。 ・お茶とみかんの配膳をする。	【調理中の教室配置図】 
10 分	⑤会食をする。	
5 分	⑥食器を洗って食堂に返却する。	
5 分	⑦まとめをする。 ・本時の評価をする。 ・次回の話を聞く。	・感想発表を促し、児童のよかったところを評価する。単元カレンダーに花丸を入れる。

(カ)　単元を振り返って～アクティブラーニングの視点からの豊かな学習過程の要素は設定できたか～

約１か月間にわたる本単元は、児童が主体的に学び友達と一緒に行動することを意識して取り組んだつもりである。ここでは、霜田浩信氏(2017年12月の校内研修会)から紹介された「学習過程の要素」に沿って、活用した教材教具を紹介しながら成果と課題を述べる。

a　学ぶことへの興味関心〈主体的〉

宿泊の日程計画	【1回目の宿泊学習の流れ】 1日目 4校時まで通常の学習→買い物→学校 （調理･夕食･入浴･就寝） 2日目 朝食･片付け→2校時から通常の学習 【2回目の宿泊学習の流れ】 1日目 学校→フジグラン(買い物･昼食)→ボウリング →城西公園→自活訓練棟に宿泊 2日目 自活訓練棟→高知城→学校	１回目の宿泊学習は、校内で調理と宿泊体験を行い、児童が慣れた場所で安心して過ごす事をねらった。 ２回目の宿泊学習も、買い物をして夕食を作り、宿泊体験をすることは同じように設定するが、地域社会での電車の利用、ボウリング、公園遊びなどの楽しい活動なども加えて日程を計画した。 【成果】児童は当日を楽しみに迎え、校外で機嫌よく過ごし、経験を広げた。
テーマソングの動画	♪宿泊学習の歌♪ しゅくはくに(はい!) いきましょう(はい!はい!) みんなで いきましょう(レッツゴー) じかつとう(はい!) ついたなら(はい!はい!) みんなで とまりましょう(ダンスダンスダンス) リュックに にもつを いれたら がっこうを しゅっぱつ JRの き～しゃと でんしゃで いきましょう(はい!はい!はい!) フジグラン(はい!) ボウリング(はい!はい!) みんなで あそびましょう(レッツゴー) じかつとう(はい!) ついたなら(はい!はい!) ラーメン つくりましょう(ダンスダンスダンス) おとこのこも おんなのこも ともだち せんせいまで みんな だれでも おふろに はいって にっこり ぐっすり ねむりましょう(はい!はい!はい!) つぎのひは(はい!) こうちじょう(はい!はい!) うえまで のぼりましょう(レッツゴー) いりあけで(はい!) きしゃにのり(はい!はい!) がっこうに かえりましょう(ダンスダンスダンス ダンス！)	単元のテーマソングを動画で作成し、テレビを使って授業開始時に流した。 【成果】テンポのよい歌の動画は児童の興味をひき、教師の促しがなくても着席して学習に集中することができ、効果的であった。歌詞に宿泊学習の行程が盛り込まれているので、口ずさむうちに行先や活動内容を自然に覚える児童もいた。
高知城作り	【写真：段ボールの高知城を作ろう】 	高知城に行ったことがない児童にも、地域の文化財を知ってほしいと考え、段ボールを使って共同作品を作った。 【成果】段ボールを扱った工作は、９月の生活単元学習でも経験していたので、児童は慣れた手つきで、集中して取り組むことができた。全員に十分な活動量があり、力を合わせて作る体験を通して達成感を味わえる学習になった。できあがった大作の高知城は、宿泊学習への期待感につながったと思われる。

b　学習への見通し〈主体的〉

単元カレンダー	 日 月 火 水 木 金 土 10/8 9 10 11 しおり ふとんしき 12 買いもの 13 ボウリング ちょうり 14 15 16 17 18高知城作り 19 20高知城作り 21 22 23 24 25 26 買いもの 27 ちょうり 28 29 30 31 11/1 にもつ きっぷ 2 3 4 5 6 7 8 しおり ボウリング 9 10 11	単元期間の活動内容を文字と絵や写真を取り入れてＡ３サイズのカレンダーとして作成し、掲示した。 【活用場面】①単元開始時に単元の流れとゴールを確認する。②授業開始時に、「今日の内容とめあて」を確認する。③授業終了時に、その日の活動を振り返り、花丸を入れる。 【成果】長期間の単元の流れやゴールに見通しがもてるようになり、毎時間の活動に期待感をもつことができた。

ラーメン作りの手順書

一覧表形式、Ａ４サイズで作成した。グループごとに調理台の前面に縦向きに取り付け、作業スペースを確保した。

【成果】必要な道具のイラストを一番上に載せているので、この手順書が一枚あれば、道具の準備から活動の全てが分かって動きやすかった。

作り方の文章と写真入りにしたので、どの児童も活用することができた。授業の導入で実際に調理する動画も見ているので、イメージをもって活動できたと思われる。

調理中は情緒不安定のために参加できなかった児童もいたが、作ったラーメンを全員がおいしく食べたことは大きな成果であった。

宿泊学習のしおり（一部）

11月9日(木)		
9時45分	学校	出発する
10時30分	小村神社前えき	JR汽車にのる
10時44分	朝倉えき	汽車をおりる
11時04分	朝倉駅前	電車にのる
11時39分	知寄町３丁目	電車をおりる
11時50分	フジグラン	昼食
		かいもの
1時30分	ボウルかつらしま	ボウリング
2時40分	知寄町3丁目	電車にのる
3時00分	上町１丁目	電車をおりる
3時10分	自活訓練棟	荷物をおく
3時30分	城西公園	あそぶ
4時30分	自活訓練棟	シーツかけ
6時		調理・夕食
7時		おふろ
8時		日記
9時		ねる
11月10日(金)		
6時30分	自活訓練棟	おきる
		ふとんをたたむ
7時		朝食
8時		そうじ
9時		出発する
9時30分	高知城	お城にのぼる
11時11分	入明えき	JR汽車にのる
11時35分	小村神社前えき	汽車をおりる
12時10分	学校	帰ってくる

にもつ（あったら○、なかったら×をかきましょう。）

	もちもの	家でチェック	学校
1	小さいリュック（持ち歩き用）		
2	かっぱ（かさ）		
3	りょういくてちょう 療育手帳		
4	パジャマ・パンツ		
5	2日目のふく（上・下・靴下）		

「宿泊学習のしおり」は、かばんに出し入れしやすい、Ａ５サイズ、16ページ構成にした。内容は、表紙、名簿、テーマソング、日程表、地図、荷物点検表、食事と買い物、小遣い帳、見学先のマナー、部屋割、楽しみなこと、ＪＲと電車の乗り方などのページで作成した。

【日程表】

５つの行先を知り、活動のイメージをもてるように、児童自身がイラストを貼り付ける活動に取り組んだ。テーマソングの動画と合わせて、日程を理解する助けになったと思われる。

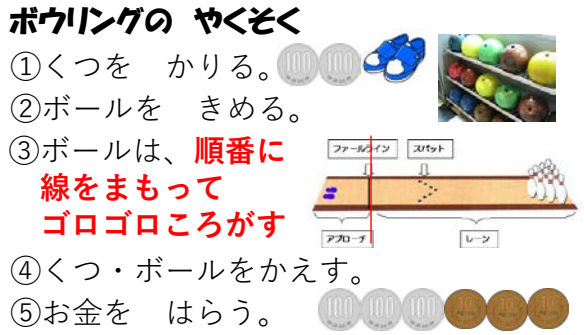
【荷物点検表】

週末に家族と一緒に荷物を用意することを宿題に出した。授業では、再度点検表に○を記入しながら、児童自身が出し入れの練習をした。宿泊学習中に荷物を自分で管理することは難しい状況であったが、絵入りの点検表の活用には徐々に慣れ、必要な物を自分で出し入れしようとするなどの行動ができた。

【JRと路面電車の乗り方】

乗車区間ごとの運賃をイラストで示してあり、事前に乗り方・降り方の練習も行った。児童は、このイラストを見て必要なお金を財布から出し、自分で支払うことができていた。

c 活動を通して学ぶ〈対話的〉

ボウリングの手順を決めて練習	**【ボウリングの約束】**  **【写真：ボウリング場での様子】** 	ボウリング場に出かけた時と同じグループ分けと順番で、ボウリングの練習を２回行った。環境はできるだけ本物に近づけ、スコア表も活用してボウリングの得点の仕組みにも慣れることをねらった。 児童は、順番とルールを守って、時間いっぱいボウリングのゲームをすることが目標であったが、実態に応じてピンを並べたり、倒れたピンの数を教師に伝えたりする活動も任せた。 【成果】ボウリング場を初めて利用した児童も多かったが、全員が笑顔いっぱいで、練習と同じようにゲームを楽しむことができた。 当初は友達と一緒にゲームすることが困難であった児童には、ボールを投げたい様子が見られた時に参加を促し、無理強いはしないように配慮した。その結果、自分からボールを投げることが増え、本番も十分活動することができた。 手順を決めて活動して学ぶ過程や、友達の見本を見て活動して学ぶ過程が設定できていたことが効果的であったと考える。

d かかわりを通して学ぶ〈対話的〉

友達と手をつないで道路を歩く	**【道路を歩く時の約束】** 	買い物をしに校外に出かける時の約束は、交通ルールの他に、「ペアの友達と手をつないで、並び順を守って、みんなでまとまって歩くこと」とした。視覚的に分かるようにプレゼンや絵で確認して、実際の学習を積み重ねた。 【成果】言葉のやりとりはなくても、手をつないだ相手に意思を伝えたり、相手の要求を受け入れたりしながら、ほとんどの児童が誰とでも手をつないで歩けるようになった。遅れがちな友達を待ってみんなでまとまって歩くことも定着した。繰り返しの活動を通して、お互いの理解を深め、かかわりから学んだ成果と考える。

e 学習への振り返りを通して学ぶ〈主体的〉

本単元は、「１回目の宿泊学習を成功させることができたね」と認められる体験があったからこそ実現できたと考えている。ある児童は、１回目の時には宿泊することにイメージがもてず、夜間になると情緒が不安定になってしまったが、２回目の宿泊では、初めての場所でも落ち着いて全活動を楽しむことができた。前回の学習を児童なりに振り返って学んだからこそ、より大きな成果につながったと考えている。

f 達成感を感じるために

本単元では、２回目の宿泊学習に期待感をもち、学校での学習の成果を活かせるような単元計画を考え、視覚情報を加えた教材教具を準備して授業を進めた。宿泊学習の行程には、児童が初めて利用する施設も含まれていたため、保護者からは心配する声も聞かれた。しかし、どの児童も見事に宿泊学習をやり遂げ、単元の目標を達成することができた。あらゆる場面で、児童たちが分かって、自分から動いて、できたという活動を積み重ねることができたことから、達成感も感じていたのではないかと考える。小学部の高学年にある児童にとっては、中学部への進学を視野に入れて、身近な社会体験を含んだ学習を通して、達成感が得られるような取組を継続していくことが必要であると考える。

ウ　まとめ～一年間の取組を通しての成果と課題～

表１に示したような生活単元学習の一年間の授業づくりに、アクティブラーニングの視点を取り入れたことで、児童が分かって主体的に学ぶ授業へと改善できたことはたくさんあった。例えば、学習への見通しをもちやすくするために「単元カレンダー」を活用したこと、授業ごとにスケジュールをコンパクトに伝えたこと、活動ごとの手順書を工夫したことなどは、今後も継続して児童の主体性を更に伸ばしていきたいと考える。また、友達とのかかわりを通して学んだり、活動を通して学んだりする対話的な学びの大切さも実感できた一年間であった。そして、どの単元においても地域社会とのかかわりを検討し、育てた野菜と買い物してきた材料で繰り返して調理に取り組んだり、郵便局を利用したりする学習を積み重ねたことも、児童のキャリア発達を促す面から成果があったと考える。

一年間の取組を終えて、学級が目指す子ども像に掲げていた「友達と一緒に行動できる児童」の姿は、毎日当たり前にみられるようになった。生活単元学習だけでなく、音楽や体育などの全ての授業を通して、友達と一緒に行動することを意識した取組が児童の成長につながったのだろう。

今後の課題としては、児童が示す実態の変化をその都度適切に把握して目標を設定し、活動内容と手立てを工夫することが挙げられる。その際、「主体的とは」「対話的とは」という視点から授業改善するように心掛けたい。また、「深い学びとは」という視点についても検討することで、よりよい生活単元学習の授業づくりを進めていきたい。「生活単元学習は、児童生徒が生活するための目標を達成したり、課題を解決したりするために、一連の活動を組織的に経験することによって、自立的な生活に必要な事柄を実際的・総合的に学習するもの」という基本を常に忘れず、来年度には６年生・中学部１年生になる児童たちが、より主体的な生活を送れるように、授業を通してキャリア発達を支援していきたい。

４　おわりに

今年度、小学部では「子どもがわかって主体的に学ぶ授業」をテーマに、「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点を生かした授業づくり」に取り組んだ。各学級の生活単元学習の取組では、児童や学級の実態に応じて、子どもがわかって主体的に学ぶための様々な支援が考えられ、実践されたことで、子ども達の成長が見られるようになった。例えば、環境設定を工夫することで動線がわかりやすくなり、見通しをもって活動することができるようになってきている。また、動画や手順書、写真カードなどの視覚支援を子ども一人一人の実態に合った形で提示することや授業の回数を重ねることで、声掛けや補助がなくても自分ですることがわかったり、自分の気持ちを伝えたりして、一人でできる活動が増えてきている。さらに、教材教具の工夫や改善によって、子ども達自身が自分で考え、判断し、最後まで集中して活動に取り組むことができだしたことも大きな成果だと感じられる。

授業研究の方法は、昨年度、成果が見られたことから、今年度も継続してＡＰＤＣＡサイクルに沿って授業づくりを行っている。１学期にＱ＆Ａとキャリア発達段階表を活用して児童のアセスメントを行い、２学期に各学級が生活単元学習の研究授業に取り組んだ。ビデオ録画を活用した研究協議会では、学部のテーマに沿った生活単元学習という視点から小学部の教師全員が意見や感想を出し合った。協議の中では学習内容・教材教具・学習環境の工夫、改善した点、また、主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点から、目標設定と評価に関する意見なども出され、それ以降の授業改善につなげて、成果を挙げることができたのではないかと思っている。

今後も、このような教材教具の工夫に関する情報交換やＡＰＤＣＡサイクルによる授業改善を進めていき、学部全体で授業力の向上に努めたい。「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点からの授業づくり」として、質の高い生活単元学習を目指す上では、習得した知識や技能を生活場面で実際に役立てるという視点も大切にし

Ⅳ　中学部の研究

学部テーマ「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」

１　はじめに

中学部では、今年度、校内研究テーマ「アクティブ・ラーニング(主体的・対話的で深い学び)の視点を生かした授業づくり」(３年計画)の１年次という点から、「アクティブ・ラーニング(主体的・対話的で深い学び)」を理解する手立てとして、学部テーマを「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」と設定した。昨年度までは、全校テーマ「卒業後の自立に向けた、小・中・高の一貫したキャリア教育の充実」(３年計画)に基づき、「キャリア発達段階表を活用した授業づくり」を研究テーマとして実践を積み重ねてきた。平成 28 年度には、本校のキャリア発達段階表(2012 試案)が見直され、「キャリア発達段階表(2017)」が作成されたことにより、「キャリア発達段階表を活用した授業改善」を研究テーマとして、作業学習に焦点を当てて、研究を行った。これまで培った授業づくりに必要なキャリア発達の観点から「環境の工夫」「情報伝達の工夫」「活動内容の工夫」「教材・教具の工夫」「評価の工夫」を行い、、「分かる・できる授業」を目指すこととした。また、発達段階や生活経験等、生徒の実態をより把握するために、各学年で研究グループを構成した。

２　研究内容

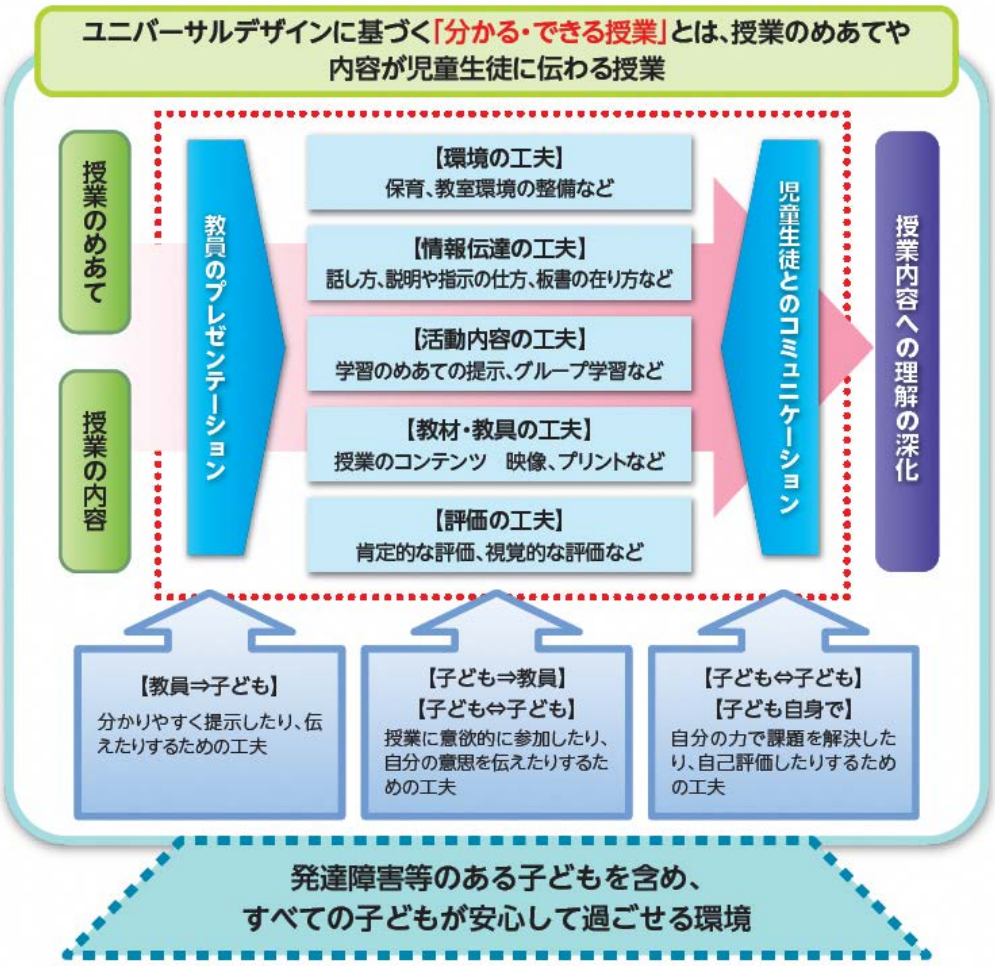
ア　ユニバーサルデザインの観点から授業づくりを行う。
イ　本校のキャリア発達段階表を活用した実践をより具体的にすすめる。
ウ　授業実践から課題や改善点を明確にすることで、授業改善を行う。

３　研究方法

ア　各学年グループで実践研究に取り組む。
イ　ユニバーサルデザインの観点について、共通理解を図るために「高知県授業づくり Basic ガイドブック」（図①）を活用する。
ウ　それぞれの実践例について研究を重ねる。
エ　学部全体での研究協議を行う。
オ　実践の成果と課題を実践集録にまとめる。
カ　学部研究日を月に一回設定するほか、各グループでの研究日を随時定める。
キ　研究テーマに沿った校内研修に参加し、研究を深める。
ク　学習指導案には、キャリア発達段階表を記載する。

４　研究経過

月　日	研　修　内　容
４月２５日	本年度の研究テーマ、研究体制、年間研修計画等の提案及び確認
５月１２日	本年度の研究テーマの決定、研究内容、研究方法等の検討
６月　６日	本年度の研究内容、研究方法等の決定
７月　４日	各グループでの実践研究の推進　　○各生徒のキャリア発達の確認
８月	各グループでの実践研究の推進　　各グループで設定
９月　５日	各グループ研修
１０月　３日	研究授業及び研究協議
１１月　１日	校内研　高等部の研究授業参観及び協議
１１月　７日	各グループでの実践研究の推進
１２月　５日	研究成果について協議
１月　５日	各グループでの実践集録原稿作成
１月１９日	各グループでの実践集録原稿最終チェック



図①　高知県授業づくりＢａｓｉｃガイドブックより引用

５　実践事例

（１）１年の取組　「授業に意欲的に参加するための、情報伝達の工夫」

ア　取組にあたって

中学部１年生は、本校小学部から入学した３名と他校から入学した６名（男子６名、女子３名）で２クラス編成となっている。生徒は、明るく元気があり、意欲的に活動する生徒や自閉症３名、自閉症スペクトラム１名の視覚支援を必要とする生徒がいるなど、障害の程度は多様で実態は様々である。

今年度は、「数学」「生活単元学習」「総合的な学習の時間」「日常生活の指導」とそれぞれの学習においての、「授業に意欲的に参加するための、情報伝達の工夫」を研究テーマに取り組んだ。

イ　実践事例

(ア)　数学「お金の学習」

ａ　設定の理由

本学年での数学の授業は、習熟度別に小グループで編成しており、本グループの生徒３名は、比較的高い計算力をもっているが、数の概念や習熟度、生活経験等による金銭の理解には大きな差が見られる。一斉学習の中で、生徒一人一人に学習のめあてをわかりやすく伝えることや、個別学習で終わらないように、学習の評価を共有することなどをねらい、生徒への情報伝達の工夫や教材教具の工夫について考えることとした。

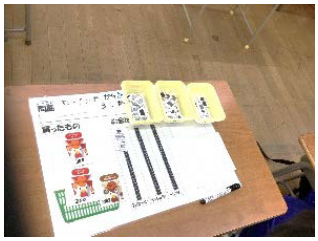
ｂ　生徒の実態と単元目標

生徒	実　　態	単元目標 ☆短期目標　★長期目標
A	四則計算ができ、暗算が得意である。一斉授業で話を聞くことや黒板の文字に注目することが苦手であり、プリントを使っての学習形態が定着している。お金カードや実物の硬貨を見て金額が答えられるが、実際の買い物の場面では、値段通りの金額を出すことはまだ難しい。	☆おおよその金額がわかる。(概算) ★お店に行って商品を購入し、一人でお金のやりとりができる。
B	四則計算ができ、文章問題を読み解く力もある。集中の度合いによって計算間違いが見られる。買い物のテーマなどに沿って予算内で商品を複数選び、筆算を使って収支の計算が正しくできる。1000 円単位の買い物が一人でできる。	☆決まったテーマに沿った買い物が予算内ででき、小遣い帳に記入できる。 ★消費税や割引金額の計算ができる。
C	100 までの数唱ができるが、位取りがまだ難しい。100 以上は間違うことがあり、特に空位数を読むことが難しい。金種の名称がわかり、品物の金額に合わせたお金カードや実物のお金を出すことができる。「5 円」「50 円」「500 円」の理解がまだ不十分である。	☆複数の金種をつかい、「10 円」「100 円」「500 円」のかたまりを作ることができる。 ★おおよその金額がわかり、おつりを受け取ることができる。

ｃ　学習の展開

学習内容	学習上の留意点と支援	準備物・掲示物
・授業内容を知る。 ・本時の目標を知る。	・スケジュールを確認し、終了時間を明確にする。 ・一人一人の目標カードを黒板に貼り、説明した後、個々の机の横に置き、意識づけをする。	・スケジュール表 ・目標カード
	・お金カードを金種ごとに指定のケースに入れ、位取りを意識させる。	・金種の分別ケース
・位取りの学習 ・金種の分別	・新聞広告で作った商品カードは、選びやすいように店名等で分類しておく。	・買い物計算シート
・問題（3～4問）に取り組む。	・買い物計算シートを使い、位取りが理解しやすいようにす	

・答え合わせをする。	る。 ・1 問終えるごとに、黒板の表に解答カード等を貼るよう促す。 ・時計カードを用い、時間いっぱい集中して取り組むよう声かけをする。 ・黒板の表を見ながら、一人ずつ答え合わせをしていくことで、評価をわかりやすくし、次の学習意欲へつなげていく。	・黒板に表を掲示しておく。



d　成果と課題

黒板に注目することができにくい生徒への支援として、掲示したカードを生徒の机に移動させ、授業内容やめあての意識づけを行った。プリント学習が定着している A は、商品カードを選んだり、買い物計算シートを利用したりすることがまだ難しく、繰り返し学習が必要である。一人で買い物ができる B は、新聞広告などの商品カードを活用することで物の値段を知り、金銭感覚を養う学習になったと思われる。C は、金種の分別や買い物計算シートの活用で、少しずつ位取りができるようになってきている。A と C は、「ぴったりの金額」から「おおよその金額」への理解が今後の課題である。また、学習のまとめとして、疑似買い物の商品カードや答えカード等を黒板に貼り、発表して評価されることで学習意欲が高まってきていると思われる。

今後は、金銭の概念を学習するとともに、実際に買い物ができる力を身につけていくための学習へと展開していきたい。お金を扱うことは日常生活で必要な力であり、「キャリア発達段階表」にも示されているように「お金の大切さを知る」ためには、繰り返しの学習が大切である。

（イ）　生活単元学習　「なつまつり」

a　設定の理由

本単元は本校で開催される「なつまつり」に中学部 1 年生は、ボウリングの店「ラウンドナイン」をオープンしようという取組である。

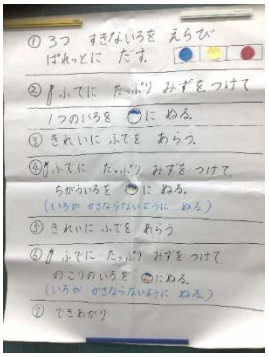
本年度、中学部 1 年生全員で行う数学の授業でボウリングゲームを行った。生徒たちは楽しそうにゲームをしていた。この体験を基に「なつまつり」企画の話し合いでボウリングのお店をすることに決定することとなった。

「なつまつり」の単元は、「①みんなで協力する。」「②自分の役割を果たす」ことを目標とし、生徒一人一人が得意な活動や店の係をして自分の役割を果たし、みんなで力を合わせてお店の準備や運営を行った。

b　指導計画

月　日	活動内容	時間数
５月１５日（月）	①「なつまつり」のオリエンテーション	１時間
５月１７日（水）	②出店内容を考える	２時間
５月２４日（水）	③ゲームの準備　④ゲーム	２時間
５月３１日（水）	①～③買い物学習（賞品買い）	３時間

６月７日（水）	①②装飾作り　③ゲームの準備・ゲーム	３時間
６月１４日（水）	①②看板制作	２時間
６月２１日（水）	①②看板制作・ポスター作り	２時間
６月２６日（月）	①「なつまつり」当番説明　⑤景品準備	２時間
６月２７日（火）	①②お店の練習（１）	２時間
６月２８日（水）	①看板制作　②～④お店の練習（２）	４時間
６月３０日（金）	③④お店の練習（３）	２時間
７月１日（土）	①お店の準備　②リハーサル　／ 午後「なつまつり」	２時間
７月４日（火）	②③後片付け　⑤お礼状書き	３時間



ｃ　学習指導略案

日時　６月７日（水）①②校時

場所　中学部１年Ａ組教室

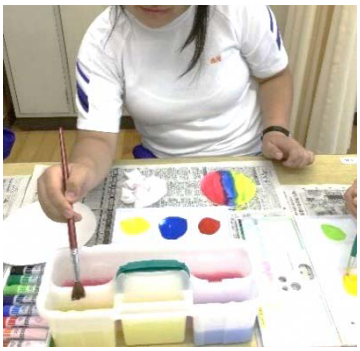
本時の学習内容：店の壁面飾り作り

本時の目標：好きな３色を選び、絵の具を塗って壁面飾りを作る。

５枚壁面飾りを作る。

本時の展開

学習活動	学習支援他
１．あいさつ ２．先生のはなし ３．壁面作り ４．片付け ５．先生の話 ６．終わりのあいさつ	・絵の具を持って集合 ・手順表（写真①）を使って、壁面飾りの作り方の説明 ・壁面飾り５枚できた生徒がもっと作れるように、前の机に画用紙を置いておく。 ・できた壁面飾りを乾かすために、教室横の棚の上に新聞を敷いておく。



準備物：新聞紙・画用紙・壁面飾りの見本・ボウリングのピン・ボウリングのボール・絵の具・筆

ｄ　成果と課題

生徒達は、見通しがもてたようで、次から次へと作品を作り、水の量を変えたり、色の配置を変えたりして個性豊かな作品ができ上がった。作っていくうちにだんだん色を混ぜたり、重ねて塗ったりして自分でアレンジしながら作ることを楽しんでいる生徒もいた。でき上がりを見て、生徒たちはうれしそうな様子が見られた。

（ウ）　総合的な学習の時間　「防災学習」

ａ　指導目標

・地震が起きたらどうなるかを考え、その際のとるべき行動を判断できるようになる。

・緊急地震速報を聞き安全確保行動ができるようになる。

・避難するときに気を付けることを知り実際に生かせるようになる。

・避難後の生活について知ると共に地震の備えをして生活することの大切さに気付く。

ｂ　指導計画　５単位時間

時数	主な学習内容
1	地震が起きたらどうなる？
2	地震から身を守るためにどうするか考える。
3	地震への備えについて知る。
4	起震車体験をする。
5	避難方法とその後の生活について知る。

c　学習指導案

本時の学習内容 ・地震から身を守るためにできることを考えよう。	
本時の目標 ・緊急地震速報を聞いて行動ができるようになる。 ・地震発生時の初期行動について考えることができる。	
本時の展開	
学習活動	学習支援他
・緊急地震速報を聞いて初期行動をとる。	・前回の学習を踏まえて、緊急地震速報を聞いて安全確保行動ができるかどうか、また周りの状況を見て同じ行動ができるかどうか確認をする。
・本時の学習内容を知る。	・緊急地震速報はどんな時に音が鳴るのかを確認し、自分の命を守るにはどうしたら良いかを学習することを伝える。
・本時の目標を知る。	・カードで黒板に貼り付け意識できるように提示する。
・本時のめあてを知る。	・カードで黒板に貼り付け、本時の学習の中でキーワードとなる語句（めあて）を提示しておく。
・地震について知る。 地震が起きたらどうなる？ 地震が起きたらどうする？ 避難する時に守ることは？	・スライドで地震に関する質問をしながら確認をしていく。その際にめあてをヒントに答えを導き出せるように促す。
・本時の学習内容を振り返る。	・キーワードとなる語句が理解できているか確認する。

d　成果と課題

授業開始前に緊急地震速報を鳴らし実際に安全確保行動ができるかどうか確認したが、音が鳴ると殆どの生徒がすぐに安全確保行動をとることができ、繰り返し学習している成果が現れていると感じた。また、周りの友達の行動を見て同じように行動ができた生徒もいて、それぞれが意識した行動ができた。

学習内容については、本時の目標を提示することで何について学ぶかを常に意識して学習に取り組めたのではないかと思う。また、本時の学習の中で習得したもらいたいキーワードについても黒板に提示して、答えを導き出す時のめあてとして活用できるようにした。教師からの質問に対してそのめあてを参考にして発表をする生徒もいて、普段なかなか手が挙がらない生徒にも自分で考えて発表ができるという支援にも繋がっている。

集団学習では、生徒の実態に幅があることから、一部の生徒の発言が中心になってしまいがちである。今後は、文字やイラストで答えを選択できるような教材の工夫をして全員が授業に参加できるよ

うにし、その中から対話的な活動ができてくるようにしていきたい。

（エ）　日常生活の指導　　「掃除をしよう」

a　設定理由

日常生活指導で、「掃除」は、将来に向けても大事な内容である。また、掃除のスキルを高めるとともに意欲や態度を育てていきたいと考えた。

b　指導目標

・丁寧に掃き掃除や、拭き掃除ができる。
・掃除場所や、掃除用具がわかる。
・汚れている場所を見つけ、きれいにする。

c　指導計画　　一斉指導　月・水・木、年間　30 分

d　Ｄ男の実態

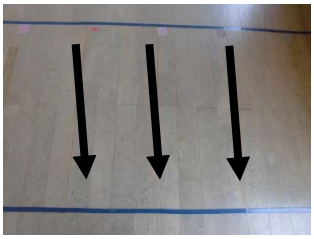
掃除	実態
掃き掃除	・ゴミに見立てた新聞紙のみを掃く。（隅にゴミが残る） ・ちりとりにゴミを集めることが難しい。 ・ゴミ箱にちりとりから上手にいれることが難しい。（ゴミ箱の周辺に落ちる）
拭き掃除	・雑巾の絞り方があまい。 ・雑巾をバケツでゆすぐことが難しい。

e　成果と課題

実態を踏まえ、廊下に限定して取り組んだ。まず、廊下を区切ることにより、掃く場所や拭く場所を明確にした。そのことによって自分の掃除場所を理解することができ、意欲につながった。次に、区画に番号をつけ、区画ごとに掃くことを意識づけして、ゴミを集める場所を決めた。しかし、数字が定着していないこともあり、順に掃くことは最初難しかった。そのため、手順表を利用した。また、雑巾絞りは水分を切ることが苦手だったため、数唱して 10 回絞ることにしたことで徐々に定着しつつある。

課題としては、まだまだ隅々まで掃除するという意識が育っていないことである。今後も掃除の大切さなどを将来と結び付け、考えられるよう取り組んでいきたい。

てじゅんしょ　（ろうかのそうじ）



やじるしのようにはく。

１から、２へはく。

２から、３へはく。

（オ）日常生活の指導　「絵カードを見て手順を覚えよう」

a　設定の理由

１学期は、本人と一緒に行動しながら、声かけ支援にて１日の活動の流れが定着するように取り組んだ。声かけで行動に移せることもあったが、見通しがもてないときは本人の気持ちが落ち着かない様子が見られた。保護者や利用している施設とも相談し、視覚支援を行うことにした。

２学期から視覚支援を実施し、写真カードや絵カードを利用していくように設定した。写真カードでは、本人が活動している様子や本人が使っている物を撮影し、絵カードでは主にトイレへの促しとして使用することにした。カードの種類については、「1 日の流れ」「トイレの促し」「特別教室等への移動」「掃除」「不適切行動」の 5 種類に分けている。自分でできることが増えていくように、また本人の負担にならないように情報伝達ができるように工夫していく。

〇活動参加の手がかりとしての「環境設定」は下記のとおりである。

①いつ：時間の構造化（荷物を出す→着替える→トイレに行く）

②どこで：場面の構造化（教室・更衣室・トイレ）

③なにを：活動（内容）の構造化（物や絵カード、写真を使う）

④どのようにするか：方法の構造化（手順表）

⑤活動が終わったらどうするかを明確にする

（一通りできれば、できたことに対して褒め、ご褒美的な活動をする）

b　生徒の実態

日常生活の指導	実　　態
食事	部分介助。スプーンを使用している。１口ほどの食べ物を載せた小皿を左手で持って、自分でスプーンを持って食べるように支援している。 スプーンでうまく食べることが難しい時に手で掴んで食べることがある。あまり噛まずに食べるので、ゆっくり食べるようにと声かけしている。
排泄	おむつ使用。定時排泄。トイレで成功したときにパンツを着用し、おむつ離れできるように様子をみている。
衣服	部分介助。上着の着脱は介助が必要であるが、ズボンについては自分で履くことが増えてきている。
全体	身辺自立が難しく、部分介助で行っている。自分でできることが増えるように支援している。

c　指導計画（４段階）

段階	内　　容
1	教師と一緒に行動し、持ち物の置き場所や朝の会までの流れを知る。
2	絵カードや声かけで、教師と一緒に手順を見て、持ち物を所定の場所に置き、着替えをしてトイレに行くまでの流れを知る。
3	絵カードや声かけで、できるだけ自分で持ち物を所定の場所に置く。 絵カードを見て、着替えを持ち更衣室に行き、教師と一緒に着替える。 絵カードと声かけで、トイレに行くことを知り、トイレに向かう。
4	絵カードと声かけで、自分でできることを増やす。

d　学習内容

「絵カードを見て流れに沿って所定の場所に持ち物を置くことができる」

「自分でできることに挑戦し、できる限り自分でできることを増やしていく」

e　学習目標

「絵カードを見て手順を覚えよう」

「自分でできることを増やしていこう」

f　本時の展開

本時の展開	
学習活動（メインのみ記載）	学習支援　他
１Ａ教室 １　持ち物を所定の場所に置く ・教室に入り、持ち物を出して、置く。	・絵カードを提示し、１つずつ鞄の中身を出し、所定の場所に持ち物を置くように声かけする。
２　着替えをする。 ・更衣室に行く。 ・着替えをする。	・着替えを自分で持ち、更衣室に行くように声かけする。 ・声かけにてロッカーを開けるようにする。 ・教師と一緒に行い、声かけでできるだけ自分で着替えができるように支援する。
３　トイレに行く。 ・トイレに向かう。	・絵カードを提示し、トイレに必要なものを持っていくことができるように声かけする。

○主体的な学び

絵カードを見せることにより、今やるべきことを知り見通しをもって取り組むことができる。

○対話的な学び

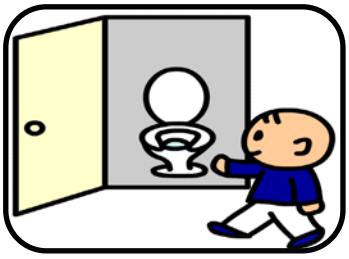
着替えの場面では他の生徒も一緒に着替えることがあるので、時には教師とではなく、生徒とかかわりをもって着替えができるようになる。

○深い学び

繰り返し行っていくことで、一通りの流れに沿って、できるだけ自分でできることが少しずつ増えていく。

●使用した教材

トイレへの促しカード



トイレにいきます

連絡帳のマッチング

かばんを降ろすときに提示。

g　成果と課題

トイレへの促しで、声かけ支援だけでは、どこへ行けばいいのか把握が難しかったのか、トイレへ行くという行動への切り替えに時間がかかっていた。視覚支援にて支援を行うと、２学期後半にはカードを見ただけでトイレに行くことができるようになっていた。

朝の会までの流れについては、声かけだけでは見通しがつかず、他の事に気がそれてしまい、集中が途切れていた。しかし、順序通りにカードを見せ、声かけすると一つひとつに集中して流れにそってできることが増えてきた。今後は本人の負担にならないように少しずつ視覚支援カードを作成し、見通しをもって自分でできることが増えていくように考慮していきたい。

ウ　まとめ

１学年は、９名のうち３分の２の生徒が他校からの入学生ということもあり、集団作りや生徒一人一人の実態把握に多くの時間を設けながら実践に取り組んできた。生徒たちは、どの学習においても初めて体験することが大半であり、見通しがもてずに不安や戸惑いが見られることが多かった。そこで、学年では、「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」のポイントの一つである「情報伝達の工夫」に焦点を当てて、学習活動全般において生徒にとってわかる授業を考える取組を実践してきた。

教科学習(数学)では、グループの中でのかかわりを意識しながら、個々の実態にあった学習内容の理解を促す工夫が必要であると感じた。また、黒板の文字を注視することが難しい生徒への情報伝達の方法を改善していくことも課題となった。生活単元学習での「なつまつり」に向けた取組や総合的な学習での「防災学習」では、一斉指導の中で、授業内容やめあてをどのようにわかりやすく伝えていくかを考え、掲示の方法を模索して、生徒自らが考えるためのヒントを提示する工夫をした。一斉指導の中で、文字がわからない生徒への視覚的支援のあり方については今後の課題である。さらに、日常生活の指導においては、掃除の手順表や日課のスケジュール表を見て繰り返し学習することで、写真やシンボルマークなどの意味が理解でき、見通しをもって主体的に行動できるきっかけとなった。

このことから、生徒にとって授業の到達点がイメージでき、達成感が得られる授業を目指すことは大切であり、生徒が主体的に意欲をもって学習する場面づくりができるよう今後も工夫していきたいと考える。

（２） 中学部２学年の取組

「テーマ：生徒自らが主体的に授業に取り組む姿を目指した手立て」

ア　取組にあたって

（ア）取組について

中学部２学年の取組は、学部テーマである「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」から、教科学習における「分かる・できる授業」を目指した授業づくりを行うこととした。発達段階や生活経験等、生徒の実態をより深く把握することを目的として、学習の習熟度を基準にしたグループに分かれて取組を行い、生徒が苦手意識をもっている教科学習において、「主体的・対話的で深い学び」を引き出すことができるように実践することとした。実践報告としては、国語科の単元「慣用句を楽しもう！」を取り上げて報告する。

（イ）生徒の実態

本校の中学部２学年は、８名在籍しており、４名ずつの２クラスで構成されている。好きな学習には一定時間取り組もうとするが、自分の見通しと異なる状況では、時々パニックを起こしてしまう生徒やＡＤＨＤ傾向の生徒、周りからの刺激を受けやすい生徒など、個人の特性によって実態は様々である。また、発達段階にも差がみられることから国語と数学については、学習の習熟度を基準にしたグループに分かれて学習している。

本学習グループは、女子２名、男子３名の計５名で構成されており、このうち２名が自閉症を併せ有している。特性や経験の少なさから集団での学習場面では、全体への指示が聞き取れないことがある。日常生活においては、相手に自分のしたいことを伝えようとする様子がみられ、友だち同士でも積極的に関わり合うことができている。しかし、人間関係の形成に困難さを抱え、コミュニケーションについて課題をもっていることから、曖昧な表現や言葉の意味の取り違えなどで、トラブルになることがある。また、自分の行動の振り返りを行うことが苦手である。見聞きしたことや経験したことについては、教員が傍で詳しい内容を一つずつ聞きとると、その状況について話すことができる。日記等を書く際にも、同様の手立てを行うことで順序立てて書くことができつつあるが、気持ちを表す言葉については、「つかれた」「たのしかった」等、パターン化して書く様子がみられる。新しい取組には、不安になることもあるが、楽しいと感じられることには、興味を示し、成功体験を積み重ねることや称賛することで、主体性や学習意欲が高まる生徒たちである。

（ウ）研究対象生徒Ａの実態について

〇周囲が気になり、気が散りやすい。

〇興味をもつと集中して聞け、質問等もできる。

〇思ったことをすぐに言ってしまう。

〇日記等の文章は、したことだけを書き、感想は「楽しかったです」とワンパターンになる。

〇褒めることで意欲的に取り組むことができる。

〇経験の少なさや不器用さから自信がない。

〇自分の気持ちを言葉で表現することが難しい。

〇話が聞き取れず、思い込みで行動してしまうことがある。

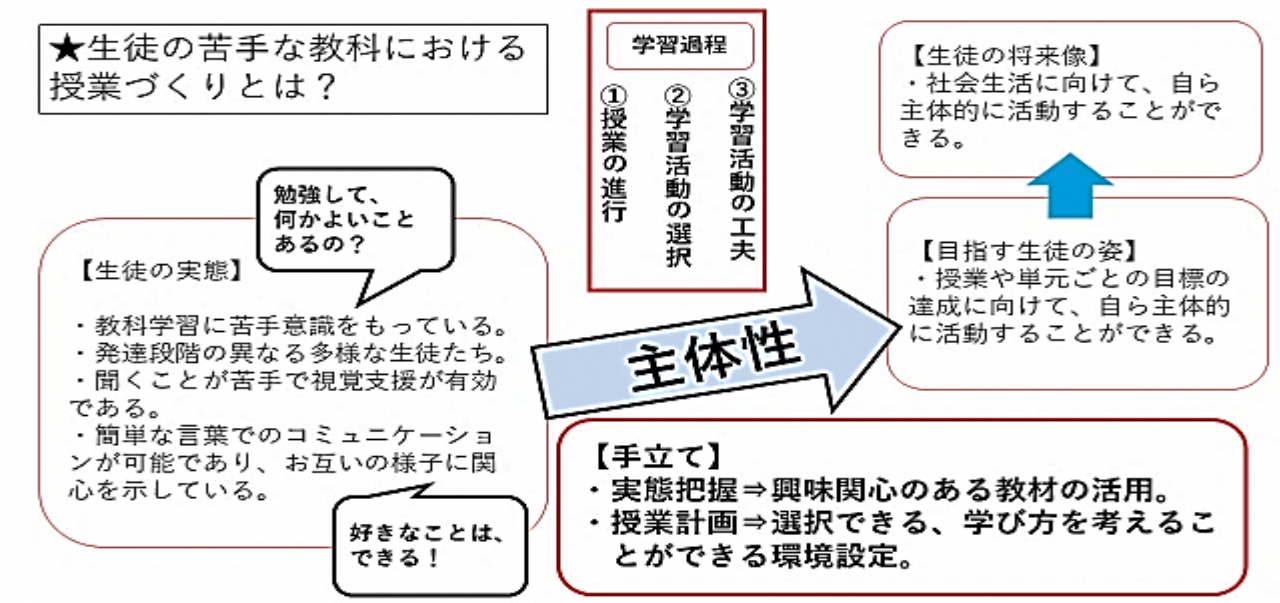
（エ）研究方法

〇ユニバーサルデザインの観点から授業づくりを行う。

〇本校のキャリア発達段階表を活用した実践をより具体的にすすめる。

〇授業実践から課題や改善点を明確にすることで、授業改善を行う。

（オ）取組の概要



イ　実践事例

（ア）単元名「慣用句を楽しもう！」

（イ）単元の目標

・正しく慣用句を使うことができる。

（ウ）評価規準

・作文に気持ちを表す言葉や慣用句を書くことができたか。

（エ）単元について

本単元を通して、理解できる言語や生徒の得意なことを増やし、会話を楽しめるようになってほしい。集団の中で、生徒それぞれが得意分野で役割を担い、自分の考えになかったものを受け入れて、自らの考えに生かすことができるようになり、将来的には、相手の立場や考えを考慮し、尊重することで自らを発展させることにつなげてほしいと考えた。学習の達成感を感じられる場面を多く設定することが、集団の中でこそ高められる自己有用感につながっていくと考えた。誰もがリーダーシップを発揮できる状況づくりとして、生徒自身が輪番で授業進行を行う。サブティーチャーになり、授業を進行していく過程で、自分たちの活動を振り返るきっかけや状況を作り、次の学習活動に生かせるように、自らで授業を組み立てていく。また、司会することで、相手に伝わる喜びを感じ、日々の中でも、言葉で気持ちを伝え合うことができるようになってほしいと考えた。意欲と見通しをもって学習に取り組めるように、次のような環境設定を行う。授業の流れを固定化し、目標を声に出して読むことで、目標を意識し、授業に参加できるようにする。カルタについては、勝つことに固執してしまい、気持ちのコントロールが難しい生徒のために、ルールを事前に提示することで、気持ちの切り替えを促していく。カルタをとりたい気持ちが、静かに最後まで聞こうとする意欲を促し、相手が聞き取りやすい読み方や声の大きさで読むことへの気付きになると考えられる。発音に自信のない生徒がいることから、群読をすることで滑らかに発音できるように練習していく。また、覚えた慣用句をプリントに記入し、掲示したものを全員で読み上げることで、誰が見ても読める文字や丁寧に文字を書くことの大切さに気付かせたい。そして、生徒たち自身が学び方を選択することで、主体的な活動を促す。本単元のねらい、教材設定の理由は以下である。

○単元について

○ねらい
学習指導要領の（1）話のおよその内容を聞きとる。
（3）簡単な語句、文及び文章などを正しく読む。

○学習内容・・・「慣用句」
二語以上の単語が固く結びつき全く異なる意味をもつ。会話や文章で定型句として用いられ、体の一部分や身近な動物、食品を用いた表現が多く、**生徒たちが関心をもちやすい。**また、日常会話の中で使われることが多く、生徒たちの**コミュニケーション力の向上**や**言語の獲得**にも効果的であると考えられる。

「話す」それぞれが感じたことを伝え合うことや実際に覚えた慣用句を使ってみることで、コミュニケーションがとれるようになることを目指したい。

「書く」慣用句を使った文章を考える。丁寧に文字を書くことの大切さに気付かせたい。

環境の工夫・・・協働学習
印象的な活動を行い、実際的、具体的な内容の指導を行うことで学習内容の定着を図り、漢字や慣用句についての理解を深めていきたい

教材・・・「カルタ」
知識が断片的になりやすく、応用されにくい学習特性をもつ生徒たちが、**集団で楽しく学習**できる

「読む」カルタを順番に読み上げることで、相手が聞き取りやすい読み方や声の大きさを意識できるようになってほしい。

「聞く」読み手の言葉を最後まで聞き終わった時点で、カルタをとってもよい」というルールを設定することで、聞く意欲を促したい。

（オ）単元の学習計画（全８時間）

次	時間	学習活動	評価基準	
1	3	「慣用句を読もう①」 ・群読（全体読みか交代読みを選択） ・カルタ（漢字カルタか県名カルタを選択）	・全体に声を合わせて読むことができる。 ・文章を読むことができる。	授業実践Ⅰ
		「慣用句を読もう②」 ・群読（全体読み・交代読み） ・慣用句カルタ（漢字の読み方）	・一行ずつ交代読みすることができる。 ・慣用句の漢字を読むことができる。	
		「慣用句を読もう③」 ・群読（全体読みか交代読みを選択） ・カルタ（慣用句カルタ）	・滑らかに文章を読み上げることができる。 ・慣用句のカルタを取ることができる。	授業実践Ⅱ
2	2	「慣用句を覚えよう①」 ・慣用句カルタ（意味のマッチング）	・慣用句の意味を聞き、それに応じた慣用句カルタをとることができる。	
		「慣用句を覚えよう②」 ・慣用句の意味のマッチング	・慣用句が示す状況や気持ちを考えるができる。	授業実践Ⅲ
3	3	「慣用句を楽しもう①」・作文	・気持ちや状況を文章に書くことができる。	
		「慣用句を楽しもう②」・詳しい作文	・自分の書いた作文をより詳しく添削する。 ・慣用句を使った文章を書くことができる。	
		「慣用句を楽しもう③」・壁新聞を作る	・友だちと協力して、主体的に壁新聞を作ることができる。	

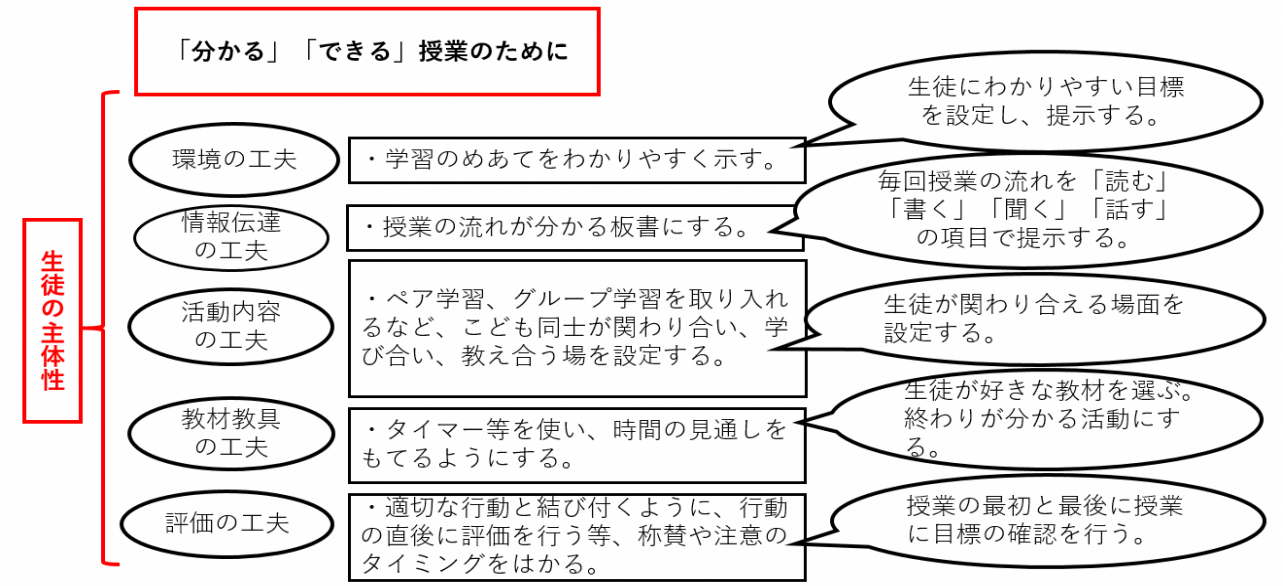
（カ）授業づくりの観点について

ａキャリアと自立活動の観点

○キャリアの観点
・人間関係形成能力（つながる力）　**「集団の中で自分の意見を述べる」**
　「状況に応じた言動をする」
・情報活用能力（みつける力）　**「公共の基本的なきまりを守って行動する」**
・将来設計能力（あこがれる力）　**「好きな活動をもち、自発的に取り組む」**
・意思決定能力（かなえる力）　**「自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む」**
　「よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす」

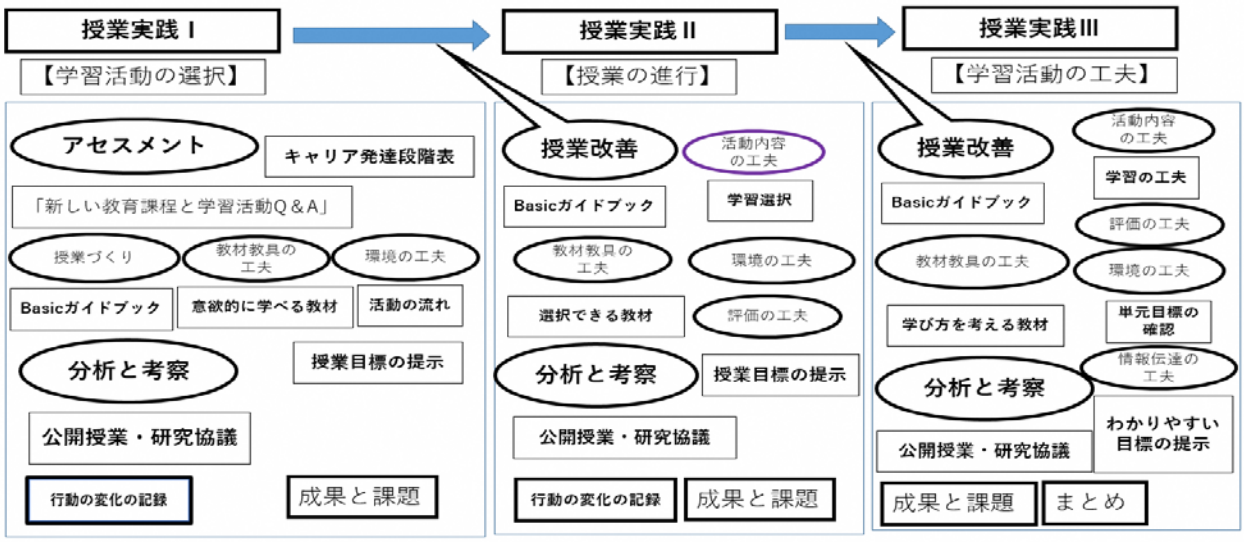
○自立活動の観点
・【心理的な安定】　**（１）情緒の安定に関すること**
・【人間関係の形成】　**（２）他者の意図や感情の理解に関すること**
・【人間関係の形成】　**（４）集団への参加の基礎に関すること**
・【コミュニケーション】　**（３）言語の形成と活用に関すること**

b ユニバーサルデザインの観点



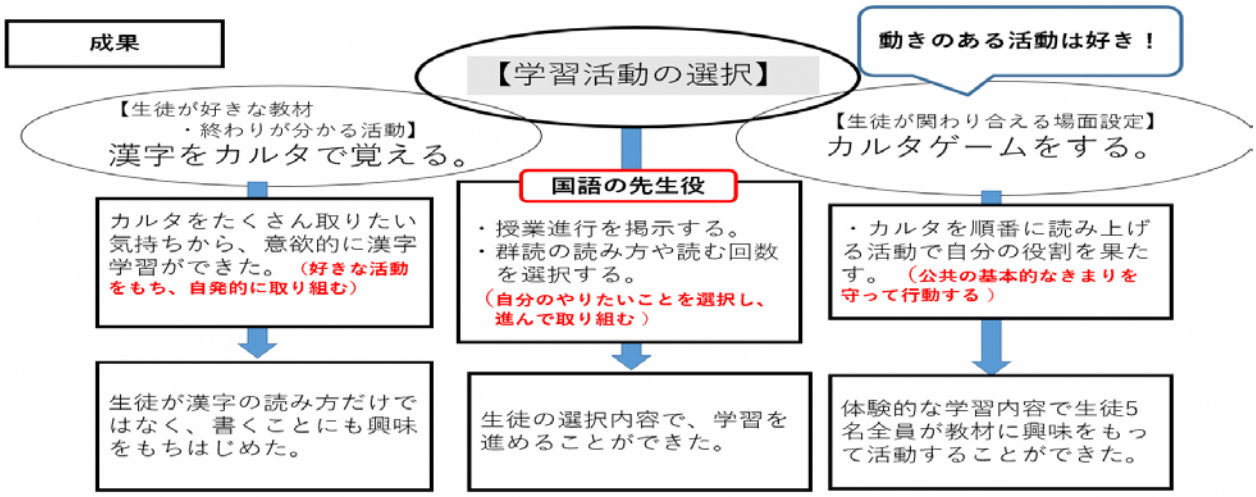
（キ）授業実践について

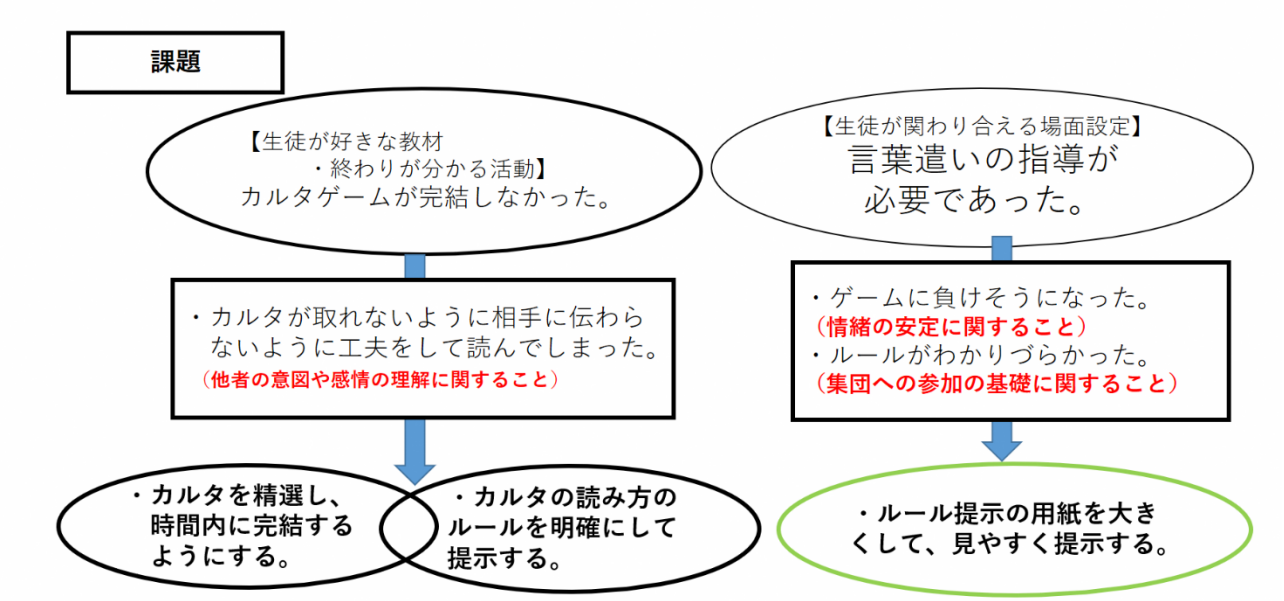
a 授業実践計画



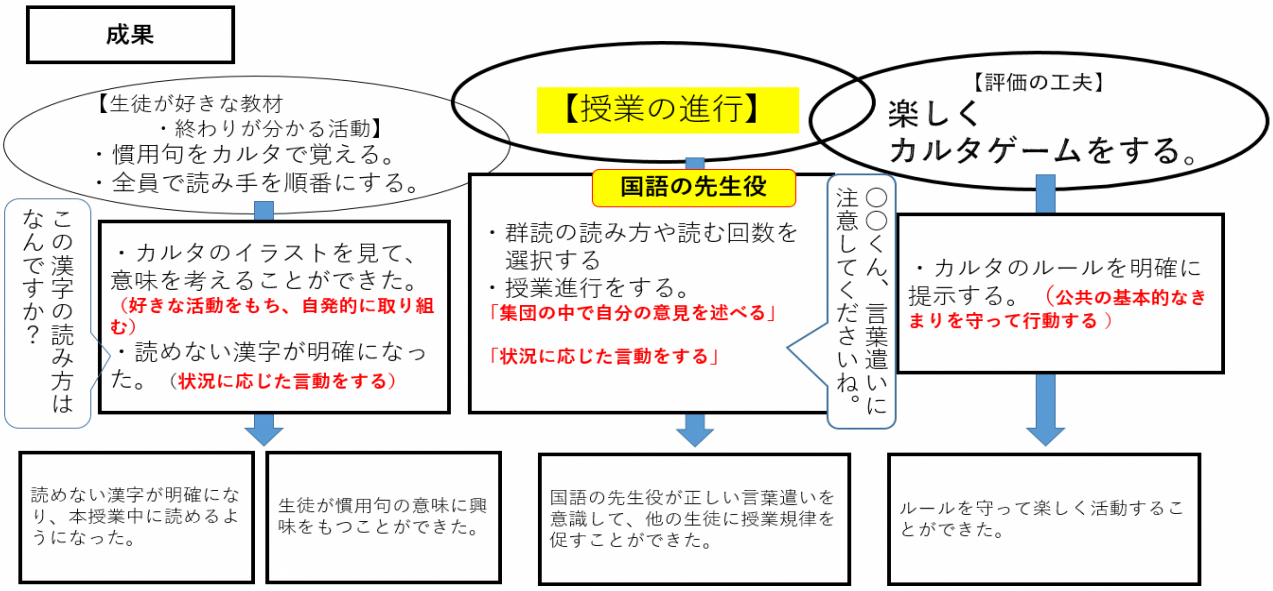
b 授業実践における成果と課題

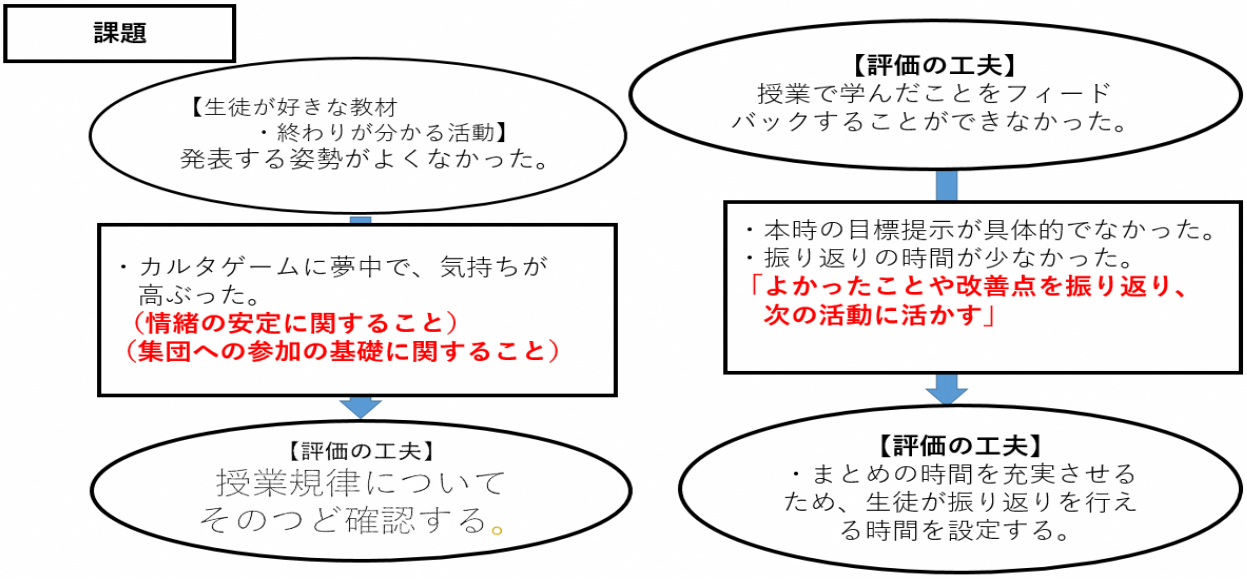
（a）授業実践（学習活動の選択）



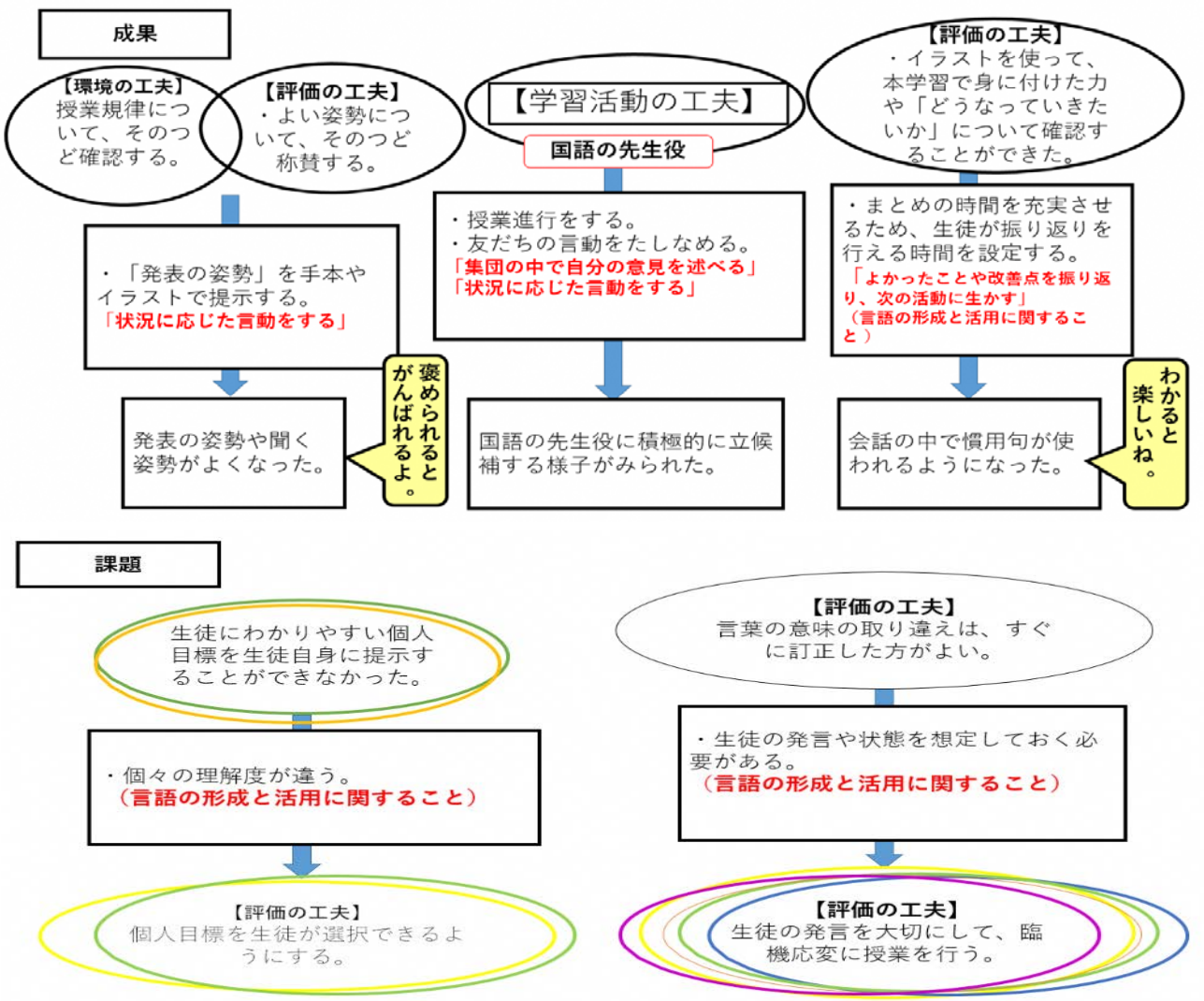


（ｂ）授業実践Ⅱ（授業の進行）





（C）授業実践Ⅲ（学習活動の工夫）



（ク）生徒の実態の変化

生徒の実態について、より深く把握するために「高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（２０１７改訂版）」「新しい教育課程と学習活動Q&A」の中からそれぞれ国語科の単元学習に関連する項目を抜粋し、５月と１１月にアセスメントを行った。また、研究対象生徒Ａの実態については、国語科の学習活動以外でも変化がみられた。

a「高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（２０１７改訂版）」

※できる（５月）　・・・ ⑤　　もう少しでできる（５月）　・・・ △5

できる（１１月）・・・ ⑪　　もう少しでできる（１１月）・・・ △11

			小学生		中学生	高校生
キャリア発達の段階			生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
能力領域 ※1	※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力
人間関係形成能力（つながる力）	人間関係形成・社会形成能力／自己理解・自己管理能力	人とのかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。 △5 ⑪		自分と相手の違いを知る。 △11	現場実習における自分の能力や適性を知る。
		集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。 ⑤	友達と協力して学習に取り組む。 ⑪	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
		意思表現	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。 ⑤	集団の中で自分の意見を述べる △11	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
		場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。 △5 ⑪	状況に応じた言動をする。 △11	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力（みつける力）／将来設計能力（憧れてめざす力）／意思決定能力（かなえる力）	課題対応能力／キャリアプランニング能力	社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。 △5 ⑪	公共の基本的なきまりを守って行動する。 ⑪	社会の様々な情報やサービスを知る。
		働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。 ⑤	社会には様々な仕事があることを知る。 △11	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
		やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。 △5 ⑪	好きな活動をもち、自発的に取り組む。 ⑪	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
		目標設定	自分のことは自分で行おうとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。 △5 ⑪	自分で達成可能な目標を立てる。 △11	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
		自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。 ⑤		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。 △11	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
		自己評価	活動や一日の振り返りをする。 △5 ⑪		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。 △11	現場実習などでの自分を評価する。
		自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。 △5 ⑪	様々なトラブルに対しての対処方法を身につける。 △11	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1＝国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より　※2＝中央教育審議会答申（平成 23 年 1 月）より

b「新しい教育課程と学習活動 Q&A」によるアセスメント

※ひとりでできる・・・○　教員の支援があればできる・・・△　まだできない・・・×

【平成 29 年 5 月】　→　【平成 29 年 11

国語	A	B	C	D	E	A	B	C	D	E
実際的な場面で、指示や説明などを聞き取って行動する。	△	○	○	○	○	○	○	○	○	○
状態や動作を表す言葉を言う。	△	△	○	○	△	○	○	○	○	△
事柄の順序をたどって、経験したことを話す。	△	△	△	△	△	△	△	△	○	○
人に尋ねられたときは、はっきり応答する。	△	△	○	○	△	○	△	○	○	△
必要に応じて相手に合わせて丁寧な言葉を使う。	△	△	○	○	○	○	○	○	○	○
見聞きしたことや経験したことなどについて、できるだけ順序立てて書く。	△	△	△	○	△	△	△	△	○	○
簡単な手紙や日記を書く。	△	△	○	△	△	○	○	○	△	○
句点（。）、読点（、）などに注意して書く。	△	△	△	△	△	△	△	△	△	△
必要に応じて、漢字や片仮名の使い方などに気付く。	△	△	△	△	△	○	○	○	○	○
長音、濁音、促音、撥音、助詞「を、は、へ」など正しく読んだり書いたりする。	△	△	○	○	△	○	△	○	○	△

（ケ）成果と課題

本単元では、「ユニバーサルデザインに基づく観点」「キャリアの観点」「自立活動の観点」から授業づくりを行い、生徒の発言や様子の変化に着目して、そのつど授業改善を行うことができた。生徒の主体性を引き出すことで、生徒の国語の授業に対する苦手意識を払拭することができたと考えられる。

しかし、生徒に分かりやすい授業目標の設定については課題がある。「なにを？」「どうして？」「どのように？」学ぶのか、動機づけを行うことが重要である。

・生徒の実態を把握し、興味関心のある教材を活用することができたか。

「慣用句」

「話す」実際に覚えた慣用句を使ってみることで、コミュニケーションがとれるようになることを目指したい。

「そんなことすると、白い目で見られるぞ」
生徒同士の会話の中で実際に覚えた慣用句を使っている場面がみられるようになった。

「書く」慣用句を使った文章を考える。丁寧に文字を書くことの大切さに気付かせたい。

作文を書く際に、**慣用句を使って気持ちを表現**することができた。

「カルタ」

「読む」カルタを順番に読み上げることで、相手が聞き取りやすい読み方や声の大きさを意識できるようになってほしい

相手を意識した読み方や話し方をすることができるようになった。

「聞く」「読み手の言葉を最後まで聞き終わった時点で、カルタをとってもよい」というルールを設定することで、聞く意欲を促したい。

話を最後まで聞こうとしたり、話が途切れた時に、**顔が上がる**ようになった。

（コ）まとめ

授業づくりを行う上で、生徒の実態に応じた教材教具の工夫が不可欠である。今回の「慣用句」の学習については、意味が曖昧であることから、知的障害の生徒たちの実態に即した教材であったかという点が検討課題であった。しかし、小学部、中学部、高等部と系統的に段階を踏まえながら、社会生活に向けて、学習の基礎を積み上げることが必要であると考え、国語学習で身に付けた力を日常生活で汎化させ、社会生活でも活用、応用できるようになることを目指した。難しい教材であったが、生徒同士の会話の中に慣用句が聞かれるようになり、作文の中に慣用句を使った文章も書くことができはじめた。これらの成果から、生徒の主体性に視点をおいた手立てを行うことやユニバーサルデザインに基づく授業づくりを行うことで、生徒のキャリア発達を促すことができると考えられる。

（３） 中学３年生の取組「ユニバーサルデザインに基づく調理及び販売学習」

ア　取組にあたって

本学年には生徒が 13 名在籍しており、２クラス編成で運営している。そのうち、自閉症の生徒１名については、激しいパニック行動がある。登校は別教室であるが、一日の流れが始まると、教室に入り授業に参加できるようになってきている。他 12 名についても、認知や行動及び情緒面は多様であり、指示されたことについての理解の差は大きく、一人一人の支援の在り方には細かい配慮を要する。また、身体を動かすことにより情緒が安定する生徒が多い。

日常生活における衣服の着脱や食事、排泄等の基本的生活動作はほぼ自立しているが、マナーや衛生面での指導は必要である。また、自信の無さや経験不足から消極的な生徒が多いが、様々な経験を積むことにより少しずつ積極性が見られるようになってきた生徒もいる。学習中の挙手や自ら役割を買って出るような行動も目立つようになってきた。

生徒が今もっている力を発揮して興味や関心をもちながら学習できる活動は何かを検討した結果、「食」を一つのテーマにすることが望ましいと考えた。本学年の生徒は「食べる」ことに対してすごく意欲的であるが「自分で調理をする」ことは自信のなさからか苦手意識をもっている生徒が多いのが実態である。

「調理学習」は生徒たちにも理解しやすい取組だと考えた。調理の手順書を作ることや、販売のルールを決めることで指導内容を焦点化しやすい。活動を通して、お互いに協力して活動していることに気づくことは「共有化」につながる。そして、決められた役割をきちんと果たすことにより、一つの商品ができ上がることを知ってもらいたい。友だちの頑張りや自分の頑張りにも気づかせるようにしたい。また、調理室という空間では「場の構造化」が簡単で行動しやすく使いやすいため、全員が無駄な動きなく学習活動の効率が上がるのではないかとも考えた。実践は「グリルチキン」班と「チャプチェ」班の２つのグループに分かれて活動することにした。そうすることにより効率よくできるスタイルを模索でき、一人一人に支援が行き届くようになり、全員が「楽しくわかる・できる」調理学習になるのではないかと考えテーマを設定した。

（ア）授業の流れ

・授業では、開始のチャイムが鳴るまでに身支度を整えて着席する。その後、本時の流れの確認を行うとすぐに二つの班に分かれて作業に入り、パック詰めまで仕上げる。
・休憩
・販売グループ（２班）と片づけ班に分かれて活動する。

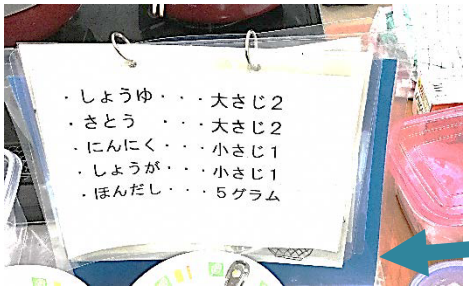
（イ）活動計画

単元名	時数	活　動　内　容
「調理学習」	1	・話し合い（何を作りたいか）をする。
	7	・調理をする。（まず、全員で試食し味を確認する） ・調理、販売をスタートする。 ・最後の日は全員で試食し、成長した味を確認した後、調理室を大掃除する。
	1	・ふりかえり（感想など）をする。

イ　グリルチキン班について

グリルチキン班は６名の生徒で構成されており、それぞれの生徒が自分の活動に見通しをもち主体的に活動できる事を目標に取り組んだ。支援度によって３つのグループに分かれて活動を行った。支援度の低いグループ①は２人の生徒が担当しており、主に包丁を使って鶏肉の切り分けや、フライパンを使って焼き揚げる作業を行った。グループ②は１人の生徒が担当で調味料の計量や出来上がったグリルチキンの分量を量って容器に詰める作業を行った。支援度の高いグループ③は３名の生徒で前述のグループ①が切り分けた鶏肉とグループ②が計量した調味料とを混ぜ合わせる作業や、包装容器の装飾を行った。

グループ①、②の生徒が使用した手順書は活動スペースの確保や、作業をしながら手順書を見やすくするためにめくり式で作成し、生徒が使う手順書の台紙をそれぞれ色分けして作成したことで、自分の使う手順書を覚えることができた。



〔グループ②で使用した手順書〕（台紙青）

最初は教員が調理活動に集中できるように環境整備を行っていたが、調理学習を重ねたことでグループ①の生徒は自分達が使っている道具を考えて、自発的に必要な道具を準備するようになり主体的に調理学習を行う事ができるようになった。

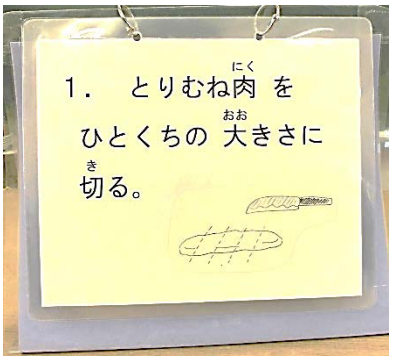
〔初期の調理学習の様子〕
（準備）

〔自分達で準備ができ始めたので
準備は最低限にする。〕
（準備）

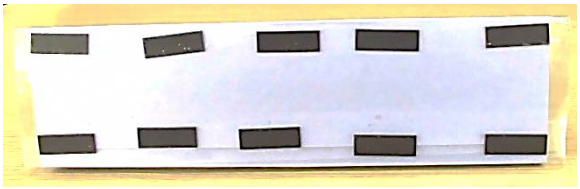
（ア）取組について

生徒の発達段階やそれぞれのグループに応じて支援具を活用した。

〔支援具の例〕

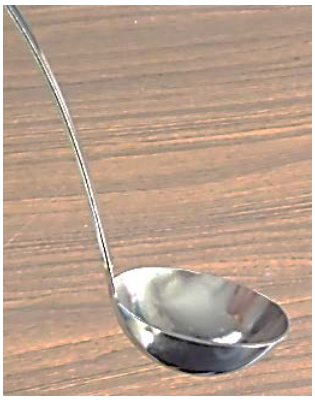


グループ①②の生徒が使った手順書
机に固定できるように磁石の張り付けを行った。



グループ②の生徒は通常の計量スプーンでは液体をこぼしてしまうことがあった。そこで、お玉型の計量スプーンにすると改善されてこぼさずに計量することができた。…Ⅰ

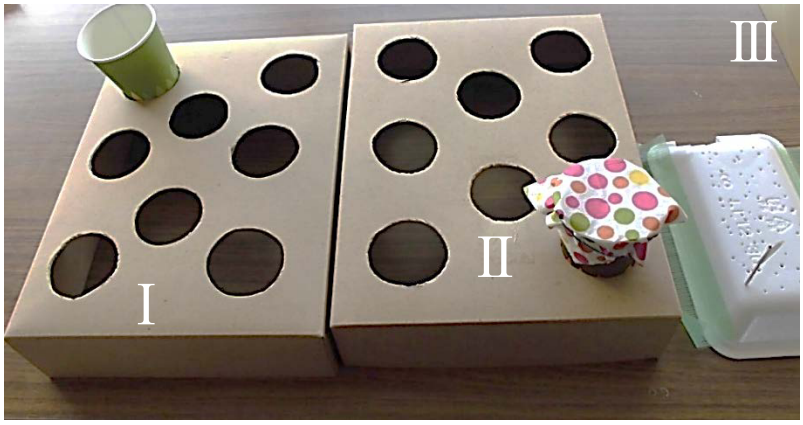
調味料を入れやすくするために容器に袋をかぶせて使用した。
…Ⅱ



Ⅰ

Ⅱ

グループ③ではⅠ～Ⅲの行程を二人の生徒が協力して行った。
Ⅰに計量済みのグリルチキンが置かれると容器の包装を行いⅡに置く（生徒①が担当）
Ⅱに置かれた包装済みのグリルチキンにⅢの爪楊枝を入れる。（生徒②が担当）
活動初期こそ支援具を使っていたが、継続して取り組むことで支援具がなくても同様の作業を行う事ができるようになった。



（イ）生徒の変容

グループ①の生徒は手順書を使って自分の作業を確認できたことで、次に自分の活動には何が必要かを考えるようになった。他のグループの活動が終わっていない場合は、積極的に手伝うようになった。また活動初期には包丁を使っての作業には不安感を抱いていたが、継続して活動に取り組むことで自信をもって取り組むことができた。グループ②の生徒は各グループの生徒と協力して活動に取り組むことで活動初期にはマイペースに作業をしていたが、少しずつ他者を意識した活動ができるようになった。グループ③の生徒は支援度の高い生徒の集団であるため、発達段階に応じたそれぞれの支援具を使うことで、今自分のやっている活動を意識して取り組むことができた。

また、グリルチキン班全体で活動内容を共有したことでグループ①の生徒がグループ③に対して独自の声掛けや相手を気遣うような声掛けをする場面が見られ、積極的なリーダーシップや生徒同士でのよい関わりが見られるようになった。

〔活動の様子〕

鶏肉の切り分け

グリルチキンの計量

値札・包装容器の装飾材作り

鶏肉の下味付け

〔工程表〕

	グループ①	グループ②	グループ③
工程	２００ｇの鶏肉を一口大に切り分ける×５ ※早く終わったらグループ②を手伝う	調味料をそれぞれ計量して袋に入れる×５	値札、包装容器の装飾を行う。
	調味料の入った袋に鶏肉を入れグループ③に渡す	小麦粉を袋に入れる×５	グループ①から受け取った袋を混ぜ合わせた後グループ①に渡す。
	グループ③から受け取った鶏肉を小麦粉入りの袋に入れグループ③に渡す。	グリルチキン計量の準備。	小麦粉入りの袋を混ぜ合わせた後グループ①に渡す。
	油の準備		包装容器の準備
	グループ①から受け取った鶏肉を調理しグループ②に渡す。	グループ①から受け取った鶏肉を８０ｇずつ容器に詰める。	グループ②の容器を受け取り包装を行う。
	完成		

ウ　チャプチェ班

チャプチェ班は７人の生徒で構成しており、それぞれの生徒の得意な面を活かし自分の担当する活動に責任をもって、主体的に活動できることを目標に取り組んだ。活動グループは１～２人の少ないメンバーで構成し、全部で４グループに分かれている。グループと活動内容、構成メンバーは以下の通りである。グループ分けは、生徒の特性や相性、また得意な面を活かして活動できるように考慮した。

活動グループ	活動内容	生徒
調味料グループ	チャプチェの味付けに使う調味料を量り、混ぜ合わせる。	A、B
具材グループ①	ニラをちぎる。	C
具材グループ②	・糸こんにゃくを切り、湯通しする。 ・豚肉を切り、調味料を量り肉に下味をつける。	D、E
具材③と炒めグループ	・人参、玉ねぎを細切りにする。しめじの石づきを切り、子房に分ける。 ・それぞれの具材を炒め、調味料で味付けしチャプチェを完成させる。	F、G

（ア）取組について

４つのグループで、グループごとに調理台を分けて活動を行った。それぞれのグループでチャプチェの具材と調味料の準備を分担して行い、それを炒めグループに持ってくるようにして効率よく調理ができるよう工夫した。チャプチェが完成した後は、パック詰めと、使った調理道具や食器の片付けを行った。この時にはグループを分解し、それぞれの生徒が得意な仕事を担当するようにした。調理の流れと生徒の動きは以下の工程表に示す。

工程表

	調味料グループ（A、B）	具材グループ①（C）	具材グループ②（D、E）	具材③と炒めグループ（F、G）
工程	・醤油・酒・砂糖・白ごま・コチュジャン・ごま油・鶏がらスープの素・塩・コショウを量る ・量った調味料を泡だて器で混ぜる	・ニラを約５㎝の長さにちぎってザルにいれる ・ちぎったニラをボウルに入れた水で洗う。 ・炒めグループに持っていく	D・しらたきをザルに開けて水切りをする ・三等分に切って水洗いした後２分間ゆでる ・水切りをして、炒めグループに持っていく E・かたくり粉、ニンニク、ショウガ、酒の分量を量る ・豚肉に絡めて揉みこむ	・人参、玉ねぎを水洗いし、包丁で細切りにする ・しめじの石づきを切り、子房に分ける ・具材を炒める。 ・調味料で味付けをする ・水溶き片栗粉で

	・炒めグループに持っていく		・キッチンバサミで一口大にきる ・水溶き片栗粉をつくる ・炒めグループに持っていく	とろみ付けする
片付け パック詰め・	・パックを並べて、ラベルを貼る ・食器を拭く	・食器を拭く	D・パックを並べて、ラベルを貼る ・パック詰めをする E・使った食器を洗う	E・食器を洗う F・パック詰めをする

（イ）生徒の変容について　（チャプチェ「調味料グループ」の取組）

支援方法や支援具の改良により、生徒の変容が一番大きかった「調味料グループ」に焦点を当てることにした。

調味料グループは２名の生徒が担当し、活動内容としては、９種類の調味料（醤油、酒、砂糖、鶏がらスープの素、コチュジャン、ごま油、塩、コショウ、白ごま）を大匙、小匙の計量スプーンを使って、一つの器に順番に入れていき、合わせ調味料を作ることである。２人とも容器別に同じものを作った。

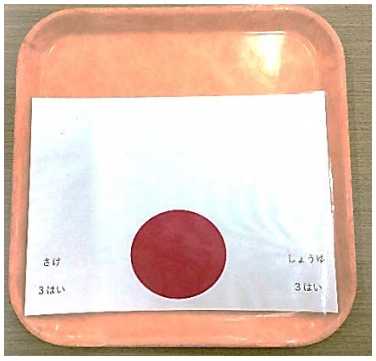
〇共通目標

・自分の担当する仕事に集中して取り組む。　・一人でできる活動部分を増やす。

（ウ）　活動の様子

１回目の調理では、１枚の用紙に全体の工程が書かれた手順書を使用した。調理前に各工程の説明をして、調味料と調理道具の使い方を実際に見せて伝えた。二人が横並びで手順書を見ながら順番に必要なものを取り、定められた量を入れていった。入れる量に間違いがないよう教員と手順毎に確認をし、すり切りは教員が手を添える等の支援をした。しかし、調味料毎に手順書を確認しながら準備をすることや、慣れていないすり切り等に時間が多く掛かることとなり、チャプチェグループ全体の活動に影響が出てしまった。生徒達自身も、全体の流れが分かりにくく、迷いながら取り組んでいる様子だった。調理を終えた感想を聞くと、２人ともから「難しかった」という声があった。そのため、以降の調理では理解しやすく、取り組みやすい工夫が必要になった。

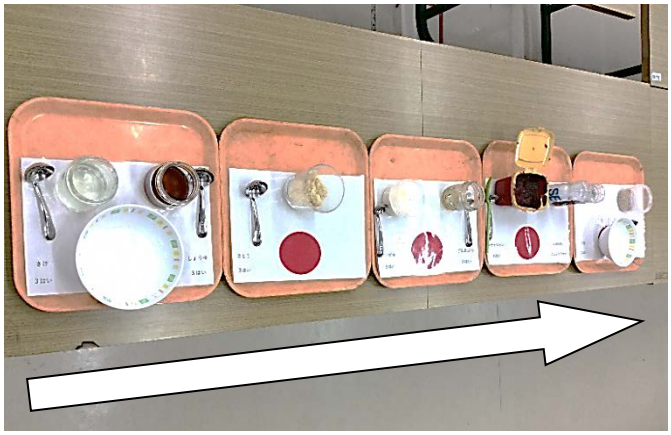
調味料はこぼれたり、取りにくさがあったりしたため、取り出しやすい瓶やタッパーに移す等の工夫を行った。蓋は開けた状態にし、計量スプーンは浅い形状のものではなく、入れやすく扱いやすいおたま型を使用することにした。また、全体の工程が書かれた手順書を取りやめ、器の置き場所と調味料の必要量を示したものを使用することにした。それをおぼんに乗せ、その上に調味料や計量スプーン、すり切り棒等を置いた。（写真１、２）情報伝達と活動内容の工夫を行うことで、作業の明確化、効率化を図ることができた。



（写真１　器の置き場所と調味料の必要量）

（写真２　写真１の上に置いたもの）

また、全体の流れが分かるように環境の工夫を行った。工程順を間違えないよう、目の前のおぼんの調味料を入れ終わると、自分の器を持って右隣のおぼんに移動していくようにしたことで、正確でスムーズな流れになった。（写真３、写真４）



（写真３　活動の流れ）

（写真４　活動の様子）

ＵＤの考えに基づいた支援具や支援方法の変更により、正確な作業及び調理の時間短縮に結びついた。生徒２人とも学習を重ねる毎に一人でできることが増え、意欲的に取り組めるようになり、次の学習を楽しみにする言葉も聞かれるようになった。最終的には、ほぼ教員の支援無しで活動できるようになった。

エ　販売の取組

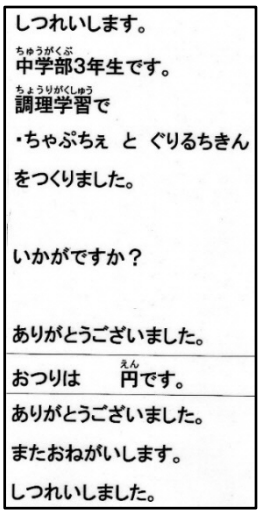
販売については、「販売時の挨拶」「お金の受け渡し」「商品の入ったかご運び」の 3 つの係に分担し、それぞれの役割を明確にすることで、生徒が自分の得意とする役割を選んだり、やりたい役割を譲るなど互いに意見調整したりすることで、協力して販売することをねらった。

各係の支援方法としては、挨拶の手順カードや、釣銭を金種ごとに分けた小銭入れ、重度の生徒が運んでも商品が倒れないよう、底に仕切りをつけたかご等の準備物を利用できるようにした。

その結果、生徒が積極的に希望する役割を伝えたり、校内でも不慣れな場所や人に対しては不安を感じやすい生徒が商品の入ったかごを運ぶ活動に参加できたりするなど、生徒の自発的な活動が見られるようになった。

販売用のかご

販売の様子


しつれいします。
中学部3年生です。
調理学習で
・ちゃぷちぇ と ぐりるちきん
をつくりました。
いかがですか？
ありがとうございました。
おつりは　　円です。
ありがとうございました。
またおねがいします。
しつれいしました。

挨拶の手順カード

オ　成果と課題

本学年は、昨年度も調理学習を行っていたが、毎回違うメニューであったことや、全工程を全員が行い一人一人の工程種が多かったこともあり、少なからず苦手意識が生じていた。

今年度は、苦手意識を払拭し、成功感や達成感を感じるためにはどうすればいいのか検討を行った。毎回同じメニューを作り、工程毎に作業を区切ってグループを作り、適材適所での作業を行うことで、教員も担当を固定することができ、担当グループの生徒の実態に合わせて手順書や自助具を用意することができた。毎回同じ作業を行うことで見通しが立ち、手際よく確実に行えるようになっていくことが自信に繋がってきたと思われる。また、自信がついたことで気持ちにも余裕が生まれ、空いた時間ができると自分から進んで友達の作業を手伝いに行ったり、他の友達がどんな作業をしているか見学に行ったりする姿や、作業工程も自分で手順書を見て確認するなど、自発的な行動が見られるようになった。調理学習に苦手意識をもっていた生徒たちだったが、回を重ねる度に楽しみになり、成功感や達成感を感じるようになってきた。教員の担当固定により、支援具の改善を有効に行うことができたことも、苦手意識を払拭できたことの一つとなった。授業後のアンケートでは、将来自分で調理をしてみたいという意見も複数あがり、自信に繋がる取組であった。

課題としては、グループの単位が少人数であったことで、ユニバーサルデザインに基づく授業としては、規模が小さくなってしまったことである。また、空いた時間ができると自分から進んで友達の作業を手伝いに行ったり、他の友達がどんな作業をしているか見学に行ったりする姿が見られだしたものの、一つの作業を極める形式で行ったため、全体的な一連の作業を把握し見通すまでには至らなかった。

６　おわりに

中学部では、本年度「ユニバーサルデザインに基づく授業づくり」をテーマに取組を行った。研究体制については、各学年での取組を基本とした。「高知県授業づくり Basic ガイドブック」を活用することで、学部全体がユニバーサルデザインについて共通認識をもって授業づくりを行うことができた。

１年生は、中学部に入学して初めての体験が多いという生徒の実態を考慮し、「情報伝達の工夫」に焦点を当てて、「わかる授業」を目指す授業づくりを行った。また、「主体性」に着目し、文字や写真やシンボルマーク等を個々の実態に合わせて、学習の中で繰り返し活用することで理解を促し、見通しをもつための手立てとなった。発達段階の異なる生徒たちが仲間づくりを行うことを目的とした一斉授業では、授業目標の提示方法が課題となったが、生徒の「深い学び」について考えるきっかけとなった。

２年生は、好きな教科学習には興味を示し、学習意欲が高まる実態から、生徒が苦手意識をもっている教科学習での「主体的・対話的で深い学び」を引き出すための取組を行った。国語の学習過程を生徒による「授業の進行」→「学習活動の選択」→「学習活動の工夫」のステップで構成し、特に生徒の主体性に視点を置き、ユニバーサルデザインの観点から授業づくりを行った。生徒の実態を把握し、興味関心のある教材を活用することや生徒自身が授業内容を選択し、学び方を考えることができる授業計画を行うことで、一人一人に応じたキャリア発達を促すことができた。生徒自身が将来に生かせる学習であることを認識した上で、学習に取り組めるような動機づけや手立てについては、今後も工夫が必要である。

３年生は、生徒の興味関心の高い「食」に着目し、「共有化」に焦点を当てた取組を行った。場の構造化をすることや教材教具の工夫を行うことで、授業に参加している生徒全員が「楽しくわかる・できる」調理学習を目指した。繰り返し同じ工程で行うことで、生徒は自信をもち、気持ちに余裕が生まれた。その結果、自発的な行動の変化が生徒に見られるようになった。前年度からの授業の見直しも成果へと繋がっている。

中学部の研究計画としては、各学年の取組と並行して年次研修者による研究授業及び研究協議や実践報告会を行った。各学年の指導内容の共通理解を図ることができ、多角的に生徒の実態把握を行うことができた。さらに、本校のキャリア発達段階表を活用することで、中学部で目指す力を具体化し、生徒の個々の目標、手立てや支援、今後の課題を考察することができた。実践を行う中で「主体的とは？」「対話的とは？」「深い学びとは？」という点を検討するようになった。生徒の実態は多様であり、個々への支援も様々であることから、生徒の実態に合わせて、ユニバーサルデザインを考える必要性に改めて気付かされた。また、実践研究の経過、成果と課題についての検討を行うことで、授業づくりの大切さについて再認識することができた。

今後は、授業で身に付いた力を社会で活用できるように、小学部からの学習の積み重ねを生かしつつ、高等部進学へ向けてのステップアップを目指し、生徒の将来を見据えた学習計画を行うことが、授業づくりの上での重要な課題であり、「主体的」「対話的」「深い学び」の三つの視点を明確にする取組を行っていきたい。

Ⅴ　高等部の研究

高等部テーマ
「アクティブラーニングの視点を生かした社会的自立を目指す学習」

１　はじめに

高等部では、めざす生徒像として、卒業後、自らの力を発揮することによって自己実現を図り、社会的自立につながる力を身につけることを目指して、日々取り組んでいる。昨年度までの３年間は「進路につながるキャリア教育の実践とまとめ」というテーマで研修が行われ、卒業後の生活を見通したキャリア教育を意識して取組を進めた。

今年度はこれまでのキャリア教育を土台として、アクティブラーニングの視点では大切になると考えられる以下の３点について、取り組むこととした。まず１点目は自ら課題を見つけそれを追求し、自ら考え、判断し、表現する授業、２点目は児童生徒一人一人に学ぶ楽しさや成就感を味わうことができる授業、３点目は、お互いに認め合い、学びあうことができる授業とし、この３点に重点をおいてテーマ設定し研究を進めることとした。（「高知県授業づくり Basic ガイドブック」参照）

実践方法は今年度も学年ごとにテーマを決めて進めることとした。その際、教職員間が共通理解を図るためのツールとして、高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（2017 改訂版）等を活用した。生徒一人一人が目的意識を持って、主体的に充実した日々を送るためにはどのような授業を展開したらよいか、アクティブラーニングの視点を取り入れた、より効果的なアプローチの仕方を研究することとし、支援や指導方法について協議を重ねた。

高等部１年テーマ「一人一人の実態に応じた進路アプローチの仕方」
高等部２年テーマ「豊かな人間関係を育み、互いを認め合う仲間づくり」
高等部３年テーマ「アクティブラーニングの視点を活かした進路学習～卒業後の進路を自ら考え選択するために～」

２　研究経過

（１）　研究内容

ア　卒業後の進路に向けて、生徒一人一人に応じた支援や指導のあり方を検討する。

イ　将来の生活（家庭や社会生活、職業生活）に必要な知識、技能、態度を習得するための指導や支援の充実を図る。

ウ　実践から問題点や課題を明らかにする。

（２）　研究方法

ア　各学年で実践研究に取り組む。　イ　それぞれの実践例について研究を重ねる。

ウ　実践の成果と課題を実践集録にまとめる。

（３）　研修計画

ア　学部研究日を月１回設定する他、学年での研究日を随時定める。

イ　研修の日程

月日	研修内容
４/25	学部研究テーマ等の協議
５/12	各グループの実践（研究テーマ決定、今年度の取り組み計画について検討する）
６/７	各グループの実践（各担当での研究の進捗状況等の報告、改善点等の確認）
７/４	各グループの実践、推進
８月	・研究授業の計画 （生徒の実態と課題を確認、学習内容、方法を検討する） （指導案の作成） ・研究テーマに沿った研修
９/５	各グループの実践（各担当での研究の進捗状況の報告、改善点等の確認）
10/３	各グループの実践、推進
11/１	公開授業・協議 １年：総合的な学習の時間（進路学習） ２年：体育（仲間作り活動） ３年：数学（お金の使い方）
11/13	実践集録の項目立て確認
12/５	実践集録の原稿作成
１/５	実践集録の原稿作成
２/６	研究の反省

※8 月は学年で設定する

（１）高等部１年生の取組　　テーマ　「一人一人の実態に応じた進路アプローチの仕方」

ア　実践にあたって

（ア）研究動機

本学年の生徒は、本校中学部からと他校から進学した者が混在しており、実態は様々である。一般的に、１年生の課題は、よりよい人間関係の持ち方や仲間作り、学年全体のまとまりなどが挙げられる。加えて高等部１年生は、卒業後の社会的・職業的自立について考える入り口でもある。現在のところ、卒業後の進路については、ほとんどの生徒がまだ具体的なビジョンを持てていない実態がある。そのため、生徒一人一人が将来に向けて目的意識を持って、主体的に充実した３年間を送るためにはどのような授業を展開したらよいか、アクティブラーニングの視点を取り入れた、より効果的なアプローチの仕方を研究する。

（イ）研究内容

・既存のアセスメントシートの利用方法について検討する。

□高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（2017 改訂版）（以後「キャリア発達段階表」と表記）

□新しい教育課程と学習活動Ｑ＆Ａ

□成長の記録（高知大学教育学部付属特別支援学校編著）

□Ｂ型に関するアセスメントシート（高知県統一版）（以後「Ｂ型アセスメントシート」と表記）

・生徒一人一人に応じた進路学習の効果について検討する。

（ウ）研究方法

・既存のアセスメントシートの内容から、実態把握、グループ分けに有効であると思われる項目をピックアップする。

・既存のアセスメントシートを実態把握、グループ分けに活用する。

・グループ分けが妥当であったか、有効であったか検討する。

・生徒数名について学習効果を検証する。

イ　生徒の実態

学年全体としては、高等部に入学した当初は新しい集団活動への戸惑いもあったが、６月初めには学年やクラスでの活動にも慣れてきて、授業や学校生活において、意欲的に取り組む生徒が多くなった。生徒の中には、声かけ等の支援で自分から考えて行動できる生徒や声かけや視覚支援を用いた支援等で活動できる生徒、知的障害が重度で支援者の介助が常時必要な生徒など、実態は様々である。体育、美術、音楽等の学習は、学年全体で取り組んでおり、国語と数学の教科学習では習熟度別に３つのグループに分かれて学習している。

＊ウ－（イ）アセスメントの分析にも詳細記載

ウ　取組の内容

（ア）利用するアセスメントシートの検討

アセスメントシートとして、これまでに本校で利用したり、利用を検討したりしたことのあるものの中から、今回の目的に合っており、チェックがしやすいなどの観点から、「キャリア発達段階表」と「Ｂ型アセスメントシート」の２つを利用することを検討した。項目や目的の検討をした結果、それぞれに以下の特徴があることを教師間で確認した。

表１　教師間で確認した「キャリア発達段階表」と「Ｂ型アセスメントシート」の特徴

キャリア 発達段階表	・項目の内容によっては、自閉症や重度の知的障害の子どもにとっては評価するのが難しいものがある。 ・「将来設計能力」や「意思決定能力」などから、個々の意識の課題がみえる。 ・教育ベースの考え方のため、様々なパターンを学ぶことを目的としている。
Ｂ型アセスメントシート	・個々の社会的な基本的ルールを検証することができる。 ・評価基準がわかりやすく、つけやすい。 ・仕事面に特化した課題がみえる。 ・特定の場面でできることを目的としている。

「キャリア発達段階表」は、本校での生徒の実態把握や授業づくりの指標として作られており、学習における習熟度や将来に向けてつけたい力を分かりやすくまとめている。今年度初めて赴任した教師もいるため、内容を再度確認した。

「Ｂ型アセスメントシート」については、高知県が作成して一般化されているもので、進路部では進路アセスメントの場面ですでに利用している。本来、個人の就労の可能性を探るものであり、その評価は、個々の取組等を考える際に活用されている。進路部の教師から、生徒一人一人について、将来の就労を見据えた具体的な評価が見えやすいとの説明があり、進路に直結する評価指標として利用価値が高いと考え、選択することとした。

当初の計画では、どのようなシートを使う場合でも、各項目のうち必要なところを部分的に利用することを考えていた。例えば、アセスメントシートのベースとして、１年生のうちは、「基本的なルール」（５項目で 10 点）をもって考えると良いのではないかとの意見があったが、就労を考える上では、この項目だけでその生徒の全体像を掴めるとは言い切れないとの意見があった。そのため、全項目について評価することとした。

また、両方とも従来はその項目の文章を見て、個別の評価をしたり授業に活かしたりするものとして作られたものではあるが、今回はグループ分けに利用したり、グループの特徴を授業に活かしたりする目的もあるため、数値化して利用することとした。

（イ）アセスメントの分析

表２での項目毎の合計点を見ると、「集団参加」や「人とのかかわり」の項目の点数が低いことから、本学年集団は、人間形成能力（つながる力）において長けていることが分かる（※①②⑤）。一方、「目標設定」や「自己調整」「自己評価」の観点からなる意思決定能力（かなえる力）において点数が高いことから、自分のやりたいことに対して適切な目標を設定して叶えようと行動する力に弱さがみられることが分かる（※③④⑥⑦⑧）。

同様に表３の集計結果を見てみると、「作業時間と休憩時間の区別」や、作業内容・手順等の変化に対応できるとされる「適応性」の項目について点数が低く、長所として捉えることができる（※⑭⑰）。これらは、学校生活の中で指導されてきたことでもあり、経験の積み重ねによって身についているのではないかと推測される。一方、「欠勤等の連絡」「作業スピード」「健康管理の状況」「会話・言葉づかい」「仕事の準備と後片付け」「巧緻性」などの点数が高いことから、それらに課題があることが分かる（※⑨⑩⑪⑫⑬⑮⑯）。これらは、小・中学生のうちにはまだ課題とされていなかったことであったと思われるが、今後就労するとなった時に必要な力であることが推測される。

表２　教師間で確認した「キャリア発達段階表」の集計

高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（2017改訂版）

その生徒の該当する段階の点数をつける。

網掛けなし＝「あ組」
網掛けあり＝「い組」

評価基準			4	3	2	1
			小学生		中学生	高校生
キャリア発達の段階			生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
能力領域 ※1	能力領域 ※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力
人間関係形成能力（つながる力）	自己理解・自己管理能力／人間関係形成・社会形成能力	人とのかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。		自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。
		集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
		意思表現	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
		場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力（みつける力）	課題対応能力／キャリアプランニング能力	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
		社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
		金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
		働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
将来設計能力（憧れてめざす力）		習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。		職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。
		夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
		やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもち、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
		進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
意思決定能力（かなえる力）		目標設定	自分のことは自分で行おうとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
		自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
		自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
		自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対しての対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

観点	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	項目毎合計点	
人とのかかわり	2	3	2	3	2	2	3	1	2	1	3	3	1	4	3	3	3	2	2	2	2	2	3	54	※①
集団参加	4	2	1	3	2	2	3	1	2	2	3	3	2	4	2	3	3	3	1	1	1	1	3	52	※②
意思表現	4	3	2	3	2	2	3	1	2	1	3	3	1	5	3	2	4	4	2	2	2	2	2	58	
場に応じた言動	4	3	2	3	2	2	3	1	2	1	3	4	2	5	3	3	4	5	2	4	2	2	3	65	
様々な情報への関心	4	3	2	4	1	1	4	1	3	2	4	4	2	5	3	3	5	4	3	2	1	3	4	68	※③
社会資源の活用とマナー	4	4	2	4	2	2	4	1	2	2	4	4	2	4	2	2	4	2	2	3	2	2	3	63	
金銭の扱い	4	3	2	4	2	1	4	1	2	1	4	4	1	5	2	2	5	2	3	2	2	2	3	61	
働く喜び	4	3	2	3	2	3	3	2	2	1	3	4	1	4	2	2	4	2	3	2	2	3	3	60	
習慣形成	4	3	2	4	2	2	3	2	2	2	3	3	2	4	2	3	3	3	3	3	3	2	3	63	
夢や希望	4	3	3	3	2	3	4	2	3	2	3	3	2	4	3	3	4	3	3	3	2	3	4	69	※④
やりがい	5	3	2	2	2	3	3	2	2	1	3	3	1	4	3	2	3	3	3	2	2	2	3	59	
進路計画	3	2	2	3	2	3	3	2	2	1	3	3	2	3	3	3	3	2	2	2	2	2	3	56	※⑤
目標設定	4	2	2	4	3	3	4	2	3	2	4	4	2	5	4	3	5	3	3	4	2	3	4	75	※⑥
自己選択	4	3	2	3	2	3	4	2	2	2	2	3	1	4	3	2	3	3	3	2	2	2	2	59	
自己評価	5	2	2	4	2	3	4	2	2	1	4	3	1	5	3	3	5	3	3	3	2	3	3	68	※⑦
自己調整	4	3	2	4	3	3	3	2	3	3	3	4	1	4	4	4	3	3	3	3	3	3	3	71	※⑧
個人得点合計	63	45	32	54	33	38	55	25	36	25	52	55	24	69	45	43	61	47	41	40	32	37	49		

表３　教師間で確認した「Ｂ型アセスメントシート」の集計

B型に関するアセスメントシート（高知県統一版）

網掛けなし＝「あ組」
網掛けあり＝「い組」

評価基準			1	2	3	4																								
			できる（できている）	だいたいできる（だいたいできている）	あまりできない（あまりできていない）	できない（できていない）	A	B	C	D	E	F	G	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	S	T	U	V	W	項目毎合計点	
評価項目																															
基本的なルール	1	欠勤等の連絡	欠勤や遅刻なく出勤できる、欠勤や遅刻をした場合の連絡を行うことができる				4	4	1	2	3	2	4	1	2	2	4	4	2	4	3	2	4	4	3	4	2	2	4	67	※⑨
	2	身だしなみ	清潔な服装や爪や髭剃り等				3	3	2	3	2	2	4	2	2	1	3	4	2	4	2	2	3	1	3	4	2	2	3	59	
	3	働く場のルールの理解	規則を理解して守ることができる				4	2	2	2	2	2	3	1	2	1	2	3	2	4	2	2	3	2	2	3	2	2	3	53	
	4	健康管理の状況	健康管理や体調不良時の対処ができる（温度調整、水分補給等）				3	3	2	2	2	2	3	1	3	2	1	4	2	4	3	3	4	3	3	3	3	3	3	62	※⑩
	5	感情のコントロール	無視・反発・拒否せず、指示や注意を受け入れることができる、情緒が安定している				4	3	1	3	1	2	3	1	1	3	3	3	2	4	3	3	2	2	1	2	1	1	1	50	
社会生活	6	あいさつ	自分からすすんであいさつ等することができる				3	3	2	2	2	2	2	2	1	1	2	3	2	4	2	2	3	4	2	3	2	2	2	53	
	7	会話・言葉づかい	相手や場に応じた会話・言葉づかいができる				4	3	2	2	2	2	3	1	2	1	3	3	2	4	3	3	4	4	3	3	2	2	3	61	※⑪
	8	作業上の報告・連絡	自分から報告・連絡することができる				4	3	2	2	2	2	2	1	1	1	3	3	2	4	2	2	4	3	2	3	2	2	2	54	
	9	協調性	お互いの個性を認めあい、他人と力を合わせて助け合うことができる				3	2	1	3	2	2	2	1	1	1	2	3	2	4	2	4	2	2	2	3	3	2	3	52	
	10	仕事の準備と後片付け	作業上の準備、整理整頓ができる				3	3	2	3	3	2	3	1	3	2	3	3	1	4	3	3	3	3	3	3	2	2	3	61	※⑫
作業態度	11	集中力の維持	集中して作業に取り組むことができる				4	3	1	2	3	3	3	1	1	1	3	2	2	4	3	2	2	1	4	4	4	1	3	57	
	12	作業能力の向上	慣れるにしたがい、作業能率が向上する				2	2	2	3	3	3	2	1	2	2	2	3	1	4	3	2	2	2	2	2	2	2	3	52	
	13	指示の内容の理解	口頭での指示が理解できる				3	3	2	3	2	3	3	1	2	1	2	3	1	4	3	3	3	2	2	3	2	3	3	57	
	14	作業の正確性	正確な作業ができる				3	2	2	2	2	3	2	2	2	2	2	3	1	4	2	2	2	2	2	2	2	2	3	51	
	15	巧緻性（丁寧さ）	細かい作業ができる				4	4	2	4	3	3	2	1	2	2	3	3	2	4	3	3	3	2	2	2	1	2	3	60	※⑬
	16	質問・相談	自分から質問・相談することができる				4	3	2	3	1	2	3	1	1	1	3	4	1	4	3	3	4	4	2	3	1	3	3	59	
	17	忍耐力・責任感	途中で投げ出さず、作業に取り組むことができる				3	2	1	3	3	3	2	1	2	1	3	3	2	4	3	2	2	2	3	3	2	2	2	54	
作業遂行力	18	判断力	自分で状況判断しながら作業できる				4	2	3	2	2	2	3	1	2	1	3	4	1	4	3	2	4	3	3	2	2	3	3	59	
	19	作業時間と休憩時間の区別	作業時間と休憩時間の区別が理解できる				3	1	1	2	1	2	2	1	1	1	2	2	1	3	1	2	2	1	2	2	2	2	2	39	※⑭
	20	体力	一日に6時間以上働くことができる				4	2	2	3	2	3	2	1	3	2	3	4	2	3	3	2	2	3	4	4	3	2	2	61	※⑮
	21	作業意欲	積極的に作業に取り組むことができる				3	2	2	2	2	2	3	1	2	2	3	3	2	4	3	2	3	3	2	3	2	2	3	56	
	22	危険への対処	危険を認識し、回避することができる				3	2	1	3	2	2	3	1	2	1	3	3	2	4	3	3	3	2	2	2	1	2	2	52	
	23	作業スピード	期待されている速度で作業ができる				4	3	3	3	3	3	3	2	3	2	3	3	2	4	3	3	3	3	3	3	2	3	3	67	※⑯
	24	適応性	作業の内容、手順等の変化に対応できる				3	3	1	2	2	2	3	1	2	1	3	2	1	4	2	2	2	2	1	1	2	1	2	45	※⑰
			個人得点合計				82	63	42	61	52	56	65	28	45	35	64	75	40	94	63	59	69	60	58	67	49	50	64		

これらの集計結果を学年で分析した際には、本学年集団の課題として、人の悪い部分を指摘してトラブルになることもあるため、仲間作りや人権教育的な内容も必要ではないかといった、自己受容・他者受容の学習が必要であるというような考察が出された。この課題は、普段の実態や今回の得点に関わらず、どの生徒にも共通するものとして、教師間で共通認識することができた。そのため、複数のグループに分かれて学習することになったとしても、共通のテーマとして設定することとした。

表４　個々の生徒の表２、表３の合計得点

キャリア発達段階表		B型アセスメントシート	
得点	生徒	得点	生徒
69	N	94	N
67	A	82	A
61	Q	75	L
57	D	69	Q
56	G	67	T
55	L	65	G
52	K	64	K
49	W	64	W
48	B	63	B
47	R	63	O
45	O	61	D
43	P	60	R
41	S	59	P
40	T	58	S
38	F	56	F
37	V	52	E
36	I	50	V
34	E	49	U
32	C	45	I
32	U	42	C
25	J	40	M
25	H	35	J
24	M	28	H

＊支援度が高い方が得点が高い

表４の様に、個々の合計得点を二つ並べたところ、多くの生徒はキャリア発達段階表とＢ型アセスメントシートでの位置関係に大差は見られなかったが、生徒Ｔ・Ｄについては大きな差が見られた。

生徒Ｔ（キャリア発達段階表：低得点　Ｂ型アセスメントシート：高得点）

・キャリア発達段階表では、集団参加や様々な情報への関心等において得点が低い。

・Ｂ型アセスメントシートでは、身だしなみ、挨拶、集中力等において得点が高い。

・２つのアセスメントにおけるバラつきについては仕事面に特化して見ると、できることが多いが、本人の仕事や生活に対する意識の課題が露わになっていると考えられる。

生徒Ｄ：生徒Ｔと逆の特性が見える。

進路学習では、思考的な学習内容を多く含むため、この２名については、キャリア発達段階表の得点を優先してグループ分けをした。

生徒の実態は、教師が漠然と普段の様子から感じているもののみではなく、２つのアセスメントの結果からも、大きな差があることが分かる。学習グループ分けでは、教科の学習グループをベースにして、アクティブラーニング、つまり「主体的な学び」ができるためのグループということを重要視した。アクティブラーニングで言う、自ら考えたり選択したり行動したりするためには、似通った仲間がいて認め合える集団の力は大変重要であると考え、２つのグループで学習に取り組むことに決定した。

（ウ）授業の実際

＊なお、今回の集録作成にあたっては、ページ数に限りがあるため、グループ分けをした「あ組」と「い組」のうち、「い組」を中心に記載する。

ａ　第２回校内実習前の進路学習指導案「い組」（抜粋）

（ａ）平成 29 年度進路学習の指導計画および校内実習

学期	小単元及び校内実習実施期間	時数
1	・現場実習について知る（１） ・将来就きたい仕事ややってみたい仕事を考えてみる	2
	第１回校内実習　６月中旬	８日間（計 44 時間）
2	・自分のことを知る ・他の人の評価を知る	２（本時）
	第２回校内実習　11 月上旬	９日間（計 50 時間）
3	・現場実習について知る（２） ・将来の自分の進路について考える	2

（ｂ）本時の展開

	学習活動	指導上の留意点 （○支援のポイント　●評価規準）
導入（5分）	1　あいさつ 2　前回の振り返り ・前時の進路学習の内容をクイズ形式で思い出す。 3　本時の内容の確認 ・本時の流れの説明を聞く。 ～パワーポイントの内容～ 1：前回の授業クイズ 2：自分について考えよう 3：他の人の評価を知ろう 4：自己評価と他者評価の違いを確認しよう 5：ふりかえり	H さんに号令をお願いする。 ○前回の授業が思い出せるように、パワーポイントで視覚的な支援を行う。 ・MT がパワーポイントを使用しながら説明する。 ・ST は説明と同時に、流れやポイントの確認の声かけを、必要と思われる生徒に個別に行う。
展開（30分）	4　活動 ①　自己評価、他者評価、記入方法についての説明 ②　自分でチェック表に記入する。＜資料＞参照 ・記入方法がわからない場合は MT に支援を願い出る。 ③　他者が記入したチェック表を確認する。 ④　自己評価と他者評価が一致した部分に印をする。 ⑤　全体で個々の評価のずれを確認する。	・MT は具体的な例をあげながら説明をすすめる。 ・ST は適時、必要と思われる生徒に助言や介助を行う。 MT は全体を見ながら進捗状況を確認する。 ・ST は適時、必要と思われる生徒に助言や介助を行う。 ○一問ずつ説明をして記入させる。 ○印のつけ方を視覚支援する。 MT は全体を見ながら進捗状況を確認する。 ●自己評価と他者評価の違いに気づくことができたか。 ●自分の長所に気づくことができたか。 ●今後の自分の課題に気づくことができたか。
まとめ（10分）	5　本時の振り返り ・本時の活動を振り返る。 ・指名された生徒は、感想を発表する。 ・次回の予定を聞く。 6　あいさつ	・本時のチェック表が今後どのように役立つか説明する ・ST は生徒に助言をする。 ・H さんを指名する。

＜資料＞（実際に使用した表はＡ４）

就職に向けてのチェック表

＊説明を聞いて記入してください。
○・・・できている。　その他はしるしをしない。

学年	クラス	名　前	①	②	③
高１			自分でつける	他の人がつける	①②に○がついている
1	私は忘れ物をしない。				
2	私は約束の時間に遅れることはない。　＊遅れるときには事前に連絡できる。				
3	私はどんな時も明るくあいさつができる。				
4	私はわからない時はすぐに聞くことができる。				
5	身だしなみはいつも気にしている。　＊服装・清潔感もある髪型・つめ・ひげ（男性）				
6	健康を考え、食事のバランスを気にしている。				
7	衛生面はいつも気をつけることができる。　＊手洗い、うがいなど				
8	私は家（寄宿舎・施設等）でお手伝いをよくする。				
9	私には休みの日に楽しむ趣味がある。　＊テレビ・ゲームはのぞく				
10	おこづかいは計画的に使うことができる。　＊無駄づかいはしない				

ｂ　授業時の生徒の様子

自己肯定感の高い生徒もおり、多くの項目に○をつけている生徒や、客観的に自身を捉えて自信がもてる項目のみを厳選して○をつける生徒など反応は複数見られたが、教師からの他者評価を受けると、多くが驚きを隠せない表情を見せた。○の少なさへの驚きや、自己評価と他者評価との不一致など教師からの実際的な評価を受けてショックを受ける生徒もいた。しかしながら、一致する項目があった生徒はそれらが自身のアピールポイントであるという認識はもてていた。

一方「あ組」では、これからの学校生活や卒業後の進路で必要となる、相手が気持ち良いと感じられるあいさつや返事、態度とはどのようなものなのかを学習した。文字を読むことや、言葉での説明を理解することが難しい生徒が多数含まれるため、動画や写真、クイズを取り入れた授業を行い、その場で内容を確認しすぐ練習することで、より分かりやすく生徒の反応も良かった。

ｃ　生徒の変容

あ組では、以前から課題になっていた気持ちのよい態度について、授業で取り組んだことにより、２学期の校内実習の中でも目標として取り上げるきっかけとなった。気持ちのよいとは、どうすればよいのかを具体的に提示され、練習したことが印象に残っていたように思われる。また、別の生徒では、返事をする際には「はーい」と伸ばして言っていたが、帰りの会の発表で呼名された時に、「進路の学習を思い出して」との問いかけに対して、意識して「はい」と適切に言うことができるようになった。

い組では、自己評価や他者評価をつけ、つけられることの経験や、それらを受け入れる大切さに気づいた生徒もいた。一方で入学当時から言葉遣いや学習への取組態度について幾度となく指導を重ねた生徒がおり、自己評価が高い反面、教師からの評価の低さにその時は考えや意識を改めようとしたものの、自身の課題への気づきが薄く、授業での学習効果を感じられなかった生徒もいた。

エ　成果と課題

４月に本校高等部に入学し、実態把握が不十分な段階で、評価の観点が異なる２つのアセスメントを実施し数値化したことにより、多角的に生徒一人一人の実態を考える機会となったと考えられる。また、高等部１年団として評価を実施したことにより、他のクラスの生徒についても傾向や課題を共有するうえで有効であったと思われる。グループ分けは、この評価をもとに検討していったが、根拠あるグループ分けができたと考えている。

今回の授業は、基本的に集団で行うことを前提に考えて行った。年間３回という回数を考えるとこの授業によって進路に関する学習がすべて終わるとは考えておらず、あくまでも主体的な高等部３年間を過ごすためという意図から設定されている。しかし、実際に授業を終えてみると、生徒の変容で述べたように、あ組では、すぐに変化が見られた部分もあったが、い組に関しては、変化として表れていないようにも感じる部分もあり、その後のアプローチには課題が残った。つまり、グループで行う授業は足掛かりをつくるという意味合いが強く、個々の生徒に合わせて、学級担任が主体となり実態に合ったアプローチをしていくことが必要となる。個へのアプローチの中には、日頃の授業に関すること、実習先の設定、実習評価の分析などが含まれ、最終的には進路決定に至る。場合によっては卒業後の他の関係機関と協力して行うアフターケアも含まれる。これは、言い換えれば人生を選択していく過程を作り出すことになり、その動きとアクティブラーニングの思考や学びは関係性が深いと考える。そのように考えると、６月の時点で学年として教師の「カン」に頼る実態把握ではなく、２つの評価指標を用いて評価・分析を進め、学年としてその結果を共有できたことは大きな成果と言える。

今後の課題としては、今回の一連の授業後に個々の状態を再度検討し、個への適切なアプローチを行うこと、さらに、その取組からグループ特性を捉え直し、次へのステップアップを目指していく必要がある。今後も今回の研究の成果を繋げて、主体的に進路について考える生徒が増えるように取り組んでいきたい。

（２）高等部２年の取組　テーマ「豊かな人間関係を育み、互いを認め合う仲間づくり」

ア　実践にあたって

（ア）研究動機

昨年度は「進路につながる仲間づくり」として、人間関係形成能力に視点をおいた取組を行った。今年度は昨年度に引き続き進路を意識し、社会生活で必要な互いに認め合う力を高める取組を、アクティブラーニングの視点を取り入れて行うこととした。

１年次の終わりにはまとまり始めていた集団も、クラス替えや担任の入れ替わりがあったことで、落ち着きがなくなった生徒や、不登校になった生徒もでてきた。また、日頃の慣れ合いから言葉遣いが悪くなったり、悪ふざけが度を越えることがあったりするなど、友達との関わりにおいても将来を考えると不安要素が多い状況であった。その一方で、現場実習に向けて意識を高くもつことができたり、高等部の一大イベントである修学旅行を楽しみにしていたりする等、集団としてまとまる必要があることを感じることもできていた。

そこで、子どもたちの興味がある学習である体育や、一番楽しみにしている修学旅行などを中心とし、自分たちで話し合いをしながら進めていく取組を行うこととした。話し合い活動をする中で、相手の気持ちを考えたり、活動の中で失敗した時にどのような声かけをしたらよいかを考えたりすることで、社会生活で必要な人間関係形成能力を高めていきたいと考えた。

（イ）学年の実態

高等部２年生は、15 名（男子 13 名、女子２名）である。身辺的な自立度の高い生徒は多いが、ＡＤＨＤや自閉症スペクトラム、反抗性挑戦性障害、他者に依存しがちな生徒など、一人一人の実態が大きく違うのも特徴である。

昨年度の学級は２クラス編成であったが、今年度は人間関係の構築が苦手な生徒が多く、他者を批判するばかりの生徒や、友達の仲介に入ってトラブルに巻き込まれる生徒もいるが、全体的に見ると活動的で、活発な学年であるという実態を踏まえて３クラス編成へと変わり、１クラスが５名となった。これにより、対話の必要な生徒ともじっくりと関係を築き上げることができるようになった。そして、周囲の雑念が気になる生徒にとっては、少しでも騒音が軽減される環境となった。また、昨年度は人間関係の問題から美術や体育も全員で学習ができない状況になっていたが、修学旅行には全員で行くため、時間やルールを守る必要があるということには気づき始めることができていた。

イ　授業の実際

（ア）行事を通した取組（なつまつり）

学年全体として一体となって取り組む今年度初めての行事であり、昨年度の経験から生徒の意欲関心が高いなつまつりは、クラス・学年としての仲間意識や協調性を養うことをねらって取り組んだ。取組内容は生徒の意見を取り入れ、各クラスでゲームの出店と学年での販売を並行して行うこととした。学年での取組内容を決める際には、クラスでの話し合いで決まった内容を持ち寄り、学年全体でクラスの意見を発表し絞っていくことで、友達の意見を聞いたり、自分の意見を伝えたりするきっかけとなった。しかし、取組内容を一つに絞っていく過程では、他のクラスの友達の考えを受け止められずに馬鹿にして笑う様子や、話し合いで決まった結果に納得がいかずに教室を出ていく生徒の様子も見られた。学年の販売物は、全体を木工班と小物づくり班に分けて制作を行った。得意な班での制作を行うことで、友達同士で教え合う姿も見られた。一方で、

班分けの際には、特定の友達の動向を伺ったり、特別仲の良い友達と同じ班になることだけを考えたりする生徒もいた。

当日はたくさんのお客さんに販売品を購入していただき、自分たちの作ったものを買ってくれたという喜びを感じるとともに、「これええね」、「かわいいね」などの言葉をかけてもらい、自己肯定感を高めることができた。

	学年全体の生徒の様子
なつまつり前 （制作班分け） （販売品制作）	・取組内容を決める際に、他のクラスや友達のことを配慮する様子が見られず、友達の意見を笑ったり、自分の意見が通らなければ教室から出て行ったりすることがあった。 ・特定の友達の動向を伺って、その友達を避けるように制作の班を決める様子や、やりたい制作内容で選ばず、仲の良い友達と同じ制作班になることを目的としている生徒も見られた。 ・学年全体で決めたことに協力的ではなく、自分は無関係だという態度の生徒もいた。
なつまつり後 （打ち上げ）	・流しそうめんで使用する具材を準備するグループでは、自分のやりたいことを他の友達に譲ってあげる場面が見られた。 ・友達の動向を伺う様子もなく、自分がやりたいと思うことに手をあげ、取り組む様子が見られた。また、やりたいと思うものが友達と被っていても、じゃんけんや話し合いで担当を決め、決まったことに腹を立てることなく、協力することができていた。

なつまつりの打ち上げには流しそうめんを行い、学年全体でなつまつりの成功を締めくくることとなった。流しそうめんを行う際にも班分けを行い、竹を使ってそうめんを流す台や器を準備する班と、そうめんに添える具材を作る班に分かれた。その際には、なつまつり前のように友達の動向を伺う様子もなく、生徒だけで班を分けることができ、全員が流しそうめんの準備にとりかかることができた。

（イ）行事を通した取組（修学旅行）

本学年は、相手の立場に立って物事を考える力が希薄で、自己中心的な言動からトラブルに発展することが多い。修学旅行では集団行動が基本であり、自分の意見を主張すると同時に、友達の意見も聞き入れてまとめる力が必要となり、人間関係形成能力を高める良い学習の機会になると考えた。事前学習を進める中で、修学旅行に携帯電話の携行を許可するか否かで議論となった。携帯電話の保有率を見ると、15 名中 10 名が携帯電話を所持、5 名が所持していない状況で、それぞ

れの立場によって意見が分かれた。そこで、「修学旅行に携帯電話は必要か」というテーマで、取り組むこととした。

授業では、生徒たちに「修学旅行に携帯電話は必要か」という問いかけから始まった。初めに、「修学旅行は学校行事である」「携帯電話を持っている人といない人がいる」「写真の流出など個人情報の問題がある」という３つの前提条件を提示したうえで、議論を始めた。大きな集団では、自分の意見を発表できない生徒もいるため、まずはクラス単位の小集団で話し合い、その結果を発表して学年の大きな集団で共有化を図り、結論を出すという段階を追って話し合いを進めた。結果、以下のような意見が出された。

携帯電話を「持っていきたい」人の意見	携帯電話を「持っていかない」人の意見
・景色の写真が撮りたい。 ・ニュース、スポーツ、天気などの情報が知りたい。 ・やることがないときに、使ったら落ち着く。 ・毎日、持っているから。持っていないと不安。	・個人情報がある。 ・落とすかもしれない。 ・盗まれる（スリ）。 ・写真を撮って SNS にアップした時に、指紋を読み取られるかもしれない。 ・持っていない人の前で携帯電話を使ったら「うざい」と思って、けんかとか暴力とかになる。

全体的に見ると、携帯電話を携行することによる様々な心配事や不公平感から「携帯電話は必要ない」という意見が多くなった。しかし、携帯電話を持っていきたいという人の気持ちを考えて、対応策を考えることにした。

携帯電話でやりたいこと	対応策
・景色の写真が撮りたい。	教師が持参するカメラで、風景など生徒が希望する写真を多めに撮るようにする。
・ニュース、スポーツ、天気などの情報が知りたい。	テレビや教師の携帯電話で確認する。
・やることがないときに、使ったら落ち着く。	ホテル到着後に部屋で時間を持て余すことがないように、ホテル周辺の散策を設定する。
・毎日、持っているから。持っていないと不安。	修学旅行中は携帯電話を操作することは容認できないが、それでも持っていきたい場合は自己責任において許可する。ただし、修学旅行中は触らない。

今回の学習では、主体的・対話的で深い学びができる授業を目指して「修学旅行に携帯電話は必要か」というテーマで議論を行った。携帯電話を所有している生徒にとっては、「持っていきたい」という気持ちが強く、所有していない生徒にとっては「ずるい」という気持ちがあり、お互いの気持ちを想像しながら議論を進めるよい学習になった。議論を行う上では、初めにクラス単位の小集団から話し合いを進めたことで、全体で意見が発表できない生徒も周りの友達に自分の意見を伝えることができた。それぞれの立場で意見を交換し合い、どこに妥協点を見つけるかを考えるよい経験になったのではないか。修学旅行の携帯電話携行の可否は、教員同士でも意見が分かれた。このような難しいテーマに対して、教師主導で決めてしまうのではなく、生徒同士で話し合いルールを決めたことは有意義であった。

しかし、生徒が議論するということに慣れていないことから、今回は教師主導の部分が多くなってしまい主体的な学びという点では課題も残った。自分の意見を主張し、なおかつ、相手の意見も聞き入れてまとめる力は、卒業後にも必要な力であると考えられるので、このような機会を多く設定し議論に慣れていくことが重要である。

（ウ）行事を通した取組（学習発表会）

昨年度に引き続き、様々な行事を体験することにより、少しずつではあるが確実に人間関係形成能力が高まりつつある。今年度は修学旅行や現場実習などの大きな行事があるため、それぞれ並行しながら早めに学習発表会に向けて取組を始めた。昨年度同様、生徒同士の人間関係をより深めることや、意見やアイデアを自分たちで考え、より積極的に制作活動に参加することをねらいとした。シナリオ・台本づくりやキャストの配役、iPad を使用してのビデオ撮りなど、生徒主体の全員参加型のストーリー性のある映像を撮ることに決まった。

今年度は、年度当初のクラス編成の変更に対して戸惑いや不満をもつ生徒もおり、新しい仲間や教員との人間関係に慣れるまで時間の経過を必要とすることとなった。また初めての現場実習に対しては不安が大きく、JR に乗り遅れるなどのトラブルもあった。しかし２回の現場実習ともに全体的に評価が高く、修学旅行などの様々な行事を経験することを通して、少しずつ自信ができ、昨年とはまた違う人間関係も形成され始めてきた。そこで、昨年と同じようにおおまかなストーリーを、シナリオとしてあらかじめ用意しておき、細かな点に関しては、各クラスの実態に合わせてシナリオ作りをすることとした。また、「ひだかにきたか」のテーマソングに踊りを付けてダンスを発表することとした。

それぞれの活動内容は以下の通りである。

活動内容	生徒の様子
シナリオ・台本づくり	クラスの生徒を中心に、国語・数学の時間を利用してストーリーを考えた。パソコンを利用してそれぞれのセリフを入力し、他のグループの生徒達に原案として提案した。それを受けて他のグループの生徒達が自分のセリフの部分を言いやすい言葉に手直ししたり、友達の設定を考えたりと全員が関わることができた。
キャストの配役	ストーリー作りの際に、適役を教師と一緒に考えて配役した。配役された友達が言いそうなセリフを話し合って、パソコンで入力することができた。
ビデオ撮り	複数の生徒が iPad を使い、交代で監督役をし撮影した。演技する生徒も、監督役の生徒のアドバイスを受けて、声の出し方や仕草を気にする等、どの生徒も積極的に参加できた。生徒同士で試行錯誤しながらアイデアを出し合う、活発な活動となった。

昨年の続編として今回のビデオを制作したということもあり、生徒達には比較的わかりやすい内容になったのではないか、また映像の中の自分を客観的に見ることにより、今までの学習活動を振り返りつつ次につなげることができたのではないかと思われる。学習発表会終了後も、これからの取組についての意見やアイデアが出る場面もあった。次年度に向けての取組としては、就職を意識した現場実習のシーンや、運転免許取得に向けての学習の

シーンなども続編のシナリオの中に取り入れていきたい。また可能性があるならば、「ひだかにきたか」の歌を日高村の応援歌としてさらに膨らませ、地域の方々にも出演していただけるようなビデオが制作できたらと考えている。

（エ）教科を通した取組（保健体育科）

本学年は、体を動かすことに意欲があり、賑やかな雰囲気が好きな生徒もいれば、体を動かすことが苦手で意欲がもてず積極的に取り組むことが難しい生徒、気持ちの切り替えができず授業に参加できない生徒もいる。

本年度、保健体育科の授業では運動を通じて互いを認め合う仲間づくりを目標に全員が積極的に参加でき、ルールや決まりを守り楽しく運動ができるように心掛けた。またアクティブラーニングの視点を取り入れ、生徒主体の授業づくりを心掛けるようにした。集団の中で一人一人に役割を決めることで、責任をもって役割を果たすことの大切さを体験できるよう、準備や片付けを全員で取り組むようにした。また、体操係やチームリーダーを決め、リーダーを中心に全員でチーム分けや作戦会議また練習方法などを考えることで、生徒同士の関わりを大事に授業を行った。

年度当初は、チーム分けもスポーツが得意な生徒の意見が中心で、そうでない生徒は決められるがままの状態が続いた。また授業に参加できない生徒や、気持ちが落ち着かない生徒などがいても全く気にかける様子も見られなかった。そこで、教師が一緒に運動を行い楽しい雰囲気づくりに努めることで少しずつではあるが、授業に参加できなかった生徒が参加できるようになり、他の生徒から「～君がおらんけんど」など、授業に参加できていない生徒を気遣う様子が少しずつ見られるようになってきた。

また、リーダーを固定するのではなく、いろいろな生徒にリーダーを任せることで生徒同士の関わりが多くなり、全員が参加できる雰囲気が出来つつあった。

ポートボールの授業を行った際、チームを３チームに分けた。ゲームをしていない残りの１チームはラインズマンや得点係として試合に参加し、一人一人に役割を設定することにより、全員で１つの事に取り組む意識付けができた。

年度当初は開始時間を守ることが難しく、授業が始まってもザワザワして学年全体で取り組むことは難しかったが、一人ひとりに役割を与え責任をもたせることにより、少しずつではあるが落ち着いて授業に参加することができてきた。また、アクティブラーニングの視点を取り入れた生徒主体の授業づくりを行うことで、生徒同士の関わりが増え仲間意識が高まってきた。しかし、まだ人を貶すような発言や態度など見られることがあるので引き続き取り組んでいく。

エ　まとめ

新学期の環境の変化（人間関係）に戸惑い、心がついていかず「学校に行くこと」「授業の場に行くこと」ができない生徒、学校に登校していても、授業に参加し活動に取り組むことができない

生徒、また授業には参加していても、自分の意思や気持ちを表現することが苦手な生徒たちに対して、一つひとつ丁寧に、何故そのような実態にあるかを改めて考えた。

・経験不足のために自信がない。上手くできないことへの不安が大きい。
・友達（他者）を理解することができていない。自分と同じ尺度で考え、友達を批判、非難する言葉が出てしまう。
・友達からの言葉を恐れ、自分の気持ちの壁を超えることができない。
・意思決定において、自分のやりたいことよりは、誰とともに活動をするかに左右される。

身辺的な自立度は高くても、障害上の特性は様々で、人との関係性の面では、まだまだ幼さが残っている。自分自身のことの理解も十分でなく、友達（他者）のことを理解する力は、それ以上に弱く、「よい関係を築く」ということが理解できていないために、相手を批判や非難する言葉がすぐに出てしまい、人を思いやる言葉をかけることが苦手である。しかし一方では、その育ちや成長の過程で、思いやりのある言葉をかけられた経験は少なかったのではないかとも考えられる。褒められる経験、感謝される経験、愛される経験をしっかり積むことは、心を安定させ自信を生むのではないだろうか。心地よさを感じ、安心感があれば、気持ちの壁を乗り越える強さをもち、自己選択の場面での意思決定もできるようになるのではないだろうか。自信は心に余裕をもたらし、褒められた経験や感謝された経験は、やがて自分の中に蓄積し、友達に対しても思いやりのある言葉として表出ができるようになるだろう。

これらのことを根底に置きながら、昨年度よりも細分化したクラス編成の基礎集団での人間関係をよいものにするベース作りから始め、クラスが安心できる場になることを大切にした。それと同時に授業としての取組では、集団学習であっても、常に学習展開の中で、学年集団⇔クラス集団と両者の学びのグループを大切にした。

なつまつりの取組は、学年最初の大きな行事であった。話し合いの場面、選択・意思決定の場面では、まだまだぎこちなさはあったものの、大きなトラブルになることもなく、無事になつまつりを終え、成功体験として感じ取り、その労をねぎらう形で打ち上げができたことは、生徒にとって楽しい活動として心に残ったと思われる。

次の大きな行事として、修学旅行があった。修学旅行は幸いにも、どの生徒も楽しみにしている活動であったため、行事に向かう意欲は高かった。話し合いの活動は、決して得意な活動ではないが、「携帯電話」という興味関心の高い題材だったため、話し合いに向かう気持ちがどの生徒にもあったように思う。自分たちでルールを決めるという経験は、大きかった。そのルールに則り、修学旅行を無事に終えたことも大きな自信になったのではないだろうか。

学習発表会の取組は、表現活動であるため、一部の生徒にとってはかなりハードルの高い学習活動だったと思うが、昨年度の経験を引き継ぐ形で取り組んだので、ある程度の見通しが生徒の中にはあったと思う。ここでも、学年集団⇔クラス集団という形で学習を進め、生徒にとって安心する場であるクラス集団に時々立ち返りながら、最後は、学年集団として表現活動ができた。周りの方々から、「頑張ったね、良かったよ」などの言葉をかけてもらったことも、大きな自信になったと思う。

一方、教科学習の「体育」の実践では、球技を中心に取り組んだ。運動能力的には多少個人差はあるが、どの生徒もパス、キャッチ、ドリブル、キックなどの技術的なものは比較的持ち合わせていた。課題は、参加する意欲の問題であった。そこで、体育の授業に関しては、教師も一緒になって取り組み、ゲームを楽しむ雰囲気を大切にした。教師が媒介になりながら、よいプレイを褒め、

ミスは励ますなど、言葉のお手本を示すなどして、共に楽しさを共感することが生徒にとっては楽しさにつながったと思う。

これらの取組を通して生徒たちは、

・自分たちは何を知っていて、何ができるのか

・知っていることを、できることをどうやって生かすのか

・どのように仲間と関わり、よりよい関係を築くのか

を、学ぶことができたと思われる。

学校生活は、小さな社会生活でもある。今年の成功体験は必ず次年度に生かされる。その繰り返しが経験となり自信にもなるはずである。そして、生徒自身に、何のためにやるのかという目的意識が生まれ始めると、また大きく変わっていくだろう。アクティブラーニングの視点を取り入れながら、障害の特性を理解した授業構成や授業の取り組み方を改善しつつ、目的意識の目覚めを促す必要を感じている。

オ　おわりに

年度当初には、集団としてまとまりきれていなかった学年であるが、さまざまな学習活動を通じて集団が形成されてきている。当初は不登校になった生徒も、５月以降は休むことなく登校できているうえ、就職に向けて高い目標を自ら掲げて取り組むことができている。また、集団活動に入ることが難しかった生徒へは、声かけをしたり、さりげなく一緒に行動したりする生徒がいるなど周囲の配慮も見られるようになってきた。

このような気遣いや、卒業後を意識した行動は、１年次にはあまりみられなかった。しかし、現時点でも友達とのトラブルは少ないとは言えない状況である。社会生活の中では、人とのトラブルも十分に考えられるため、学校生活を送る中で多くのトラブルに遭遇しても、それらの乗り越え方や乗り越える力を身に付けてほしいと思う。

社会生活を送る上では、人間関係の構築は重要となってくる。１年次から２年次へと大きく成長を遂げたように、３年次にはさらに社会参加へ向けて成長してほしいと期待している。

（３）高等部３年生の取組

テーマ「アクティブラーニングの視点を活かした進路学習

～卒業後の進路を自ら考え選択するために～」

ア　実践にあたって

高等部３年生は、13 名の生徒で構成されている。本校中学部より進学してきた８名、地域の中学校から入学してきた５名は、これまで、それぞれに実態に応じた進路を模索してきた。彼らに対しては、１年次から一貫して進路を見据えた取組を行ってきた。総合的な学習の時間においては、進路学習の時間を設け、自他の理解、人との関わり、健康な生活に焦点化した授業を展開しながら、自尊感情を高め、生活単元学習、校内実習などでその知識を実践する機会を設けてきた。校内実習の前後では本校のキャリア発達段階表を活用し、そのキャリア発達の段階を検証してきた。２年次においては、働くこととそのために必要な生活習慣や態度について、具体的に知識が得られる授業を行い、現場実習のなかで実践できたかどうか、キャリア発達段階表を用いて検証を行ってきた。

今年度３年生に進級した彼らは、現場実習での実務的な経験を経ながら、それを支える基本的な生活習慣の確立などの必要性を実感してきている。今年度は生徒たちにとって卒業後の進路を決定する大切な１年になる。昨年度までの取組を本年度につなげ、現場実習および教科における取組の中で、改訂されたキャリア発達段階表を用いながら、「主体的・対話的で深い学び」の実践を行い、そのキャリア発達を検証していきたい。

イ　生徒の実態

身辺自立に課題を残す生徒、周囲の状況を考えずに思ったことをすぐに発言してしまう特性の顕著な生徒、発語によりコミュニケーションをとることに苦手意識をもつ自閉的な傾向の強い生徒、自分の意思を表現することが苦手で集団での活動に苦手意識を感じている生徒、優しさや気おくれから自分の気持ちを表現できない生徒などその実態はさまざまである。

ウ　取組の内容

（ア）学年の現場実習の取組

高等部では、１年次から卒業後の進路についての学習が始まる。本学年は、１年次から３年後を見据えた内容の進路学習計画をたてて取り組んできた。その計画は、表１に示すように、「自己理解・他者理解」から始めて段階を追って進め、「働くこと」についてのイメージがもてる所まで、幅広い内容を計画的に取り入れた。生徒の理解度や課題、実態等にも配慮し、パワーポイントやパソコンでの調べ学習、実習先の写真提示、ロールプレイで実例を示した活動など、学習内容を工夫して取り組んできた。

現場実習については、個々の能力や生活面を関連付けて事業所を選択していった。生活拠点や通勤の方法、準備物の確認、時間の設定等、様々なことを事前学習の中で確かめた。生徒たちは、初めて社会に出ることへの緊張や不安、体調面への配慮など、多方面にわたり精神的に不安定になりやすかったが、その不安材料を一つひとつ確かめながらアドバイスしていくことで、安心したり一人でできたことが自信になるなど、少しずつ自立に向けて力をつけていってほしいと願いながら進めてきた。

３年生の１学期の現場実習では、進路決定が迫ってきていることを意識してきた生徒も多く、大半の生徒は自分の将来の仕事について真剣に考える姿勢が見られだした。実習を通して、自分に向いている仕事や自分がしたい仕事、苦手な作業や役割などが少しずつわかるようにもなってきた。また、家庭で話し合う機会も増えてきて、関心度の高まりが伺えた。実習を経験することで、失敗や忘れ物を指摘されたときの対処法を考えたり、気持ちが不安定な時にどうすればよいのか、なども自分なりに考えることができるようにもなってきた。数々の困難があった時に、その原因を考えることや、自ら「やってみ

よう」という気持ちを高めていき、困難を克服し、自信をつけていくことは、今後も課題となってくる。

この３年間で生徒たちに伝えてきたことの中には、「２週間の実習だけ頑張ればよい」のではない、普段の生活態度や生活習慣も進路には関係しているということである。自己中心的な考えや態度、言動などをどう克服し、改善するかなどを自分で判断したり、身近な人に相談するなどを身につけていってほしいと考える。

表１　進路学習を中心とした進路に関する年間指導計画　　＊３年後を見据えた学習計画

総合（進路）	総合（性教育等）	生活単元学習	進路に関する行事等
自他の理解 人との関わり	生きる力（豊かな心・確かな学力・健やかな体）を身に付ける	●貯金学習	校内実習（１年生）
健康な生活	自分の体・清潔な体	●買い物学習	●現場実習（２・３年生）
働くこと	思春期の男女の違い	●調理実習	職場見学
働くためには…？	思春期の心の変化	●学年農園	●福祉懇談会
●進路を考える	異性との接し方　●情報モラル教育		●夏休み体験実習（希望者）
●社会人になるために	●自己の将来		
●まとめ（卒業したら）	●性被害・加害の防止		

●印・・・３年次で取り組んだ内容

最終学年となり、いよいよ卒業が間近に迫ってきた。卒業後の働く姿や生活態度、人間関係のあり方やコミュニケーション等、個々の実態や課題に即して学校と家庭、寄宿舎や関係機関との連携を密に取りながら進めてきた。また、生徒には、日々の生活態度の見直しや自己判断の機会を経験するなど、いろいろな場面を想定した学習を通して、生徒自らの気付きを促してきた。キャリア発達段階の分析は、生徒一人一人について、課題や特性を十分に考慮しながら、自立生活や社会生活へのねらいを明確にしてきた。（表２）

表２　キャリア発達の段階における能力領域として位置づけられる項目（進路学習）

人間関係形成能力	異性との接し方と上手な付き合い方、社会的な関わりとコミュニケーション、他己理解と協調性
情報活用能力	就労への意識、公共施設の利用（マナー、社会のルール）、自己の特徴理解 情報モラル教育（犯罪・防犯・携帯電話・インターネット等）
将来設計能力	基本的な生活習慣の見直し、自立生活に必要な知識、福祉懇談、生涯スポーツ、一日の過ごし方と余暇活動
意思決定能力	生きる力、体得した能力を生かす力、自己の健康管理、自分の進路、進路先決定、卒業後の居住地、危険認知能力及び行動力

表３は、今回事例として取り上げた２名の生徒の作業学習における実態である。性格や行動特性を考慮した上で、実習で伸ばしたい点を挙げて取り組んできた。

表３　作業学習における対象生徒の目標

生徒	到達目標および 実習で伸ばしたい点	具体的な目標
A	・働くことの意味・重要性を知る。 ・作業の知識を深める。 ・コミュニケーション能力の構築。 ・協調性や忍耐力を養う。	・細かな作業でも丁寧に取り組んでいけるように集中力を身に付ける。 ・敬語が使えるように、言葉づかいに気を付ける。 ・自己中心的な行動を自制できるようになる。

B	・働くことの意味・重要性を知る。 ・働く態度と積極性に必要な知識。 ・忘れ物をしない。 ・働く場での気づきと行動。 ・その場に合った言葉遣いができる。	・就労の意味を理解し、働く態度を自覚し、また給料への感謝などがわかる。 ・作業中に周囲にも目配りし、自ら気づき行動に移すことができる。 ・仕事に必要な物をあらかじめ準備して忘れ物をしない。 ・いろいろな場面で適応できる言葉使いを身につける。

（イ）事例１：生徒Ａの場合

a　１学期の現場実習の様子

今回の実習ではグループホームから作業所に通う方法と、家から作業所まで通う方法を２つに分け、それぞれ１週間ずつ取り組んだ。今後、就労してからの基盤を模索してのことである。事前にグループホームを見学し、行き方の練習を行い、本人が自信をもって取り組める支援を行った。乗車駅の確認や降車駅の確認、送迎バスの位置、連絡する際の電話ボックスの位置まで、本番演習を行った。

グループホームについては、本人も楽しみにしており、部屋を見学した際には、「ここが気に入った」と、反応がとても良かった。帰りの際には、嬉しそうに何回も気に入ったと話してくれた。実際の出勤では汽車や送迎バスを利用し目的地まで通うことができていた。実習先の作業では、椎茸の原木運搬、畑の野菜の定植や袋詰め、草花の管理などを行った。本人は力作業が好きで、影日向なく率先して取り組む姿に、実習先からは高い評価を得ている。課題としては、袋詰めなどの軽作業において集中力がなく、無駄話が多いことである。施設の職員や利用者に対しては、職場の雰囲気と作業内容によって慣れてくると敬語を使わなくなり、利用者に対して指示を出すこともある。このことから、今後もコミュニケーション能力に重点を置き、自他の関係をうまく保つ方法を身にけていく必要がある。実習終了後の反省では、自己目標としてコミュニケーション能力を向上させることを挙げていた。

b　２学期の現場実習の様子

夏休みに入り、福祉懇談を行った際には、１学期にもお世話になった所を 10 月の実習先として希望した。また、積極的な関わり方はできるが、他人と合わせた生活が上手くできない一面があるため、今回は、グループホームを使用しないことになった。このことから、本人は、自宅から駅まで行き、そこから徒歩で事業所まで行く方法を選択した。徒歩での移動は初めてのため、事前学習を取り入れて確認を行った。実習期間中は悪天候の中、40 分もかかる道のりを通勤した。

今回の実習での成果は、言葉遣いの定着が一番であると考える。敬語を意識し、職員や利用者さんとコミュニケーションがとれていた。前回は利用者と口論になる場面があったが、今回は一度も確認されていない。ただし、職場の雰囲気に慣れてくると、一部の人に対して指示を出す場面があった。このことは、年上の人に関しても同様である。細かい作業については、根気のいる内容に対して丁寧さに課題が残る。大まかな作業や力作業では、本人も好きなようで継続し、根気強く行っていくことができる。全体的な評価では、就職する意識が高いために様々な課題を克服しつつある。先ほど挙げた課題も注意し、ヒントを伝えると素直に聞き入れて直すことができる。今後も継続し、定着を図ることができれば、成長段階に伴い克服できると期待できる。現場実習後の反省会でも、素直な態度で向上心を持って臨むことができていた。

c　実習を終えて

このような背景には、普段の学校生活の中で、随所において気づいた場面で支援ができているからだと考える。本人の話をしっかりと聞き、適切な支援を関わっていく教師自らが模索しながら行うことが大切である。教師が環境や本人の性格、あらゆる場面において支援法を模索し、良いこと悪いことを見極めさせることをしっかりと事前に早期から伝えていくことが一番大切であると考える。人が成長する

過程には、成長段階に合わせた年齢相応の知識が必要であり、心と体のバランスを保たせる支援を行う必要がある。支援を必要とする生徒は、うまく表現できず、思いがスムーズに伝わらない場面が多いために、時には感情の起伏が激しく支援困難な場面になる時があるが、そうした時こそ、社会にでてから困らないような知識を伝えていくとこが重要であり、意欲的な考え方を導いていくことに繋がっていくと考える。

表４のキャリア発達段階表で成長過程を見てみると、どの領域においても評価が高くなっている。特に、人間形成能力と意思決定能力に関しては成長の伸びが高いことが分かる。このことはコミュニケーション力の強化を中心に毎回、本人に対して意識づけていくよう随所で、各教師が支援してきた結果であると分析する。また、働くことの喜びを現場実習で実際に学び、様々な教えや教訓を本人が自覚でき、改善する課題を意識し実行してきたからではないかと思われる。

（ウ）事例２：生徒Ｂの場合

ａ １学期の現場実習の様子

昨年に引き続き、病院に併設しているクリーニング業務に携わった。本人には、３年生になったという緊張感と高いレベルでの目標を意識するように話し、精神面でも支援していった。作業自体は、一度経験しているため流れがわかり、見通しをもって取り組むことができていた。また、機械の操作も職員との連携のもと、一人で扱わせてもらい、覚えることができた。

課題である挨拶や報告については、１週目には十分ではなく、中間反省会で実習ノートや巡回指導簿、本人の聞き取りで確認した。その際に、「自分ではやっているつもり」が相手に伝わっているのかどうかを具体的に話し、挨拶や報告は、相手に伝わらないと、たとえ自分ではできていても評価はされないということを話した。また、指示待ちの態度では、気づきの部分は改善されないことも話した。本人がどれだけ意識して行動に移せるかが今後に繋がると思われた。

２週目には、その課題をしっかりと克服し、１週目よりも声が大きくなったことで、積極性も態度に現れていった。ちょっとしたアドバイスと本人の意識ですぐに改善できたのは、就労に対する意識改革が高まってきているのではないかと考えられる。

ｂ　２学期の現場実習の様子

２学期も同じ実習先で行った。就職を見据え、この実習が最後であることを自覚して臨むように日々伝えた。実習中は、「ほとんど一人でやるように任せている」とのことであった。仕事の流れの中で、周囲への気づきや人との関わりが大変重要になり、課題としている挨拶等も意識しなければならない。そんな中、毎日の評価を確認しながら２週間を終えることができた。実習先からは「自分をアピールし、周りの人に色々と気づきができる人になって下さい。」と評価があった。このことから、指示されたことに関しては、しっかりできているのだが、一緒に作業をしている人への細かい気づかいがあまりできていないことが考えられる。一般企業に就労を目指すにあたって必要な力なので、これからの学習活動の中で身につけていってほしい所である。

ｃ　実習を終えて

卒業後の就職先として実習先を絞り、いろいろな課題をもとに本人の意識を確認しながら取り組んできた。実習先からは一定の評価はもらえたが、社会人になるために生活面で改善すべき点や、余暇活動の充実等、卒業までにつけたい力は多く残っている。特に生活面での課題は山積している。卒業後はグループホームで生活するため、基本的な生活習慣の確立と、自分で全てのことをしながら通勤するという、本人にとっては初めての経験であり、緊張感や責任感が伴う毎日である。自分の行動に責任をもつことの大切さもあわせて培っていきたい。さらに、社会生活とはどういうものなのかを卒業までにしっ

かりと学習し、給料をもらうことの重さをこれから意識付けていきたい。卒業後に一人の社会人として自立した生活ができるように、残された学生生活のなかで精一杯支援していきたい。

表５のキャリア発達段階表で振り返ると、人間関係形成能力では、「自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える」「場や状況に応じた言動をする」のステージが上がっている。実習を経験していくことによって、社会人になるという意識や行動面への自覚、人とのコミュニケーションについて学べたことは、大きな経験になった。情報活用能力、将来設計能力、意思決定能力の３つに関しても、それぞれの項目でいくつか、ステージが上がっている。このことから、卒業後に自分の目標が何か、課題は何かについて考えるきっかけになると思う。卒業後への意識向上に期待したい。

（エ）生活単元学習の取組：お弁当を作ろう（５時間）

a　取組の内容

卒業後に必要となる力を身につけるため、生活単元学習のひとつである調理学習でお弁当作りに取り組んだ。「食」は生きていく上で重要なことである。卒業後は用意された食事をとることが多いと思われるが、休日に少しでも自分で調理できる力をつけることが大切であると考えている。そのため、お弁当作りを通して、ご飯を炊く、卵焼きをつくる、ウィンナーを焼くことなどを経験することはもちろんのこと、道具の準備や片付けをする力、作り方の手順を読み取る力、計量や時間を計る力を身に付けられるようにしていく。また、栄養のバランスを意識するとともに、できるだけ食費を安く済ませることを考えて、決められた予算内で買い物をする力をつけていく。また、おかずの品数をもう一品増やしたいときには冷凍食品を用いることで、手軽に短時間でお弁当作りができることを覚え、卒業後の生活に繋がるようにしていく。調理は結果がすぐにわかるので意欲が高まりやすく、そのことが達成感や自己肯定感を高めることにもなっていくと考えて取り組んだ。

・お弁当のメニューを考えよう（１時間）

生徒がお弁当に何を入れたいか希望を聞いて、それに必要な材料を用紙に書き込むようにした。

誰が何をいくつ買うかを確認し、買い物時に困らないようにした。

・お弁当の材料を買いに行こう（２時間）

決められた予算内で目的の商品を探して買うために、値段と数を確認しながら買い物を行った。

b　実践事例

（ａ）仮説

・お弁当の品目ごとに担当を決めることで、責任感をもって調理に集中できやすくなるのではないか。

・お弁当のおかずの品数を増やす方法のひとつとして、簡単にできる冷凍食品を加えることを知ることで卒業後にひとりでお弁当を作る際、役立つのではないか。

（ｂ）本時の目標

・準備から調理、片付け作業を最後まで責任をもって取り組むことができる。

・調理器具や材料の名前や扱い方を知り、安全や衛生に気をつけて作業することができる。

・自分で作ったお弁当を試食し、達成感や満足感を味わうことができる。

（ｃ）手だて

・作業内容や注意事項を文字だけでなく、写真カードを用いて確認する。

・個々の実態に合った手順表により、できるだけひとりで活動できるようにする。

・個別に設定した目標を生徒各々が意識できるようにする。

・自分の担当している材料の調理がおわると、他の生徒を手伝うように声かけをする。

（ｄ）評価規準
・準備から調理、片付け作業を最後まで責任をもって取り組むことができたか。
・調理器具や材料の名前や扱い方を知り、安全や衛生に気をつけて作業することができたか。
・自分で作ったお弁当を試食し、達成感や満足感を味わうことができたか。
（ｅ）具体的な活動内容
・米をといでご飯を炊く
・卵を割り卵焼きを焼く
・唐揚げ、野菜などの冷凍食品を電子レンジで解凍し温める
・ウィンナーを焼く
・オーブントースターでフライドポテトを焼く
・出来上がったものから、皿にのせて長机に上に並べていく。
・弁当箱に盛り付けを行う。
・試食する。
（ｆ）まとめ

成果は、各担当ごとに手順書を見て確認しながらご飯を炊いたり、卵焼きを作ったりなどしたことで、調理器具の使い方を実際に経験し覚え調理でき、そのことで自信をもって取り組むことに繋がったことである。また、短時間に作るための手段のひとつとして、冷凍食品を用いることで、おかずの数を増やすことができることや電子レンジやオーブントースターを使用して唐揚げや野菜、フライドポテトなどが作れることを知ることができたことである。

課題点は、各担当を決めたことで、効率は良かったが、生徒一人に対する経験は少なくなってしまったことである。唐揚げやフライドポテトなど生徒の希望を重視し過ぎたため、栄養のバランスに偏りが生じてしまい、学年農園で作ったミニトマトと冷凍食品の中にわずかに野菜があったものの、野菜が少ない高カロリーのお弁当になってしまったこと、ご飯とおかずが会食予定時刻よりも大幅に早くでき上がったため、時間を持て余してしまい、お弁当箱につめる時間を遅らせた結果、生徒の学習意欲が低下してしまったことなどがあげられる。

これらの反省点を踏まえて、今後生徒が調理する際には栄養のバランスを考えた上で、メニューを考えることが大切であることを伝えていくようにする。また、自分のお弁当を作るときには、できるだけ、すべてものを作ることができるようになってほしいと考えている。

今回の取組を通して、卒業後にお弁当を作ってみようと思う気持ちが少しでも芽生えれば幸いである。また、日常で調理するとき、炊飯器を使って米を炊いたり、卵焼きやウィンナーを焼いたことがあること、また、電子レンジやオーブントースターを使って調理したことがあるという経験を活かしてほしい。そして、卒業後は自分の健康や栄養のバランスを考えた食生活が送れるようにと願っている。

（オ）数学科の取組

数学科の学習内容は、よりよい生活を営み、社会参加や自立のための基礎能力として重要なものである。指導においては、将来の生活に活かす数量の概念を身に付けるためには、生徒の生活における様々な具体的な経験と関連付けることが大切である。高等部３年生の年間計画では四則演算、長さと量についての単位の理解と測定、実務としての時刻の読み取りと時間単位の関係の理解、金銭の使い方に取

り組んでいる。授業を展開するにあたり、３年生 13 名を習熟度に応じて３つのグループをつくり、授業の内容や進度に対して戸惑いを感じる生徒がいないような編成を行っている。Ａグループは、男子３名、女子４名の７名で構成されており、高等部卒業後には就職やグループホームでの生活などで何らかのサポートは受けながら、自立した社会生活を営む生徒たちである。Ｂグループは、男子３名、Ｃグループは、女子３名で構成されており、この２つのグループはＢ型作業所、生活介護、施設入所などが将来的に考えられるグループである。

今年度は３グループの研究授業を行い、学習指導案検討会、研究協議、講師からの指導や助言を受け、実生活に活かす数学科の指導内容の設定や指導の在り方について検討した。

表６　授業の概要

	Ａグループ	Ｂグループ	Ｃグループ
単元名	お金について考えよう	買い物学習（支払い方を覚えよう）	時計の時刻を知ろう
単元の目標	1）お金の計算に慣れる。 2）生活の中のお金の使い方について知る。	1）金種を理解し買い物が好きになる。 2）お釣りの計算がスムーズにでき、買い物に自信が持てる。	1）時計に関心をもち、意欲的に学習に参加することができる。 2）時刻を確認するなど、日常生活に生かそうとすることができる。
指導内容	・生活に必要なお金の内容を知ろう ・一人暮らしの１か月の生活費を知ろう ・お金に関するトラブルを知ろう ・支払い方法について知ろう ・お小遣い帳をつけてみよう（本時）	・お金の種類を覚えよう ・おつりの計算ができるようになろう ・支払い方を覚えよう（本時）	・いろいろな数字を理解しよう ・次デジタル時計で時間を知ろう ・アナログ時計で時間を知ろう ・いろいろな時計の時間を理解しよう（本時） ・まとめをしよう
本時の目標	・小遣い帳の書き方を理解する。 ・お金の使い方について考える。	・自分から買い物を行いやり取りを覚えることで、自信を持つことができる。	・問いに対して進んで、タブレットの時計の時刻の写真から、自分の答えを示すことができる。 ・デジタル時計とアナログ時計を見て、同じ時刻であると認識することができる。
展開	・生活に必要なお金を「支出の内容」と「支払いの時期」の2つから振り返る。 ・用意したレシートを使って、小遣い帳に書き、お金の使い方を考えてみる。	・買い物をする。 （模造商品を購入し、店員役の先生とお金のやり取りを行う）	・デジタル時計、アナログ時計の時間とタブレットの時計の時刻をマッチングする。 ・アナログ時計の時間とタブレットの時計の時刻をマッチングする。

研究協議での講師からの助言と協議内容は以下のとおりである。

・学習内容が小学部から高校まで、あまり変わらない場合があるが、生活年齢を考慮し、高等部の数学として押さえなければならないことを考える必要がある。

・高等部段階では、計算する力よりも電卓を使うことも可だと考え、計画的にお金を使える力を養う必要があり、社会へ出る実際の生活に即した指導を行っていくと良い。

・授業でのお金の種類確認やおつりのやりとりについては、高等部の授業としての目的を考えることが大切である。電子マネーを活用することも良いと思う。

・デジタル時計とアナログ時計の両方を併用して時間の感覚を身に付けていくと良い。生活場面での時計の活用を意識できるようになると良い。

今年度の取組から、卒業後の生活の場や生徒の実態に合わせた内容を選び、講師の助言にもあったように、生徒のモチベーションとして生活の中での目標を揚げて授業展開することの大切さを再確認する

ことができた。

エ　成果と課題

この１年の取組を経て、卒業を迎える彼らは、それぞれの自身の課題を見つめなおし、その克服を心がけてきた。生徒たちそれぞれが、自分は何が得意で、何が苦手なのか、まったく気にすることもなかった３年前に比べると、長所をとらえ、それを自分の良さとして伸ばしていく意識を保つことができたこと、短所を自覚し、直そうと心がけることができたことは、自己肯定感を育む観点からも大変意義深い。生徒にとって進路学習は自己との対話であり、深く自分を掘り下げることでもある。現時点での自己の捉えが不十分な生徒においても、卒業後の生活の中で、この取組を想起し、自己を内省し分析してくれればと願う。３年生は４月から社会人として、企業や作業所、施設でそれぞれの生活が始まる。高等部までの 12 年間で積み上げてきた学びを活かして、豊かな生活を送ってほしいと思う。

表４　生徒Ａの高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（2017 版）

			小学生		中学生	高校生
キャリア発達の段階			生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
能力領域 ※1	※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力
人間関係形成能力（つながる力）	人間関係形成・社会形成能力／自己理解・自己管理能	人とのかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。		自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。
		集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
		意思表現	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
		場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力（みつける力）	課題対応能力 ＼ キャリアプランニング能力	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
		社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
		金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
		働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
将来設計能力（憧れてめざす）		習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。		職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。
		夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
		やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもち、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
		進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
意思決定能力（かなえる力）		目標設定	自分のことは自分で行おうとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
		自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
		自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
		自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対しての対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1＝国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より　※2＝中央教育審議会答申（平成 23 年１月）より

平成 29 年度　４月当初 ◯　→現場実習終了後 ◯

表５　生徒Ｂの高知県立日高養護学校のキャリア発達段階表（2017 版）

			小学生		中学生	高校生
キャリア発達の段階			生活にかかわる基礎的な能力獲得の時期		職業及び生活にかかわる基礎的な能力を土台に、それらを統合して働くことに応用する能力獲得の時期	職業及び卒業後の家庭生活に必要な能力を実際に働く生活を想定して具体的に適用するための能力獲得の時期
能力領域 ※1	※2	観点	低学年で育てたい力	高学年で育てたい力	中学部で育てたい力	高等部で育てたい力
人間関係形成能力（つながる力）	人間関係形成・社会形成能力／自己理解・自己管理能	人とのかかわり	認められたり、褒められたりすることにより自分の良さに気付く。		自分と相手の違いを知る。	現場実習における自分の能力や適性を知る。
		集団参加	友達と仲良く遊ぶ。	集団の中でいろいろな友達とかかわる。	友達と協力して学習に取り組む。	いつでも、どこでも、誰とでもいろいろな活動が行える。
		意思表現	自分の意思を表現する。	日常生活に必要な意思を表現する。	集団の中で自分の意見を述べる。	自分の意思や意見を相手に適切な方法で伝える。
		場に応じた言動	身近な人に挨拶や返事をする。	自分から挨拶をする。	状況に応じた言動をする。	場や状況に応じた言動をする。
情報活用能力（みつける力）	課題対応能力 ＼ キャリアプランニング能力	様々な情報への関心	家庭の仕事に興味をもつ。	身近な仕事に興味をもつ。	情報を得るための様々な方法を知る。	図書やインターネットを活用し必要な情報を収集する。
		社会資源の活用とマナー	学校のきまりを守る。	公共施設の利用の仕方を知る。	公共の基本的なきまりを守って行動する。	社会の様々な情報やサービスを知る。
		金銭の扱い	やりとりを通してお金の扱いに慣れる。	お金の大切さに気づく。	お金の役割を知り、使い方がわかる。	生活の中のお金の使い方について理解する。
		働く喜び	大人と一緒に係の仕事をする。	自分の役割を果たす。	社会には様々な仕事があることを知る。	実習や職場見学を通して、働くことの意義を理解する。
将来設計能力（憧れてめざす）		習慣形成	家庭や学校生活に必要な基本的な生活習慣を身につける。		職業生活に必要な基本的な習慣を身につける。	職業生活に必要な実践的な習慣を身につける。
		夢や希望		身近な働く人に関心をもつ。	憧れとする仕事や夢をもつ。	自分が力を発揮できる仕事への関心をもつ。
		やりがい	時間いっぱい活動する。	時間やきまり、活動の手順がわかる。	好きな活動をもち、自発的に取り組む。	余暇を含めて卒業後の生きがいを見つける。
		進路計画			将来の進路について考える。	将来の進路希望に基づいて目標を立てて努力する。
意思決定能力（かなえる力）		目標設定	自分のことは自分で行おうとする。	自分のやりたいことを最後までやり遂げる。	自分で達成可能な目標を立てる。	将来の自分を考えて、卒業までの目標を立てる。
		自己選択	自分の好きな遊びや活動を選ぶ。		自分のやりたいことを選択し、進んで取り組む。	実習を通して、将来やりたい仕事を選ぶ。
		自己評価	活動や一日の振り返りをする。		よかったことや改善点を振り返り、次の活動に活かす。	現場実習などでの自分を評価する。
		自己調整		嫌な気分になっても立ち直ることができる。	様々なトラブルに対しての対処方法を身につける。	卒業後に想定されるトラブルや対処方法を知る。

※1＝国立特別支援教育総合研究所「特別支援教育充実のためのキャリア教育ガイドブック」より　※2＝中央教育審議会答申（平成 23 年１月）より

平成 29 年度　４月当初 ◯　→現場実習終了後 ◯

４　おわりに

高等部１年では、既存のアセスメントシートを組み合わせて学習グループ分けや実態把握に活用し、生徒がより主体的に活動できる工夫を取り入れた授業を展開した。その結果、教師間の共通理解が図られ、より充実した指導や支援につながったとともに、今後における課題にも気づくことができた。また、担任一人一人が今後取り組むべき課題を明確にすることができた。

高等部２年生では、なつまつり、修学旅行、学習発表会などの行事や、体育の授業などの実践を通して、教師主導ではなく、生徒主体のアクティブラーニングを活用した授業実践を行うことで、主体性を育み、人間関係形成能力を高めることができた。

高等部３年生では、最終学年のため、「進路に関する学習」の３年計画の総まとめとして、卒業後の生活向上について重点的に取り組んだ。アクティブラーニングの視点を踏まえた授業内容の工夫や生徒の課題等については、学年内の教師間で意見交換して深めながら取り組み、生徒の主体的な活動や協調性を大事にする授業展開について工夫することができた。

高等部では、進路を見据えて行うというスタイルは継続しながらも、学年グループ毎に、生徒の実態や課題を具体的に掘り下げて考える研究が成された。アクティブラーニングの視点を学び、これまで行ってきたことを捉え直したり、授業を見直したりすることによって、授業改善が図られたと思われる。

今後については、11 月に行われた高等部の授業研及び協議の中で、高知大学喜多尾教授が話されていた、高等部の教育では「社会にどれだけ結び付いた授業であるか」という視点が大切であるということを再度心にとめて指導にあたりたい。また、新学習指導要領では、将来を見据えたうえで、それらにつながる現在を大切にした授業や指導・支援を考えていくことの重要性が改めて示されている。これまでのキャリア教育の研究に積み重ねて、更により具体的で適切な指導ができるよう研究を継続して行っていきたい。

Ⅵ　寄宿舎の研究

寄宿舎テーマ「豊かな寄宿舎生活を目指して

～認め合う気持ちを育む仲間づくり～」

１ はじめに

今年度のテーマである《「豊かな寄宿舎生活を目指して」～認め合う気持ちを育む仲間づくり～》を研修テーマとして取組を始めて今年度で５年目になる。

これまでの経過を振り返ると、一昨年度末には性の支援がキャリア教育の上でも重要課題であるということから、ホーム実践の中の位置づけを検討していくことが必要であるとの反省がなされ、昨年度は寄宿舎生活支援計画の中に盛込むとともに、ホーム年間支援計画を作成して実践に取り組んできた。この流れを受けて、今年度はホーム年間支援計画の具体的な運用や活用方法について検討し、自治・行事・防災・性の支援など、子どもたちの生活に直結した分野の支援の方向性について共通認識を深められるようにしていくことを念頭に置いて取り組んできた。

支援に当たりながら注意深く子どもたちの様子を見ていると、不適切な方法で働きかけをしてしまうために良好な対人関係を構築することが困難であったり、「自分を大切にすること」と共に「人を大切にすること」が身についていないために、同性異性を問わず周りとの安定した関係が保てずトラブルになってしまったりするケースが多く見受けられた。そこから、集団生活の中における周囲との距離感など、現在の寄宿舎生の多くが広い意味で対人関係に課題を有しているということがクローズアップされてきた。

そこで、「人の中で周りと関わりながら生活していくということ、自分自身を知るということ、自分を表現するということ」などに注目しながら、日々子どもたちの支援に当たってきた。

以下は、それぞれのホームの中での取組についてのまとめである。

２　各ホームの取組

（１）　つばめホームの取組

ア　舎生の実態と研究課題

今年度のつばめホームは、新しく中学部２名、高等部４名の新入舎生を迎え、小学部２名、中学部４名、高等部 12 名の計 18 名でスタートした。新入舎生の６名は活発で明るい子どもが多く、積極的にコミュニケーションを取り合う姿が見られた。しかし、その関わりの多くが相手を挑発するような言動や、周りのことを考えずボールをぶつけ合うなど、客観的にみると人を不快にさせるものばかりであった。新入舎生を中心とした人間関係では、お互いのことがまだ分からず、相手の反応を探るようにふざけ合いを楽しんでいるようであった。そのため、そのときは笑っていても、あとから不満を言うことや、些細なことで不満が爆発し、手や口を出してトラブルになることがあった。とりわけ高等部生が不満やストレスを多く抱えており、関わりの中でふざけやからかいが行き過ぎてしまい、指導員が仲裁にはいらなければいけない場面も多くなってきた。指導員が余暇時間などに個別に話を聞くようにしているが、ゆっくりと話を聞くことや、解決に向けて一緒に考えるなど十分な時間を確保することができていないのが現状である。

性の支援については、こうした子どもたちの実態から、昨年度に引き続き「人との関わり方」について、重点的に取り組むこととした。その他、高等部生には、現場実習に向けての取組や中学部生と高等部１年生へ身体の清潔についてなど、それぞれの実態に応じた取組を行った。

余暇時間を中心に友達を誘い、野球や自転車、学校の敷地内を散歩といった外遊びや、カラオケやゲーム、戦隊ごっこなどTV室や学習室、多目的ホールを使い楽しんでいる。また、雨天時には体育館を活用し、仲のよい友達と集まり汗を流すなど楽しく過ごすこともできている。日ごろからケガにつながる行動や人を傷つけるような言葉遣いには、その都度個人やグループ、ホーム全体へ注意喚起を行っていた。子どもたちの遊びの中で、複数人から一方的な関わり方をされているように見える場面や触れあって遊んでいるときなどに力加減がされていないように指導員が感じる場面が出てきた。そのため、日々の引継ぎや大人のホーム会で指導や対応についての話し合いに多くの時間を割いた。ケガにつながりかねない行動や数人から一人が対象となっている状態、指導員が危険と判断した行動は全ていじめにつながる可能性があるため、厳しく指導をしていくことを指導員間で共通理解を図り対応していくことにした。しかし、ふざけが過ぎて友達の気持ちを傷つけてしまうことが起きてしまったため、友達との関わり方について全体指導をした。その後も、いくつかトラブルは発生したものの大きくならないうちにある程度解決することができていたが、再び友達の気持ちを傷つけてしまい、いじめの問題が起きてしまった。そのため、関わった舎生へ個別指導を行うとともに、ホーム全体へも友達との関わり方について改めて考える機会を持つこととした。

イ　実践事例

（ア）　性の支援

ａ　『現場実習を頑張ろう』

高等部生を対象に『現場実習を頑張ろう』と題し、どのような心構えや準備をして現場実習へ臨めばよいのかをイラストを交えて話をした。

日時	５月 10 日
対象者	高等部生
内容	現場実習に向けて、どのような準備や心構えが必要かスライドをもとに要点を伝える。 〇忘れ物をしない工夫 〇天気に合わせた準備 〇生活時間の自己管理 〇あいさつ・返事の大切さ 〇困ったときの対処法 〇助けてもらったときの対応 〇まとめ

実習で必要となる荷物をいつ準備するのか、翌日の天候に合わせた準備はどうするのかなど、具体的な例を挙げて事前準備の大切さを説明した。その中で、実習生の多くが課題となる他者との関係について大きく取り上げ、よいあいさつや返事の仕方、自分が困ったとき解決に向けてどのように対応すればよいのか、人が困っていたときどうすればよいのかなど、周りの助けを得られたときどうすればよいのか、相手の気持ちを理解することの大切さも含めて、細かく項だてを行い説明した。指導員が社会生活で体験した中で効果的と感じたことや卒業生から聞いた失敗例や成功体験などの話を交えたことで、それぞれが今後起こりうる問題に対して、ある程度の見通しが持てたようだった。また、生活の中で生かせる場面をいくつか例に挙げ、日ごろから意識していくことで現場実習へつなげようと話した。そうし

たことで、実習終了後もあいさつや返事が大きい声ででき始め、積極的な手伝いやお互いに協力し合う姿が多く見られるようになってきた。困ったときなどに指導員や友達へ相談することができるようになる場面も見られるようになり、少しずつではあるが相手を思いやる気持ちが育ち始めたように感じた。

実施後、それぞれに意識した行動が見られていたが、この話を定期的に行うことができなかった。そのため、継続性に欠けてしまい確立には至らなかったのが大きな課題である。この反省を生かし来年度も引き続き取組を行っていきたい。

b　『自分の身体を清潔にしよう』

中・高等部生を対象に『自分の身体を清潔にしよう』と題して、日ごろ自分たちがしている入浴の仕方について考えてもらう機会を設けた。

日時	9月11日	
対象者	中学部・高等部1年	
内容	中学部 〇清潔にする理由 〇洗髪・洗体の手順確認 〇キレイにしておく場所（汗をかく場所） 〇下着が汚れたときの対処法	高等部 〇清潔にする理由 〇感染症について 〇洗髪・洗体の手順確認 〇キレイにしておく場所（汗をかく場所） 〇下着が汚れたときの対処法

日常生活の様々な場面で身体が汚れる原因があり、知らないうちに人を不快にさせてしまうことがあることをみんなに知ってもらった。また、汚れを放置することで身体に起こる病気にも触れたことで、初めて不潔にしていると病気になる場合があることを知った子どももおり、清潔にすることの大切さに気づいたようだった。具体的な洗い方を説明する中で、自分がいつもしている身体の洗い方をそれぞれ頭に浮かべてもらい、どういったところに注意をしながら洗うとよいのか頭の洗い方から順に話をしていった。それぞれキレイに洗えていると口にしていたが、指の使い方が十分でなく汚れを落とし切れていない人がいることや、せっかく洗えていてもすすぎが上手くできていない人がいることを指導員より伝えた。また、身体を洗う際に自己流で行う人が多いため、首から順に下へ向かって洗うと洗い残しがなくなることを説明した。そのとき、特に注意してほしいところとして首や胸、脇、足の裏など、汗をかきやすい箇所を念入りに洗うことが大切で、それができていないと人を不快にさせる臭いを発生させてしまうことを念押しした。

この話をしたことで身体を清潔に保つことができるよう念入りに洗う子どもが増え、すすぎの重要性を知ったことで、皮膚トラブルが改善する子どももいた。しかし、入浴の仕方についての指導支援を必要とする子どもも多いため、今後も継続して取り組んでいきたい。

（イ）　友達との関わり方

ホーム内の子ども同士の関わりの中でふざけが過ぎて友達の気持ちを傷つけてしまうことが起きてしまった。そのため、子ども一人一人が仲良く生活していくために下記の内容で実践を行った。

日時	10月24日（火）　19時～20時
対象者	18名のうち15名参加
内容	・いじめの定義とは？ ・どういったことがいじめなのか？ ・いじめが、実際どういった犯罪に当たるのか？ ・いじめ自殺の新聞記事の紹介（高知新聞2017.8.26　27P　抜粋）

	・人権啓発ビデオ「私たちの声、３人の物語～全国中学生人権作文コンテスト入賞作品をもとに～」を見て、感想を聞く。 ・「自分がされて嫌なこと」、「いじめがなくなるにはどうしたらいいか」を全員にアンケートを取りフィードバックを行う。

まず、始めに「いじめ」は絶対にしてはいけないことを強調した。そのうえでいじめとは相手がイヤと思ったら＝いじめであり、学校の内外でも起こったらいじめであることを説明した。そして、具体的にどのような行動がいじめにあたるのか紹介し、それが犯罪とも結びつくことを説明した。さらに、「いじめ自殺繰り返さないで」といった新聞記事を紹介し、いじめの結果取り返しのつかない事態になることを話した。ここまでの話は、指導員から一方的に話をしたが、いじめに関わった子どもはいつもと表情が変わり真剣に聞き入っていた。また、他の子どもたちも真剣に話を聞いていた。

その後、いじめを題材にした、人権啓発ビデオを子どもたち全体に見せた。内容が重たいものであったためあまり感想は出なかったが、「見て見ぬふりをするのはよくない」、「いじめを止めたのはすごい」などの感想が子どもたちから出てきていた。

最後に、図 1 のアンケート用紙にあるように、「自分がされて嫌なこと」、「いじめがなくなるにはどうしたらいいか」の２点について、アンケートを書く時間を設けた。アンケートはみんなが読めるように配慮し、ひらがなで書いたものを配り、また、読むことが難しい子どもには指導員が手助けをして意見を聞き記入した。子どもたちは、そのアンケートを書いている間も、最初に話をした、「どういったことがいじめなのか」の内容を指導員に質問をすることや、友達同士で「こういう場合はいじめになるろうか」と話し合うような姿も見られ積極的に参加する姿が見られた。

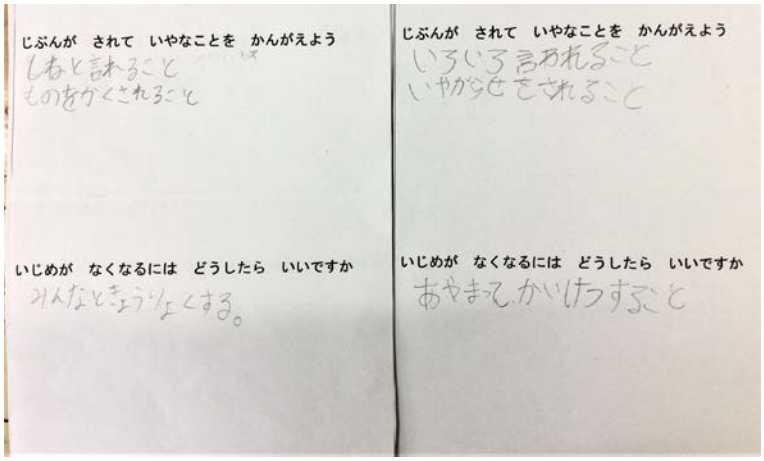


図１　アンケート用紙

「自分がされて嫌なこと」というアンケートの中には、「死ね、アホ、バカ、はやくいね、消えろと言われる」といった、暴言に関することや、「パンチをされる、キックをされる、暴力を振るわれる」といった暴力に関することが大半の意見を占めていた。「物を壊される、隠される」「服をぬがされる、集団でかかる」といった少数の意見も出ていた。

また、「いじめがなくなるにはどうしたらいいか」というアンケートには、「死ねって言ったらあやまる、死ねと言わない。パンチ、キックをしない。バカと言わない」といったような、自分の行動に気をつけていこうという意見や、「いじめられている友達がいたら助ける。いじめを見たら注意する。いじめを見たら先生を呼ぶ」といった、自分の周りでいじめが起きた時どう行動するかの意見や、「あやまって解決する」「みんなと協力する」「弱い子には手を出さない」といった意見もあった。

全員がアンケートを書き終わってから、アンケートの内容を一つ一つ読んでいきフィードバックをし、「自分がされて嫌なこと」ではどういった行動でみんな嫌な思いをしているのか、どういった行動が嫌がられているのかを話し、一人一人に感じてもらった。「いじめがなくなるにはどうしたらいいか」では書いていることについて、一つ一つの意見を肯定的に話し、みんなが書いてくれた行動をしていけ

ば、いじめも無くなるし、楽しい寄宿舎になっていくという話をした。また、指導員が学生時代に体験した話も交え、いじめられた人はずっとそのことが心に残って、嫌な思いをずっとすることになるということも伝えた。

この実践を行ったことで、普段の生活の中で、子どもたちが危ないことをしている場面で、上級生が注意をしてくれるようになり、今まであまり遊ばなかった友達同士が遊ぶ場面も見られてきた。また、いじめに関係した子どもたちだけでなく、子どもたち全員に話をしたことで、他の子どもたち自身の関わり方も見直す機会となった。

（ウ）　『友だちと楽しく遊ぼう』

普段の関わり方に課題のあるＡ君とＢ君へ『友だちと楽しく遊ぼう』を題材に下記の内容で個別に話す機会を設けた。

日時	11 月 13 日（月）19：00～19：30
対象者	中学部Ａ君、高等部Ｂ君
内容	・いじめの話の振り返り ・嫌なことをされたらどう感じるのか？ ・みんなと楽しく遊ぶために気をつけること ・困ったときの対処法 ・自分でできることを考える

スライドショーを使い、日ごろ自分たちが周りの友達や指導員から注意を受けている言動を例に挙げ、相手からされると自分はどう感じるのか答えてもらった。どの例に対しても「いやだ」「やめてほしい」などの言葉が聞かれたので、日ごろ自分たちがやっている行動であることを伝えると、２人とも「あ…」と気がついたようだった。自分がされて嫌なことは、ほかの友達も同じように嫌だと感じるのだからすぐに止めること、周りの友達や先生の声を聞くことも大事であることを話した。友達とトラブルになった時にどうしたらよいか聞くと、嫌なことをされた時には「やめて」と言う、嫌なことをしてしまった時には「謝る」とそれぞれが口にしたので、解決するための対処方法を確認し、困った時は必ず先生に相談することを伝えた。話のまとめとして、仲よく楽しい寄宿舎生活を送るためにそれぞれが日ごろからできる約束事としてＡ君は『友だちを遊びに誘うルールを決める』、Ｂ君は『自分で決めたルールを守る』を頑張っていくこととなった。

図２　スライド資料

Ａ君は友達を遊びに誘うときに「『握手』や『ハイタッチ』をしよう」を合言葉にポイントシートを活用してゲーム感覚で取り組んだ。上手にできた時は指導員からポイントシートへチェックするとしたので、「早くいっぱいにしたい」と楽しみながらも自分自身で意識しながら頑張ることができていた。見事にシートがいっぱいになったので登校前の時間にみんなが集まった時、その頑張りをたたえ表彰式をして賞状を手渡した。Ａ君はみんなからの拍手やお祝いの声をかけてもらったことで照れた表情もあ

ったが、いい笑顔が見られ達成感を得ているように感じた。Ｂ君は下校後から翌朝の登校まで自分で決めた約束の中から一つ選択し、指導員とその項目を確認することで友達との関わり方に気をつけるよう努力していた。翌朝に指導員と達成度を確認し、できていれば好きなキャラクターシールがもらえるのも励みとなっていた。そのうち複数の項目を選択し自分に厳しく取り組もうとしたが、もう一歩のところで達成することができず悔しがる姿も見られた。しかし、翌日には自分で気持ちを切り替え達成に向けて努力する姿がとても印象的だった。その後の様子は、以前に比べると明確なルールができたことにより注意を受けることが少なくなり、よい関わり方が随分増えてきている。

今後も友達と楽しい寄宿舎生活を送ることができるように支援を行っていきたい。

図３　Ａ君の友だちを遊びに誘うルールと表彰状

図４　自分で決めたルールとポイントシート

ウ　まとめ

性の支援については、それぞれの実態に応じて分かりやすい内容で説明を行ってきた。そのため、行動へ移行させやすい子どもも多く見られたのは成果として挙げられる。しかし、取組の中で継続性に欠けたため、力を身に付けられなかったこともあった。次年度に向けて継続性を持たせた取組ができるようしっかりと計画していきたい。

年度当初、友達との距離感が上手く掴めないことやよい関わり方が分からないことでトラブルになることが多かった。北舎棟の構造上個室がなく、一人になれる場所や気持ちを落ち着ける場所の確保が難しいこともトラブルが重なる原因となっていた。そのため、日ごろ生活する中で子どもたちが協力する機会を設けることで、お互いのよさに気づくことができ関係性も築けるようになってきた。また、指導員を交えた余暇時間の過ごし方や雑談など会話を楽しむ機会を持ったことで共通の遊びや話題、趣味などを見つけられ、遊びを通して適度な距離感が身につき、関わり方も上手くなってきたように思う。ただ、小学部生と関わる際はまだ一方的な関わり方になってしまう場合が多く、指導員が「やり過ぎだよ」「ちょっと離れようか」など本人に気づかせるような言葉がけをするようにしている。周りの友達からも同様の声をかけられることでその関わり方がよくないことに本人が気づく場面も少しずつ増えてきた。上手に距離を取ることができた時には、「上手に遊んでくれてありがとう」などの言葉を伝え、子どもたちが優しい関わりが持てるよう心掛けた。

今回取り上げた事例に関して全体指導を取り入れたことがきっかけで、子どもたち自身が自分のこととして人との関わり方について考える良い機会となり、相手の気持ちを考えた伝え方を心掛けようとしている子どもの姿も見られるようになった。また、高等部生の関わり方にも変化が見られるようになり、今回のことが子どもたち自身の意識を変える機会になったようである。日ごろの関わりや遊びの中で依然としてからかいやふざける場面が見られるものの、以前のように行き過ぎることが少なくなり、お互

いに注意し合える場面も増えてきた。しかし、依然として友達との遊び方や付き合い方などを含めた対人スキル獲得に大きな課題がある。また、新たにスマートフォンの使い方やＳＮＳでトラブルが発生するなど情報モラルについても問題があり、多くの課題を残している。

今後も関わり方については指導員だけでなく、子どもたちの間でも声をかけ合えることが大切である。そのためにも、そういった場面に指導員全員が統一した指導・支援で対応できるよう確認しておく必要がある。指導員の言葉がけ一つにおいても、子どもに分かりやすい具体的な表現で統一するだけで効果は大きいため、日々の引継ぎの中で子どもたちの些細な言動や様子に注目し、支援方法の話し合いを深め共有することで再発防止に努めたい。

最後に、子どもたちの関係がある程度構築できたことでホームとしてまとまりができてきた。これからもみんなで助け合い、認め合える関係を築けていけるように子どもたちを導いていける指導員集団でありたい。

【参考資料】

ティーンズプレイス“いじめの種類 12 つ。いじめの定義を正しくしっていますか？”　(2016 - 1 - 19)
http://teens-place.com/1384/（参照 2017 - 10 - 18）
文部科学省　“（別紙１）学校において生じる可能性がある犯罪行為等について”
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/seitoshidou/1335369.htm（参照 2017 - 10 - 18）
法務省委託　平成 25 年度　人権啓発ビデオ「私たちの声、３人の物語」いじめをなくすために、今

（２）　はとホームの取組

ア　研究経過

今年度のはとホームは新入舎生に高等部生４名を迎え、小学部 1 名、中学部６名、高等部 12 名の計 19 名でスタートしたが、９月に１名退舎し 18 名となった。

昨年度より、ホーム年間支援計画を作成し、それに基づいて子どもたちへの支援を行っている。試行期間であった昨年は、年間方針を『「新しい自分を発見しよう」～あそび、身の周りのこと、当番など体験したことがないことに挑戦しよう！～』と定めた。高等部生を中心に「身だしなみとおしゃれの違い」や「洗濯講座」、卒業後を見据えての「将来のビジョンについて考えよう」などの取組を行った。

また、指導員が中心となって進行していたホーム会を子ども（ホーム役員）中心に進行する会にするなど、会の持ち方についても変更した。その結果、ホーム会の前に指導員とホーム役員がミーティングを行い、会の進行について話し合うことが定着した。かつてはホーム会を開いても私語が多く途中退席する子どもさえいたが、リーダー（ホーム役員）が一生懸命進行する姿を見て、そのような態度をとる子どもも減っていった。そればかりでなく、今まで発言しなかった子どもが「お楽しみ会でこんなことしたい」や「早朝マラソンクラブをしたい」など発言するようになるといった、うれしい変化があった。

当番活動や掃除においても、現場実習で寄宿舎に不在の実習生の分を進んで後輩たちが引き受けてくれたり、卒業生がいなくなった年度末には、新たに配膳や風呂掃除に加わる下級生に上級生がやり方を教えてあげたりする姿も見られた。

子どもたちを信頼し、役割を任せることで、子どもたちの方から自然と自分たちで「やり遂げよう」「協力してがんばろう」という気持ちが芽生え、自信につながったように思う。年間方針にあるような「新しい自分」を発見できただろうし、「友達との関係づくり」の土台ができたのではないだろうか。

今年度はその「友達との関係づくり」を更に深めていくために『「大切にしよう！自分のこと、仲間のこと」～仲間とともに楽しく充実した寄宿舎生活を送ろう～』を年間支援計画のテーマとして取り組

むことにした。余暇時間は外で遊びたい子どもが多いこともあり、入浴時間をアーリータイムとレイトタイムに分け（アーリータイムは夕食前に、レイトタイムは夕食後に入浴する）、下校後から 16 時半まで天気の良い日は運動場や中庭で自転車や散歩、野球やサッカーなど、雨の日は体育館や多目的ホールで子どもたちがしたい遊びができるように生活時間帯を設定し、体を動かしながら集団での遊びを通して仲間づくりを行った。

また、昨年度に引き続き、中学部を含む自立を目指す子どもたちを中心に全自動洗濯機を使って①「洗濯して干す」②「洗濯物を取り込み、タンスに片付ける」までの過程を２回に分けて「洗濯講座」を開催した。年度当初に全自動洗濯機の台数を増やしたこともあり、全自動洗濯機を使える子どもを対象に、「洗濯機の使い方講座」も開催した。希望者のみ参加の講座だったが対象の子ども全員が積極的に参加できた。全８回の講座の講師がそれぞれ違っていたのも子どもたちは楽しみにしていたようだ。

今回はとホームの取組として「入浴指導」と「友達との距離感」について事例を挙げて紹介する。「入浴指導」は、基本的生活習慣を身につけるための指導取組の一環としての支援ではあるが、寄宿舎は集団生活であるため、家庭での入浴と違って、一人でゆっくりのびのびと入ることは難しい。しかし、そういった中でもリラックスして入浴するために様々な工夫を行っている。また、主にレイトタイムメンバーとではあるが、男性指導員がともに入浴し、裸の付き合いをすることで、子どもたちが悩みを話してくれるといった利点もある。「友達との距離感」は、人との距離感に課題のある子どもを対象に指導員が作成した動画を見ながら相手とのコミュニケーションを客観的に見てもらい、どう感じるかを話し合った。

イ　実践事例

（ア）　入浴指導について

ａ　子どもの実態と研究課題

年度当初は賑やかな雰囲気の中で日々生活をしていた。入浴についても慌ただしい日課の中、子どもたちの実態把握をしながらの支援だった。寄宿舎の生活で入浴の時間は一日の中で疲れをとり、リラックスする時間である。子どもたちの発達段階は様々であるが、それぞれに自分でできることを増やし、落ち着いた雰囲気の中でリラックスする時間になってほしいと考えた。また高等部生には卒業後の自立に向けて公共の施設でのマナーを学び、様々な経験を重ね成長してほしいと願い、この取組を計画した。子どもたちの発達段階に応じてグループを考え、講座を４グループに分けて行うことで少人数での落ち着いた空間で学ぶことができ、アットホームな雰囲気の中で取り組むことができた。また「にゅーよーくへ行きたいかぁ」と題してポスターを掲示し、子どもたちには参加をしたら特典があることも伝え、興味を持ってもらい意識づけを行った。

ｂ　取組の内容

① 事前に指導員間で会を設け、子どもたちの実態や課題を話し合い、伸ばしたい力を考える。

② 伸ばしたい力をねらいとし、重点的に支援内容を考える。

③ 発達段階に応じてグループ分けを行い、ポスターを掲示し子どもたちに興味を持ってもらう。

④ 参加者には特典として、「おふろマスター」のワッペンを発行し、高等部生のレイトタイム組は２学期に公共の施設（かんぽの宿）、アーリータイム組は寄宿舎西棟の広くてきれいなお風呂に入れる券を配付する。

写真１　おふろマスターのワッペン

講座の内容や子どもの様子については表にしてまとめた。

入浴講座の内容			
① 衣服の着脱や体の洗い方の順番の確認。実演を交えて学習する。 ② ○×形式のクイズを行う。 ③ 実際にお風呂に入りながら実践していく。			
日時	グループ	実態	重点的に支援した内容及び子どもの様子
6月22日	A	〈アーリータイム〉４名 自分で洗髪、洗体はできるが確認や言葉がけが必要である。	衣服の着脱や体の洗い方の順番の確認。実演を交えて学習する。 分かりやすいようにホワイトボードに洗い方の順番や入浴のセットを準備し、実践しながら確認を行った。クイズには積極的に答える姿が見られた。参加賞として「おふろマスター」のワッペンをもらったことで意欲が高まったのか、その後の入浴ではそれぞれ学習したことを振り返ることができた。
6月23日	B	〈レイトタイム〉７名 自立しているが、入浴のマナーについては経験不足な面があり言葉がけが必要である。	○×形式のクイズを行ったとき、答えの理由などを聞き、理解できているかの確認を行った。ワイワイと楽しい雰囲気の中で、時には真剣な表情で参加者全員が真面目に話を聞くことができた。
6月26日	C	〈アーリータイム〉４名 全介助、また自立はしているが確認が必要である。	衣服の着脱や体の洗い方の順番の確認。実演を交えて学習する。 クイズでは呼び鈴を鳴らして答えることが楽しくて積極的に取り組めた。立ち上がって外を見る子どもがいたが、質問に答えることで集中できた。
7月11日	D	〈アーリー＆レイトタイム〉 ４名 自立はしているが確認や入浴のマナーについては言葉がけが必要である。	衣服の着脱や体の洗い方の順番の確認、マナーなどを中心に行った。 メンバーの組み合わせに配慮が必要だったため席順などの工夫を行った。 また、クイズでは呼び鈴の音が気になり、集中できない子どもがいたため、今回は使用しなかった。 前に出てきて実践したときに、みんなの前で褒められると、とても嬉しそうだった。「おふろマスター」のワッペンがその後の入浴の励みになった子どももいた。

写真２　入浴指導の様子１

写真３　入浴指導の様子２

ｃ　成果と課題

２学期の終わりには個々に成長した姿も見られだし、全介助だった子どもも周りの友達を見て自分で洗おうという場面が増えた。「おふろマスター」のワッペンを大事に自分の机に貼っている子どもや、マナーを忘れて騒いでいてもワッペンの話をすると「あっ、そうやった」と思い出して気をつける子どももおり、効果が持続している。個人差はあるが一つでもできることを増やすという目標はそれぞれ達成できたように思う。

レイトタイム組の高等部生は「かんぽの宿」での入浴は他のお客さんの迷惑にならないよう意識してお互いに声をかけ合っており、相手を思いやる気持ちが芽生えてきた。また前日にはきちんと入浴の準備ができ、楽しみにしている様子だった。アーリータイム組も３学期に西棟のお風呂に入れることが励みになっており、意欲向上へとつながったのではないかと感じた。

今後も工夫を重ねながら継続していき、子どもたちの意欲を引き出していけるよう取り組んでいきたい。

（イ）　距離感について

ａ　子どもの実態と研究課題

新入舎生も少しずつ寄宿舎での生活に慣れてきた７月中旬、友達との距離感について気になる子ども２名を対象に「友達との距離感について考えよう」というテーマで取組を行った。対象となる子どもＡは中学部１年より入舎し、現在中学部３年生、Ｂは今年度新たに入舎した高等部１年生である。Ａは同年代の友達と関わりを持つことが難しく、大人へ関わりを持とうとすることが多い。相手がどんな反応をしようがおかまいなしに「〇〇（主に芸能人の名前）は好きですか」「腕相撲してください」と一方的に言い続ける。Ｂは距離感に課題があり、好きな相手や興味がある相手に対し、べたべたと密着する。注意を受けてもなぜいけないのか理解しておらず、繰り返し行うため、トラブルに発展することが多い。そこで、「よりよい友達関係を築くためには、相手との適切な距離感が必要である」ということを知ってもらうため、前述の取組を行うことにした。

ｂ　取組の内容

まず、指導員出演の動画を iPad で撮影し、距離感について望ましいパターンと望ましくないパター

ンを作成した。

動画の内容

望ましくないパターン	望ましいパターン
❶ べたべたと相手に密着する映像。相手が嫌がってもやめない。最終的には相手が怒ってしまう。	① 距離をとって話している映像。相手は「べたべたされなくなってうれしいよ」のセリフ。フラフープをつけた指導員が適切な距離をとって相手と話している映像。
❷ 相手に同じ質問ばかりしている映像。相手は「いつまでこの質問は続くのかなあ…」のセリフ。	② 同じ質問ばかりされるのではなく、お互いが交互に話し、楽しそうな２人の映像。
❸ 楽しそうに会話している２人に第三者が割り込んで一方的に話す映像。割り込まれた２人は「せっかく楽しい話をしていたのに…」のセリフ。	③ ２人の会話が終わるのを待ち、それから会話をしようとする映像。和やかな感じで３人の会話が弾む。

当日までに取組を行うことを知らせていたが、Ｂは当日になって「どうして僕とＡ君だけなの？」と疑問を指導員にぶつけてきた。これまでに何度か同じような指導を受けているようで、取組に対して警戒している様子だった。「友達との関係を今以上によくしていくためだからね」と説得し、参加してもらった。時間帯は夕食後 18 時 50 分から 19 時 30 分までの学習時間を利用した。19 時 30 分から余暇時間となっているが、その時間に行うと「余暇の時間を削られる」と子どもたちから不満が出る。そのため、ゆったりとした気持ちで参加できる学習時間に取組を設定することが多い。学習時間に宿題をする子どもがいるが、取組がある日は下校後や学習時間後の余暇時間に行っている。Ｂもその日は宿題が出ていたが、きちんと取組が始まる前に済ませていた。

18 時 50 分、学習室に集合し、取組をスタートする。iPad を使い指導員出演の動画を❶から順番に見始める。Ｂは指導員の演じる役が、自分をモデルにしていると感じ、少しばつが悪そうだった。❶を見てどう思うかＢに聞いてみると、「距離が近い」や「相手が嫌がっている」と気づいたことを述べた。こちらが気づいてほしいことについて理解しているようだった。①の映像を見て、一定の距離をとって話をするほうが、相手を嫌な気持ちにさせないことを確認する。また、フラフープをつけた指導員が距離をとって会話する動画を見る。「これぐらい離れた距離なら問題ないね」と伝える。ＡもＢも真剣に話を聞いていた。動画を見た後は、実際にフラフープを使って距離感を確かめた。普段友達や指導員にべたべた密着するＢは、フラフープをつけた時の相手との距離感にとまどっている様子もあったが、動画も合わせて見たことで距離感について新たな視点が生まれたのではないかと思う。

❷の動画はＡの相手への関わり方について、気づいてほしいという意図で作成したものだった。しかし、Ａの反応は指導員が出演しているのがうれしいのか、終始笑いっぱなしで、しつこく質問を続ける指導員の演技が自分の課題であるとは感じていないようだった。②の動画を見ながら、「相手が話をしている時は、話が終わるまで待ってあげるといいね」という話をし、頷いてはいたがどこまで理解できているかは不明である。

❸の動画はＡ、Ｂ両名ともに課題と思われるシチュエーションである。どんなふうに感じたか聞くと、Ｂは「（相手の話が終わるまで）待たないといけない」と答える。②での話がきちんと頭に入っている様子だった。Ａは❷②の時と同様に笑っていることが多く、自分のこととして捉えることは難しい様子だった。

最後に❶❷❸の動画に出ていた人はどこがいけなかったのか、再度確認した。❶❷❸の人のように友達に対して相手の気持ち、都合を考えずに自分本位な行動をとっていないか振り返りを行い、会話したり仲よく遊んだりするためには相手のことを考え、思いやることが必要ということを伝える。

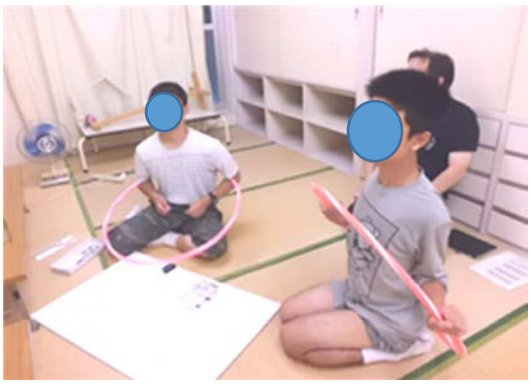


写真４　距離感についての取組の様子１

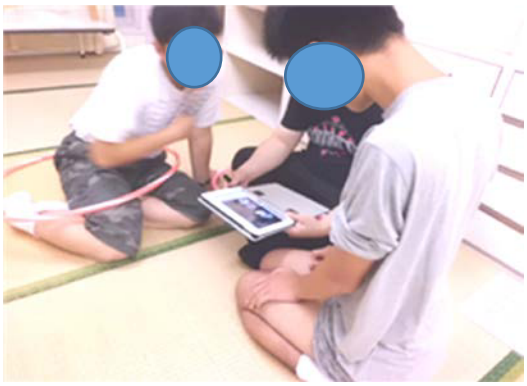


写真５　距離感についての取組の様子２

ｃ　成果と課題

Ａにとっては指導員出演の動画ということで興味を持って参加できたが、動画の中の指導員にばかり注目してしまい、こちらが意図したことは残念ながらあまり伝わらなかったようだ。内容を工夫し、再度取組を考えたい。

Ｂは自分の課題である「距離感」について、これまでにも指導を受けているようで意識はしているが、なぜいけないのか、という気持ちが強いのではないかと思う。今回指導員がＢを見立てた役を演じることで客観的に自分を捉えることができただろうし、新たな視点で自分を見つめ直すよい機会になったのではないかと思う。また、フラフープを使って具体的な距離感をイメージして考えることができたのもよかった。

（ウ）　まとめ

上記の取組以外にも、異性とお付き合いをしている子どもに対して「性交することで起こる様々な危険」や「性交することは責任を伴うこと」というテーマで取組を行った。異性との付き合いについては、指導員側が否定的に話すのではなく、「悩みや質問したいことがあればいつでも相談に乗る」と、恋愛に対して後ろめたい気持ちにさせないように支援することを心がけた。ただし、「相手の心と体を大切に考える付き合い方が大事だよ」ということは強調した。それまでは異性との付き合いについて、あまり話したがらない子どもだったが、現在は割とオープンに指導員に話をしてくれるようになった。母親にも彼女を紹介することができたようで、母親も初めてのことだと驚いていた。（余談であるが、この取組はつばめホームの子どもにも参加を要請し、２つの男子ホームが合同で行うことができた成果の１つである。１学期にはお楽しみ会のバーベキューを合同で行うなど、近年あまり見られなかったホーム間での協力した取組が今年度できたことは収穫だった）

また、新入舎生を中心に行った「自分のことを知ろう、認め合う大切さを知ろう」という取組では、自分や友だちの持ち味（よいところやそうでないところも含めて）を発表することを通して、自分のよいところを新たに発見できたり、友達の持ち味を知ることでお互いを認め合ったりできるよい機会となった。取組後、参加した子どもの中には、友達とけんかになっても「〇〇はいつも一言多くて腹が立つけど、〇〇はそういう性格だから我慢するよ」と相手のことを理解しようとする発言も聞かれるようになった。

様々な取組を通して、昨年度から取り組んでいる「友達との関係づくり」を更に深めることができたのではないかと考える。しかしながら、些細なことで言い争いになったり、けんかになったりという場面はまだ多く見られる。争いの原因は「（友達との）距離感」や「（相手の気持ちを考えない）心ない言葉」であることが多い。今後も「友達との関係づくり」の取組は内容を工夫しながら継続していきたい。

また、大人（指導員）が子どもたちを信頼し、ホーム会や当番活動などをリーダーたちに任せることで、子どもたちが主体となって行う活動を増やしていく。そのうえで仲間と協力しながら成功体験を味わい、自信につなげてほしい。

『「大切にしよう！自分のこと、仲間のこと」～仲間とともに楽しく充実した寄宿舎生活を送ろう～』が今年度のホーム年間支援計画の支援方針であったが、今後も様々な取組を行いながら、お互いの得意なこと、不得意なことを認め合い、補い合いながら仲間と協力することができる関係づくりを築いていけるように支援したい。そのためにも子どもたちの不安や不満、悩み事や要望に気づけるように常に指導員間でアンテナを張り、連携して子どもたちに対応できるように日々努力をしていきたいと考える。

（３）すももホームの取組

ア　舎生の実態

今年度すももホームは、中学部１名、高等部２名の新入舎生を新しく迎えた。小学部１名、中学部４名、高等部 10 名の計 15 名でスタートした。実態として、余暇時間には年齢差も関係なく楽しそうにお喋りをし、交流する姿も見られる。しかし、その中で出た言葉が思いがけず相手を傷つけていたりなどのトラブルも多く、友達との関わり方については、昨今の課題ともなっている。

さらに、今年度は６月下旬ごろより中学部Ａの指導員やほかの子どもたちに対する暴言や他傷行為、奇声が目立つようになった。他傷については主に指導員に対しての行為であるが、場合によってはほかの子どもにまで及びそうになることもある。クールダウンまでの間はＡやほかの子どもたち、ともに怪我を負わないよう自室で過ごしてもらうなど、Ａ以外の子どもたちの生活の保障も困難になってきた。行為のきっかけとしては、寄宿舎生活の中で自分の思い描いたとおりに物事が進まなかったことに端を発する。しかし、以前気にならなかったことにも反応を示しだすようになったことから、周りから認めてもらいたいという気持ちの表れではないかと感じる。

また、Ａの問題行動は、浴室の棚に上がって足をぶらつかせ、ほかの子どもの衣服の着脱の邪魔をしたり、掃除のために湯を抜いた浴槽に寝転ぶなど人を困らせるような態度を取ったり、その日によって行動が変わるようになってきた。その都度指導員間でも話し合いの場を設け、支援の方向性を定めている。今年度は、その中で出た課題と取組について紹介したい。以下その内容である。

イ　研究課題と実践事例

（ア）『風呂掃除』

ａ　課題

風呂掃除は、学期交代制で子どもたちに満遍なく係活動がいきわたるようにしている。Ａは２学期にこの係がまわってきたが、掃除が嫌で活動を放棄し、参加できても遅れてくることがほとんどであった。また、遅れて参加したにも関わらず、ほかの子どもたちが先に掃除を始めているのを見て、自分のやりたいところを掃除できないことに不満を漏らし、ほかの子どもたちや指導員に暴言を吐くことが多かった。そのような中でもＡの気持ちを受け入れ、Ａが不満を言う度に、掃除場所を譲る子どもの姿も見られた。一度、指導員からくじ引きで掃除場所を決める方法を提案し、一時は受け入れつつもくじ引きの

順番にこだわったり、引いて掃除場所を決定した後に「前も同じ場所やったから自分の場所と変えてほしい」など、自分の思いでほかの子どもたちの行動を決めるので、定着できなかった。このような状態が続いたため、風呂掃除の子どもたちを集め、指導員も交えての話し合いを行った。

ｂ　事例

今後掃除場所の決め方をどのようにしたら、皆が納得して掃除を気持ちよくできるかということを題材に、風呂掃除の子ども同士で話し合う時間を設けた。指導員のどうすればよいかの問いには、すぐには答えが出なかったものの「円盤の当番表を作って自分たちで回したら分かりやすいと思う」とＡより意見が出た。ほかの子どもたちからも「それがいい」との合意の言葉があり、意見を出したＡが表を作ることとなった。当番表は１日ずつ係の子どもが掃除前に回すことで今日の掃除場所を確認し、その際も１人が勝手に回すのではなく全員がそろった状態で回すことに配慮した。また、ほかの子どもから「Ａさんが回したほうが、わかりやすいろう」と、Ａを理解した提案もあった。成果として、当番表を掃除開始前に回すことは定着することができ、Ａも自分たちで決めたことを納得したうえで、掃除に多少の遅れはあるものの取り組むことができた。また、嫌な気持ちを全面的に出すだけでなく、話し合いの場を設けることで自分の意見や気持ちを知ってもらう機会があり、どうすればよいかを自己選択できたのでＡにとっては少しでもよい方向に向いたのではないかと考える。しかし、最初のうち２～３回くらいは取り組めていたが、Ａ自身の日ごろの気持ちの変動が激しく毎回浴室でパニックとなり、ほかの子どもたちが安全に掃除に取り組むことができなくなった。また、Ａ自身も掃除に取り組めない日が続いたため、Ａ自身の意思により掃除当番を休むという形で名前を外す結果となっている。

写真６　風呂掃除当番表

(イ)『落ち着いた時間の確保』

ａ　課題

Ａがパニックとなった時、周りへの暴言や他傷が止まらなくなり、自分の力で気持ちをコントロールすることが難しい。そのため、普段よりＡが落ち着いて過ごせる時間が必要不可欠である。

パニック時の手立てとして、学校から持ち帰った好きな教師の写真を見ていると落ち着くというＡの訴えで、気持ちが高揚するときには写真を眺めることを促した。その後、その教師の似顔絵を描き、その上にちぎった折り紙を貼り付けちぎり絵を完成させた。創作意欲や作業中の集中力も高く、余暇時間にＡの好きなことに取り組むことで気持ちのゆとりを持つことができるよう支援した。工作は以前から好んで取り組んでいたようで、折り紙も自由に創造して指導員に見せてくることもある。ある時、普段と同様に折り紙に取り組んでいる際、「みんなにも折り紙を教えてあげたい」という申し出があった。余暇時間を友達と過ごすことで関わりを広げ、周りに認めてもらいたい気持ちを補うことにもつながるのではないかと考え、Ａの気持ちを具体化できるよう支援することにした。その後も、Ａ自身が立案した計画をできる範囲で実行している。今回はそのうちの２つを取り上げた。

（ａ）　折り紙講座

Ａ自身が立案した取組ということで内容などはＡの思いを優先する形をとった。まずは参加者を募集するために、告知ポスターを作成するところから始めた。Ａにとって初めての試みであったが、日ごろ指導員が掲示している行事の告知ポスターをヒントに分かりやすく書くことができていた。完成したポスターは、廊下の目につく場所に掲示し、周りの子どもたちや指導員にも参加を促す声をかけ、募集を

行っていた。都合もあり全員ではなかったがほとんどの子どもたちが快く参加してくれた。

講座ではＡが先生役となり、始めに「折るものは基本自由ですが、最初の１つは一緒に折り鶴を折りましょう」と、提案した。その際、折り方を一から前に出て参加者が見やすいよう部屋の壁も活用しながら説明した。参加者の中には、集中力が乏しく動き回り、途中退室する子どももいたが、Ａがその行為を咎めることはなかった。また、折り紙が難しい子どもにもそばに寄り添い、折り方を教えてあげる姿も見られた。結果、Ａ自身の丁寧な対応もあり、参加者からも好評を博し、講座は終了した。その後Ａは、参加者の折り紙の作品を１つの画用紙に貼り付け、ホームの廊下に掲示した。完成した作品を目に見える場所に掲示することで参加者も達成感を感じ、Ａ自身も『先生』として周りから認めてもらえる時間となり、よい機会であったと考える。折り紙講座はＡの強い希望と参加者からの「楽しかった。またやりたい」の声に第２回を実施している。

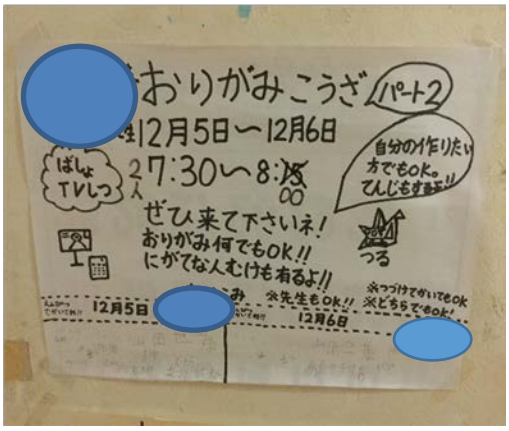


写真７　折り紙講座の告知ポスター

写真８　Ａが参加者に折り方を説明している様子

写真９　参加者作品コーナー

（ｂ）　ボウリング大会

この企画はＡと高等部生Ｂとの合同企画である。ホームの余暇時間中、ほかの子どもがペットボトルとおじゃみでボウリングを行っていたのを見て、皆でやりたいと思いついたようだった。主にＡが主体となって取り組み、ＢはＡの補助として参加した。今回は大会ということもあり、進行に悩む様子があったため指導員もＡと一緒に考えた。そのうち、大会ルールや皆に表彰状を作ることなど次々と発想していき、表彰状は参加人数分の色画用紙にＡが一つ一つ手書きで作成して考えを形にしていった。また、ペットボトルやおじゃみなどの必要な道具も準備し、「誰が何本倒したかもいるよね」と、得点表もＡがＢに声をかけ一緒に準備を行った。「大会は広い場所で」というＡの希望でホームの廊下で行い、ルールについては１人ずつ参加者の名前を呼んで指定の位置に立って

写真 10　ボウリング大会の様子

もらい、並べられたペットボトルに向かっておじゃみを３回投げるというものだった。ただおじゃみを投げるといってもやはり得手不得手があり、投げるのが難しい参加者も多数いた。そのような中でも、おじゃみが当たらなかった時には「どんまい。大丈夫、まだ投げられるよ」などＡが参加者を励ます優しさも見られ、参加者も自分の腕前を気にせず心から楽しんでいる様子であった。

最後に全員で最終得点数を確認し合い、終了後表彰式としてＡが参加者一人一人に表彰状を読み上げ手渡した。その表彰状を参加者は嬉しそうに受け取り、今でも思い出として自室の壁や机に飾っている者もいる。結果、時間をかけて準備した甲斐もあり、参加者にも喜んでもらえたことでＡ自身も達成感を感じていた。また、一般的な大会のように優勝や準優勝などの順位にこだわらず、皆で一緒に体を動かしながら遊ぶ空間を作ったことで、楽しい時間を共有することができたのではないかと考える。

写真 11　Ａが表彰状を作成している様子

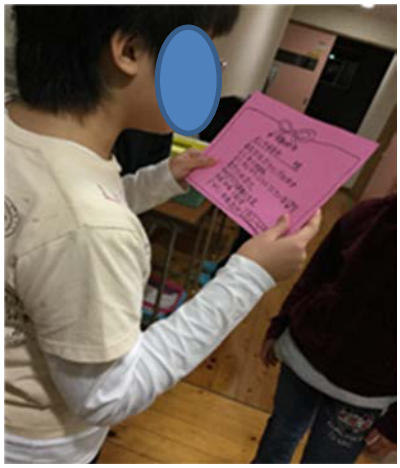


写真 12　Ａが表彰状を読み上げている様子

ウ　まとめ

上記に記載していないこともあるが、Ａの問題行動を解決するためにその都度指導員間でも会を開いている。その際、Ａのパニックの時の日付や行動、きっかけを用紙に記述したものをまとめることに決め、過去のＡのパニックを振り返れるようにした。

実際の支援については風呂掃除の表や講座、大会などＡの意思も尊重しながら取り組んだ。折り紙講座やボウリング大会などＡが好きなものに取り組むことによって落ち着いた時間を確保することができた。そして、皆と遊ぶ楽しさや得意な折り紙の腕前を披露し、称賛されることで得られる満足感もあり、Ａの存在を周りの人に認めてもらえる場も設定することができた。その結果、Ａ自身の行動にも変化が出てきており、友達の体調面を心配する様子が出てきたことや、遅れがあった日課にも沿うことができるようになってきている。

また、今回のＡの問題行動の解決に向けて支援に取り組む一方でＡの問題行動は子どもたちにとって平穏な寄宿舎生活を侵害するものであり、他の子どもたちとの関係性に課題が出てくることが懸念されていた。実際に、テレビ室でパニックとなった日はテレビ室が利用できず、Ａの大きい声やテレビを見ることができないと泣いてしまう子どももいた。しかし、そのようなことがあっても、他の子どもたちはＡのことを同じホームの仲間として普段通りにＡと接し、Ａ主催の企画にも自ら参加を希望するなど、思いやりのある行動を見せている。

今後の課題としては、回数は減ってきたものの自分の意思を主張したパニックが依然続いていることがあげられる。問題行動をその場で止めようと指導員が「～してはいけない」といった否定言葉を使うことによってＡの気持ちがさらに高揚し、パニックになり悪循環となるということもあった。それ以降、言葉がけには今まで以上に配慮している。また、Ａの希望のままに受け入れることでＡが『自分だけに』

という特別感を抱く可能性もあるため、Aとほかの子どもたちとの関係性を崩さないよう片方の意見だけを尊重せず、双方に配慮した支援が大切であると考える。今後も、今回のように落ち着いた時間の確保を行うことはそのままに、Aとほかの子どもたちがお互いを認め合える空間を築けていけるような支援、指導を行っていきたい。そのためにも引き続き、指導員間での情報共有や日々の引継ぎも大切にしていきたいと思う。

３　おわりに

認め合う気持ちを育む仲間づくりをテーマに、各ホームで支援に取り組んできた。相手を認めることは、相手を大切にすることでもあり、それはどういうことであるかを知るためには、まず自分が認められ大切にされるという体験が必要である。そのためには、寄宿舎を居心地のよい場所と感じ、安心して生活できるような集団作りが必要であった。特に１学期は新しい仲間を迎え、お互いの関係性も不安定な中、誤解や行き違い、踏み込みすぎた接触などトラブルも起きがちな時期でもある。そこで、一人一人に向き合う中でどういうことが自分を大切にすることであり、相手を思いやることであるかを理解させるための具体的な支援を行っていった。それぞれのホームからの実践報告にまとめられているように、個別に、あるいは全体を支援する中で、「認め合う気持ち」を育んでいくことができたと思う。

最終的に３学期の目標として、はとホームの「お互いを認め助け合う」、つばめ・すももホームの「思いやりの心と責任感を持つ」、を目指したわけであるが、この集録に記されているようにホーム年間支援計画を作成し、それに沿って工夫・研究しながら計画的に支援に取り組んできたことが一定の成果をあげることにつながっている。また、その手立ての一つとして学校とのケース会、スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーへの相談など、寄宿舎の外へもスキルを求めたことが視野を広げることにつながった。

今後も一人一人が抱える課題の解決のために、自己肯定感の充足を図れるよう気持ちに寄り添った支援に努めていきたい。

Ⅶ　本年度の研究のまとめ

本年度の校内研究は、研究テーマ「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点を生かした授業づくり」（３年計画）の１年次の取組であった。学習指導要領の改訂を受けてこのテーマを設定し、研修・研究を進めてきた。

まず、テーマにある「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）とは」という基礎について、高知大学教育学部喜多尾哲教授を招いて研修会を行った。この中では、現在の児童生徒の問題について丁寧な実態把握を行ったうえで、児童生徒に育てたい力やつけたい力、即ち目標を設定して取り組むことが大切であると教示いただいた。また、授業づくりにおいては、何ができるようになるか、何を学ぶかを最優先で考えることが重要であると話された。児童生徒たちは将来社会で生活するようになるため、その中で生きていくために、キャリア教育の視点を大切にしながら教育活動を行っていくことが望ましいことを学んだ。

夏期休業中には教育課程研究集会が本校で行われ、高知県教育委員会から新学習指導要領についての説明があった。改訂の趣旨と具体的内容は、喜多尾教授の話と重なる部分が多かったが、本校の研究においても全体像をつかむ良い機会となった。

11 月に行われた高等部の公開授業研究及び協議では、再び喜多尾教授に助言をいただく機会を設けることができた。高等部の授業は進路学習、体育、数学と多方面にわたった内容であったが、各グループでテーマに沿った学習指導を行った。協議は喜多尾教授の方から、授業の計画性や将来の生活を見据えた活動の在り方について質問形式で話され､短い時間であったが大変貴重な示唆をいただけた。小・中学部の教師からは、高等部が担当のこれまでの公開授業では作業学習が多かったが、他の授業が参観できて勉強になったとの意見を得ることができ、長期的なスパンでの計画性が問われていることに改めて気づく教師もいた。

12 月には、群馬大学の霜田浩信教授を招いて、「主体的・対話的で深い学び（アクティブラーニング）の視点を生かした授業づくり」と題して講演いただいた。主体的な学び、対話的な学び、深い学びと分けて、具体的な例を挙げて、何をどうすればよいのかを知らせていただけたことで、理解が深まった。また、主に主体的な学びのための応用行動分析やシステマティック・インストラクションの手法とはどういったものかを、ワークによって学べたことで、本校の教師が取り入れてみようと思える研修となった。

各学部・寄宿舎では、グループでの研修によって、１年を通してアクティブラーニングの視点というものを考え、実行してきた成果が示されている。

以上のように、この１年間のうちには学習指導要領改訂に向けての研修が進んできていると思われる。しかしながら、全ての教育活動における授業改善や工夫が、完全に行われているとは言い切れない。生徒主体の教育活動であるとか、話し合いをする授業をなど、漠然としたイメージで捉えられている部分もまだあるように見受けられる。今年度はこのテーマでの初年度にあたるため、基礎固めに取り組んだが、来年度からは、霜田教授の言う“本校における「主体的・対話的で深い学び」とは何を意味し、それをどう実行し、将来の何につながるのか”というところを具体的かつ明確にして取組を進めていきたいと考える。３年計画のうちには教師の異動もあり、研修・研究を深めていくにあたっては、より丁寧な研修や計画性が問われる。それらのニーズに応えられるよう努力し、児童生徒の学びが時代に沿ったより深まりのあるものになるよう研鑽を続けたい。

平成３０（２０１８）年２月　発行

高知県立日高養護学校
〒781-2151　高知県高岡郡日高村下分 60 番地
ＴＥＬ　0889 - 24 - 5306
ＦＡＸ　0889 - 24 - 5308
Ｅ-mail　hidaka-s@kochinet.ed.jp
http://www.kochinet.ed.jp/hidaka-s/